

72-89

282091  
H

法令全書

詔勅

朕貴族院伯子男爵議員選舉規則第十六條ニ依リ明治三十八年三月十一日ヲ以テ貴族院男爵議員一名闕員ノ爲ニ補闕選舉ヲ行フヘキコトヲ命ス

御名 御璽

明治三十八年一月九日(官報一月十日)

内閣總理大臣伯爵桂 太郎

朕貴族院伯子男爵議員選舉規則第十六條ニ依リ明治三十八年三月二十五日ヲ以テ貴族院男爵議員一名闕員ノ爲ニ補闕選舉ヲ行フヘキコトヲ命ス

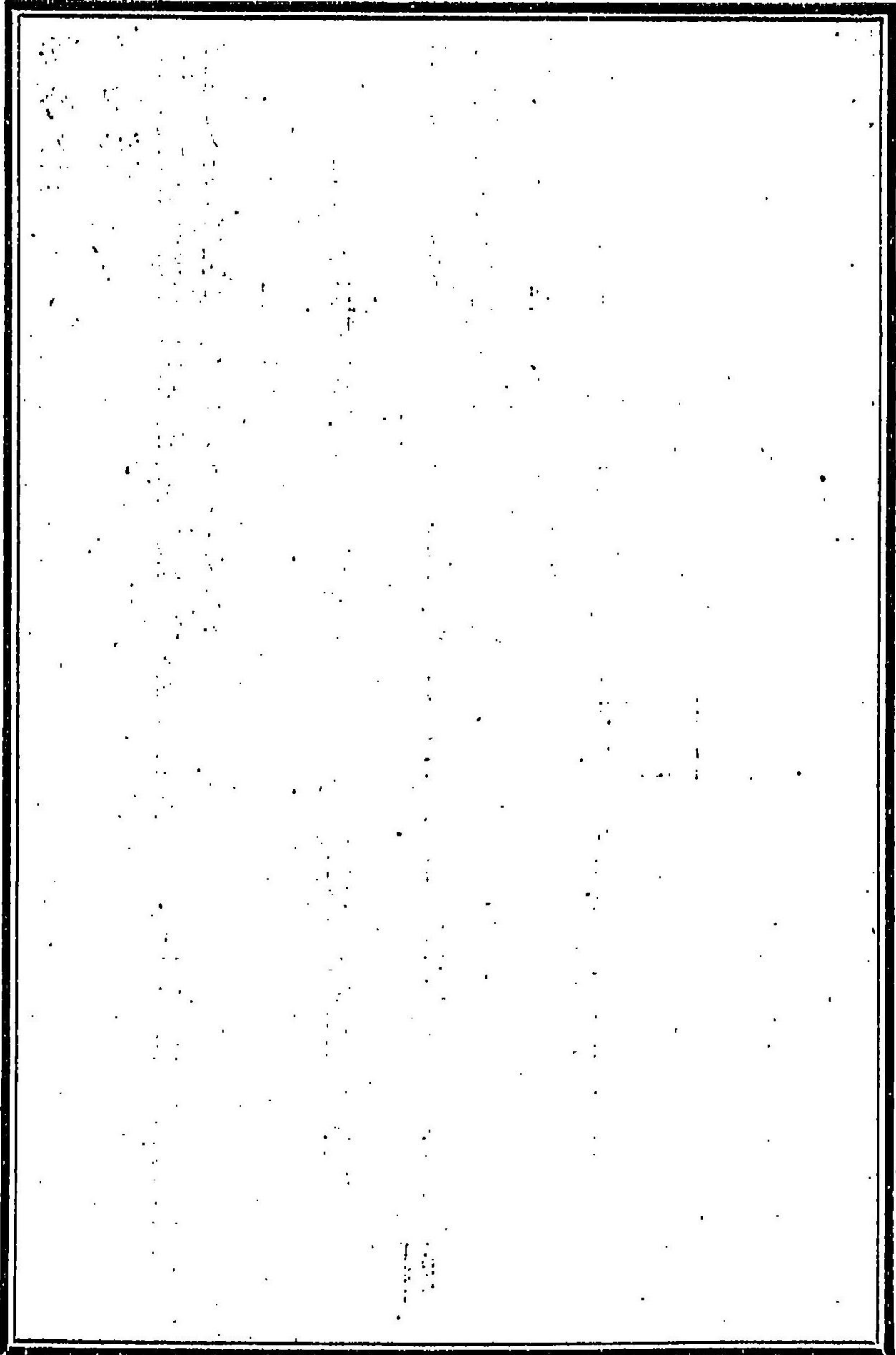
御名 御璽

明治三十八年一月二十五日(官報一月二十六日)

内閣總理大臣伯爵桂 太郎



明治三十八年二月 詔勅

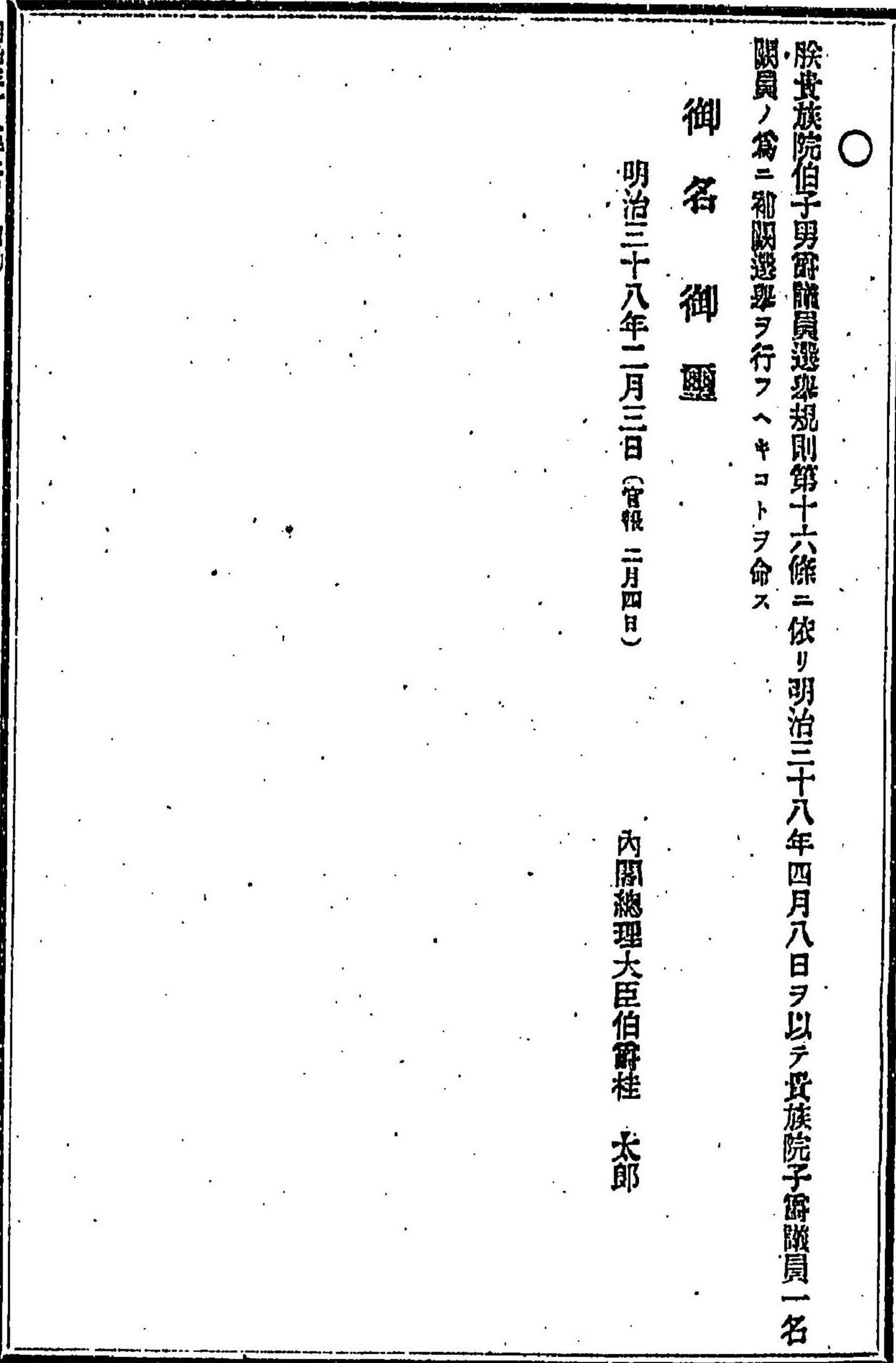


○ 朕貴族院伯子男爵議員選舉規則第十六條ニ依リ明治三十八年四月八日ヲ以テ貴族院子爵議員一名  
關員ノ爲ニ補關選舉ヲ行フヘキコトヲ命ス

御名 御璽

明治三十八年二月三日 (官報二月四日)

内閣總理大臣伯爵桂 太郎



○ 朕貴族院多額納稅者議員互選規則第二十四條ニ依リ神奈川縣ニ於テ貴族院多額納稅者議員(議員ノ爲ニ補闕選舉ヲ行フヘキコトヲ命ス)

御名 御璽

明治三十八年五月二十日(官報五月二十二日)

内閣總理大臣伯爵桂 太郎

朕貴族院伯子男爵議員選舉規則第十六條ニ依リ明治三十八年十二月十五日ヲ以テ貴族院男爵議員一名議員ノ爲ニ補選選舉ヲ行フヘキコトヲ命ス

御名 御璽

明治三十八年十月十日 (官報十月十一日)

内閣總理大臣伯爵桂 太郎

朕東洋ノ治平ヲ維持シ帝國ノ安全ヲ保障スルヲ以テ國交ノ要義ト爲シ夙夜懈ラズ以テ皇猷ヲ光顯スル所以ヲ念フス幸客歲露國ト釐端ヲ啓クニ至ル亦寔ニ國家自衛ノ必要已ムヲ得サルニ出テタリ開戰以來朕カ陸海ノ將士ハ内籌畫防備ニ勤メ外進攻出戰ニ勞シ萬艱ヲ冒シテ殊功ヲ奏ス在廷ノ有司帝國議會ト亦善ク其ノ職ヲ盡シテ以テ朕カ事ヲ獎メ軍國ノ經營内外ノ施設共ノ緩急ヲ愆ラス億兆克ク儉ニ克ク勤メ以テ國費ノ負擔ニ任シ以テ費用ノ供給ヲ豐ニシ舉國一致大業ヲ贊襄シテ帝國ノ威武ト光榮トヲ四表ニ發揚シメリ是固ヨリ我カ皇祖皇宗ノ威靈ニ順ルト雖抑亦文武臣僚ノ職務ニ忠ニ億兆民庶ノ奉公ニ勇ナルノ致ス所ナラヌムハアラヌ交戰二十閱月帝國ノ地歩既ニ固ク帝國ノ國利既ニ伸テ朕ノ恆ニ平和ノ治ニ汲々タル豈徒ニ武ヲ窮メ生民ヲレテ永ク鋒鏑ニ困マレムルヲ欲セムヤ

爾來彼我全權ノ間數次會商ヲ累々我ノ提議スル所ニレテ始ヨリ交戰ノ目的タルモノト東洋

ノ治平ニ必要ナルモノトハ露國其ノ要求ニ應レテ以テ和好ヲ欲スルノ誠ヲ明ニシテ朕全權委員  
ノ協定スル所ノ條件ヲ覽ルニ皆善ク朕カ旨ニ副フ乃チ之ヲ嘉納批准セリ朕ハ茲ニ平和ト光榮トヲ  
併セ獲テ上ハ以テ祖宗ノ靈靈ニ對シテ下ハ以テ不續ヲ後昆ニ貽スヲ得ルヲ喜ヒ汝有衆ト其ノ譽ヲ倍  
ニシ永ク列國ト治平ノ慶ニ頌ラムコトヲ思フ今ヤ露國亦既ニ舊盟ヲ尋テ帝國ノ友邦ナリ則チ普鄰  
ノ體ヲ復シテ更ニ益々敦厚ヲ加フルルニトシテ期ヒサルヘカラス  
惟フニ世運ノ進歩ハ頃刻息マズ國家内外ノ庶政ハ一日ノ懈ナカラムコトヲ要ス俄武ノ下益々兵備  
ヲ修メ戰勝ノ餘愈々治政ヲ張リ然レテ後始テ能ク國家ノ光榮ヲ無疆ニ保チ國家ノ進運ヲ永遠ニ扶  
持スヘシ勝ニ紐レテ自ラ裁抑スルヲ知ラス驕恣ノ念從テ生スルカ若キハ深ク之ヲ戒メサルヘカラ  
ズ汝有衆其レ善ク朕カ意ヲ體シ益々其ノ事ヲ勤メ益々其ノ業ヲ勵ミ以テ國家富強ノ基ヲ固クセムコ  
トヲ期セヨ

御名 御璽

明治三十八年十月十六日

- 内閣總理大臣 伯爵桂 太郎
- 兼外務大臣 伯爵山本權兵衛
- 海軍大臣 伯爵清浦 奎吾
- 農商務大臣 伯爵曾根 荒助
- 兼内務大臣 寺内 正毅
- 大藏大臣 波多野敬直
- 陸軍大臣 大浦 兼武
- 司法大臣 久保田 謙
- 遞信大臣
- 文部大臣

○ 朕帝國憲法第七條及第四十一條ニ依リ本年十二月二十五日ヲ以テ帝國議會ヲ東京ニ召集ス

御名 御璽

明治三十八年十一月十二日(官報十二月十三日)

- 内閣總理大臣 伯爵桂 太郎
- 兼外務大臣 伯爵山本權兵衛
- 海軍大臣 伯爵清浦 奎吾
- 農商務大臣 伯爵曾根 荒助
- 兼内務大臣 寺内 正毅
- 大藏大臣 波多野敬直
- 陸軍大臣 大浦 兼武
- 司法大臣 久保田 謙
- 遞信大臣
- 文部大臣

朕貴族院伯子男爵議員選舉規則第十六條ニ依リ明治三十九年二月九日ヲ以テ貴族院子爵議員一名  
關員ノ爲ニ補關選舉ヲ行フヘキコトヲ命ス

御名 御璽

明治三十八年十二月十三日(官報十二月十四日)

内閣總理大臣伯爵桂 太郎

朕帝國憲法第七條及職院法第五條ニ依リ十二月二十八日ヲ以テ帝國議會ノ開會ヲ命ス

御名 御璽

明治三十八年十二月二十六日(官報號外十二月二十七日)

- 内閣總理大臣兼 外務大臣 伯爵桂 太郎
- 文部大臣
- 海軍大臣 臣男爵山本權兵衛
- 農商務大臣兼 臣男爵清浦奎吾
- 內務大臣 臣男爵曾禰荒助
- 大藏大臣 臣男爵會禰荒助
- 陸軍大臣 寺內正毅
- 司法大臣 波多野敬直
- 遞信大臣 大浦兼武

法令全書

法律

朕帝國議會ノ協贊ヲ經テ爾非常特別稅法中改正法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十七年十二月三十一日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎  
内務大臣子爵芳川顯正  
農商務大臣男爵清浦奎吾  
大藏大臣男爵曾根荒助

法律第一號(宣稱一月二日)

非常特別稅法中左ノ通改正ス

第一條 臨時事件ニ因リ生シタル經費ヲ支辨スル爲本法ニ依リ租稅ヲ增徴シ若ハ賦課シ又ハ印紙ヲ増貼シ若ハ貼用セシム

第二條 左ニ掲クル租稅ニ付テハ關係法規ノ定メタル稅額ノ外左ノ割合ノ稅額ヲ增徴ス

- 一 地租
  - 市街宅地 地價百分ノ十七箇五
  - 郡村宅地 地價百分ノ五箇五
  - 其ノ他ノ土地 地價百分ノ三箇

二 營業稅

營業稅法ニ依ル稅額十五割

三 所得稅

第一種 所得

甲 株主二十一人以上又ハ株主及社員ノ數二十一人以上ヲ以テ組織シタル株式會社又ハ株式合資會社

所得稅法ニ依ル稅額十五割

乙 其ノ他ノ法人

所得金額五千圓未滿

所得稅法ニ依ル稅額八割

所得金額一萬圓未滿

所得稅法ニ依ル稅額九割

所得金額一萬五千圓未滿

所得稅法ニ依ル稅額十割

所得金額二萬圓未滿

所得稅法ニ依ル稅額十二割

所得金額三萬圓未滿

所得稅法ニ依ル稅額十七割

所得金額五萬圓未滿

所得稅法ニ依ル稅額二十三割

所得金額十萬圓未滿

所得稅法ニ依ル稅額三十割

所得金額十萬圓以上

所得稅法ニ依ル稅額四十割

第三種 所得

所得金額五百圓未滿

所得稅法ニ依ル稅額十割

所得金額千圓未滿

所得稅法ニ依ル稅額十一割

所得金額五千圓未滿

所得稅法ニ依ル稅額十三割

所得金額一萬圓未滿

所得稅法ニ依ル稅額十四割

所得金額二萬圓未滿

所得稅法ニ依ル稅額十五割

所得金額三萬圓未滿

所得稅法ニ依ル稅額十七割

所得金額五萬圓未滿

所得稅法ニ依ル稅額二十一割

所得金額十萬圓未滿

所得稅法ニ依ル稅額二十四割

所得金額十萬圓以上

所得稅法ニ依ル稅額二十七割

四 酒稅

酒造稅法ニ依ル酒類

第一種

一石ニ付金二圓

第二種

一石ニ付金三圓

第三種

一石ニ付金二圓

第四種

一石ニ付酒精分一度毎ニ金十錢

第五種

一石ニ付金一圓

麥酒

酒精又ハ酒精含有飲料

一石ニ付金二圓

原容量百分中純酒精ノ容量二十以下ノモノ

一石ニ付原容量百分中純酒精ノ容



沖繩縣酒類出港稅

量一箇毎ニ金十錢  
酒造稅法ニ依ル酒類ニ對スル増徴  
稅率ニ同

五 砂糖消費稅

- 第一種
- 第二種
- 第三種
- 第四種

百斤ニ付金一圓

百斤ニ付金二圓八十錢

百斤ニ付金四圓三十錢

百斤ニ付金四圓七十錢

六 醬油稅

醬油稅則第二條本文ニ依ル場合

醬油

溜

醬油稅則第二條但書ニ依ル場合

醬油

溜

諸味一石ニ付金五十錢

製成一石ニ付金五十錢

諸味一石ニ付金二十五錢

製成一石ニ付金二十五錢

七 登錄稅

不動產ニ關スル登記

登錄稅法第二條第三號ノ登記

登錄稅法第二條第四號ノ登記

不動產價格千分ノ二十

不動產價格千分ノ十

從來保有セル所有權ノ保存

華族世襲財產ノ創設

船舶ニ關スル登記

登錄稅法第三條第三號ノ登記

登錄稅法第三條第四號ノ登記

從來保有セル所有權ノ保存

登錄稅法第六條及第六條ノ二ニ依ル登錄稅

課稅標準ノ千分比例ヲ以テ稅率ヲ定メタルモノ

一箇所毎ニ又ハ一件毎ニ稅額ヲ定メタルモノ

課稅標準千分ノ一

稅額金十圓ナルトキ金五圓

稅額金五圓ナルトキ金二圓

稅額金三圓ナルトキ金一圓

稅額金二圓ナルトキ金一圓

稅額金一圓ナルトキ金五十錢

稅額金五十錢ナルトキ金二十錢

礦業ニ關スル登錄

試掘權ノ設定

増區又ハ増減區ニ依ル試掘權ノ變更

每一件金二十五圓

每一件金十圓

相續以外ノ原因ニ因ル探掘權ノ移轉  
探掘權ノ新規登錄  
増區又ハ増減區ニ因ル探掘權ノ變更  
相續以外ノ原因ニ因ル探掘權ノ移轉

每一件金十圓  
每一件金五十圓  
每一件金二十五圓  
每一件金二十五圓

八 取引所稅

商品有價證券  
國債及地方債證券

買賣各約定代金萬分ノ六  
同 萬分ノ二

九 狩獵免許稅

一等  
二等  
三等

金二十圓  
金二十圓  
金五圓

十 鑛區稅

試掘  
探掘

鑛區一千坪毎ニ一箇年金二十圓  
鑛區三千坪毎ニ一箇年金二十圓

十一 賣藥營業稅

每方劑一箇年ノ製造高ニ對スル定價總額二百圓未

滿ノモノ  
同五百圓未滿ノモノ  
同千圓未滿ノモノ

金一圓  
金三圓  
金五圓

同二千圓未滿ノモノ  
同三千圓未滿ノモノ  
同五千圓未滿ノモノ  
同一萬圓未滿ノモノ  
同二萬圓未滿ノモノ  
同三萬圓未滿ノモノ  
同五萬圓未滿ノモノ  
同七萬圓未滿ノモノ  
同十萬圓未滿ノモノ  
同十萬圓以上

金七圓  
金十圓  
金十五圓  
金二十圓  
金三十圓  
金四十圓  
金五十五圓  
金七十圓  
金八十五圓  
金百圓

十二 印紙稅

印紙稅法第四條ニ掲ケタル證書帳簿但シ約束手形  
及判取帳ヲ除ク  
判取帳  
約束手形

印紙稅金一錢  
印紙稅金五錢

金高千圓以下  
金高五千圓以下  
金高一萬圓以下  
金高二萬圓以下

印紙稅金二錢  
印紙稅金四錢  
印紙稅金十三錢  
印紙稅金二十八錢

金高三萬圓以下 印紙税金五十八錢  
 金高五萬圓以下 印紙税金一圓十八錢  
 金高十萬圓以下 印紙税金二圓三十八錢  
 金高十萬圓ヲ超スルモノ 印紙税金四圓九十八錢

十三 輸入税

大砲、小銃、拳銃、刀劍、砲彈、裝藥其ノ他諸兵器  
 權衡及尺度 從價五分  
 晴雨計 從價一割  
 坭塙(各種) 從價一割  
 刃物(別項ニ掲ケサルモノ) 從價五分  
 電燈器械及同部分品 從價五分  
 消防器及同部分品 從價五分  
 農具、工匠具及同部分品 從價一割  
 樂器及同附屬品 從價一割  
 理學器、化學器、測量器、外科器其ノ他諸學術器(別項ニ掲ケサルモノ) 從價五分  
 寫眞器及同部分品 從價一割五分  
 蓄音器及同部分品 從價一割  
 眼鏡及同部分品 從價一割

鐵銃及同附屬品

電話機及同部分品 從價一割

寒暖計 從價五分

關稅定率法附屬輸入稅表第二類ニ掲ケル物品但シ

生卵ヲ除ク 從價一割

生卵 從價一割五分

關稅定率法附屬輸入稅表第三類ニ掲ケル物品

甲 絹製及絹入ノモノ、金銀珠玉入ノモノ、白金

製、金製及銀製ノモノ 從價二割

乙 其ノ他各種 從價一割五分

關稅定率法附屬輸入稅表第四類ニ掲ケル物品但シ  
 酒精(アルコール)各種變性アルコール、各種酒精劑(阿片丁幾ヲ除ク)、龍腦、艾片、寫真用古魯胃膜及附屬ノ  
 沃度意撒兒、麝香、人造麝香、松脂、曹達灰及苛性曹達  
 ヲ除ク 從價五分

酒精(アルコール) 每リートル六錢

各種變性アルコール 每リートル六錢

各種酒精劑(阿片丁幾ヲ除ク) 每リートル六錢

龍腦及艾片 從價一割

審具用古布、胃膜及附屬ノ沃度意撒兒	從價一割
麝香及人造麝香	從價一割
關稅定率法附屬輸入稅表第五類ニ掲クル物品但シ 酸化古拔爾篤、金液、銀液及白金液、乾藍及ログウー トヲ除ク	從價五分
關稅定率法附屬輸入稅表第六類ニ掲クル物品但シ 應玻璃片(尋常ノモノ)、プレート、玻璃片(水銀ヲ塗 リタルト否トヲ別タス)、層玻璃及粉玻璃ヲ除ク	從價一割
關稅定率法附屬輸入稅表第七類ニ掲クル物品但シ 綿種子ヲ除ク	從價一割
綿種子	從價五分
關稅定率法附屬輸入稅表第八類ニ掲クル物品但シ 獸骨獸毛(羊毛、山羊毛及駝毛ヲ除ク)、牛皮及水牛 皮(生、乾若ハ鹽漬等ノ治理ヲ經サルモノ)、象牙、扇 象牙、隨甲、扇甲及貝殼ヲ除ク	從價五分
眞鍮	從價五分
條竿及板	從價五分
筒及管	從價五分
鐵釘	從價五分

銅	從價五分
條竿及板	從價五分
釘	從價五分
筒及管	從價五分
鐵	從價五分
銅貨及白銅貨	從價五分
日耳曼銀	從價五分
板、竿及線	從價五分
鐵及軟鋼	從價五分
鉛	從價五分
板	從價五分
筒及管	從價五分
鋼(軟鋼ニ非サルモノ)	從價五分
線(傘骨用凹形ノモノ)	從價五分
線索(電鍍シタルト否トヲ別タス)	從價五分
黃銅	從價五分
板	從價五分
條及竿	從價五分



- 支那絹織
  - 支那絹織子 従價一割
  - 支那絹織縲子 従價一割
  - 絹織縲子 従價一割
  - 刺繡絹布及刺繡絹縲布 従價一割
  - 其他各種ノ絹布（純絹ト他物ヲ交ヘタルトヲ別ス但シ絹ノ重量超過スルモノ） 従價一割
  - 麻縲絲 従價一割
  - フニルト縲 従價一割五分
  - 縲帷 従價一割
  - 甲 絹製及絹入ノモノ 従價一割五分
  - 乙 其他各種 従價一割五分
  - 鞞縲縲布 従價一割五分
  - 甲 絹入ノモノ 従價一割五分
  - 乙 其他各種 従價一割
  - 縲縲縲類 従價一割
  - 手巾 従價一割五分
  - 甲 綿製麻製及麻綿製ノモノ（單製） 従價一割五分
  - 乙 絹製及レニス製ノモノ 従價一割

- 蚊帳（各種） 従價一割五分
- 草布（家具等ニ用ルモノ） 従價一割五分
- 油布及リノリニユム（牀ニ用ルモノ） 従價一割五分
- 襪衣 従價一割五分
- 甲 綿製及絹入ノモノ 従價一割五分
- 乙 其他各種 従價一割五分
- 浴巾（單製連製ヲ別タス各種） 従價一割五分
- 綿線及等麻線 従價五分
- 縲絲（別項ニ掲ケサル各種） 従價五分
- 其他各種ノ布帛製品 従價五分
- 甲 絹製及絹入ノモノ 従價五分
- 乙 其他各種 従價五分
- 諸製造煙草 従價五分
- 支那酒（釀造シタルモノ） 従價五分
- 清酒 従價五分
- 各種ノ酒類也シ麥酒、黑麥酒、シヤムパン及類似ノ沸騰酒、支那酒（釀造シタルモノ）、ポルト、清酒、シエリ、ウヰエリ、ウヰエリト及葡萄酒（赤白ヲ別タス）ヲ除ク 従價五分
- 沈香 従價一割

琥珀

- 甲 加工セサルモノ 従價一割
- 乙 加工シタルモノ 従價一割
- 動物但シ牛馬、騾、驢、綿羊、山羊及鶏ヲ除ク 従價五分
- 石絨(板) 従價五分
- 竹材(工ヲ加ヘサルモノ) 従價五分
- 革帶、帆布帶及帆布管(機械ニ用ルモノ) 従價五分
- 衝球袋及附屬品 従價一割
- プラスチック、ゼラチン其ノ他類似ノ爆發藥、アトキ 従價一割
- トール及フニーズ 従價五分
- 磚瓦(建築用ノモノ) 従價一割
- ブラシ及帚(各種) 従價一割
- 杖及鞭 従價一割
- 乗車、自轉車及同部分品 従價一割
- 貨車 従價五分
- セリニロイド 従價一割
- 乙 エヲ加ヘタルモノ 従價五分
- 白壁及ホワイチング 従價五分
- 木炭及骨炭 従價五分

粘土(各種)

- 焦炭 従價五分
- 珊瑚(加工シタルト否ト別タス) 従價一割
- 苧麻繩索(船用ト否ト別タス) 従價五分
- 玻璃刀 従價五分
- 金剛砂 従價五分
- 金剛砂布及砂紙 従價五分
- 金剛砂砥其ノ他各種ノ砥石 従價五分
- 煙火(各種) 従價一割
- 造花 従價一割
- 縵線及天井線 従價一割
- 海繩 従價五分
- 家具(新故ヲ別タス別項ニ掲ケサルモノ) 従價一割
- テニス、クリケット、象棋其ノ他ノ遊戯具(別項ニ掲ケサルモノ) 従價一割
- 阿膠(普通) 従價五分
- 綿火藥 従價一割
- 火藥(各種) 従價一割
- 石膏 従價五分

象牙製品(別項ニ掲ケサルモノ)	從價一割五分
金銀細貨類(貴石、眞珠等ヲ嵌メタルト否ト別々ス)	從價一割
貼札(鑲鑽等ニ用ルモノ)	從價五分
ランプ、提燈及同部分品	從價一割
皮革製品(別項ニ掲ケサルモノ)	從價一割
麥草	從價五分
マツチ(各種)	從價一割
支那蓆(一卷四十碼)	從價五分
椰皮蓆	從價五分
其ノ他各種ノ地蓆	從價五分
油漆、水滌石版畫、着色石版畫、寫眞畫、法帖其ノ他	從價一割
別項ニ掲ケサル各種ノ書畫類	從價五分
瀝青、米釜兒及石炭釜兒	從價五分
巴黎灰	從價五分
骨牌(各種)	從價一割
石墨	從價五分
磁器及陶器(別項ニ掲ケサルモノ)	從價一割
貴石及眞珠	從價一割

貴石及眞珠(假製ノモノ)	從價一割
パテ井	從價五分
藤(割キタルト否ト別々ス)	從價五分
馬具	從價一割
白地	從價一割
靴襪(各種)	從價五分
吸煙器具(阿片吸煙具ヲ除ク)	從價一割
滑石(地粉ヲ別々ス)	從價五分
スバルナリ(輿船用ノモノ)	從價五分
海綿	從價五分
石類(別項ニ掲ケサルモノ)	從價五分
甲 縫製用其ノ他工作ヲ經サルモノ	從價一割
乙 裝飾用若ハ家具用其ノ他工作ヲ經タルモノ	從價一割
丙 肖像其ノ他彫刻シタルモノ	從價一割
海底電線及地下電線	從價五分
紫地	從價五分
化粧具匣	從價一割
靴甲製品	從價一割
玩具(各種)	從價一割



旅櫃提議及佩袋

從價一割

傘類

甲 網及網入ノモノ

從價一割五分

乙 其ノ他各種

從價一割

傘柄及傘手(金銀製ヲ除ク)

從價五分

汽船、帆船及舟艇

從價五分

紫檀器及黒檀器

從價一割

其ノ他税目中ニ掲ケサル生粗若ハ未製品但シ帽籠

製帽用裏革、紐鋼(時計彈條製造用及傘骨製造用)

モノヲ除ク

從價五分

其ノ他税目中ニ掲ケサル全製若ハ半製品

從價一割

前項第三號條主又ハ株主及社員ノ數ハ其ノ事業年度間ノ最多數ニ依ル

第二項第十一號ノ定價總額ハ前年中ノ總額ニ依ル

第三條 左ノ割合ニ依リ小切手ニ印紙税、砂金採取業者ニ砂金採取地稅、汽車、電車、汽船ノ乘客ニ通

行稅、織物ニ消費稅、糯米及粉ニ輸入稅ヲ課ス

一 小切手印紙稅

一通毎ニ金一錢

二 砂金採取地稅

採取區域一町毎ニ一箇年金三十錢  
採取區域一千坪毎ニ一箇年金三十

河床

採取區域一町毎ニ一箇年金三十錢  
採取區域一千坪毎ニ一箇年金三十

河床ニ非サルモノ

錢

三 通行稅

二百哩又ハ二百海裡以上

一等

金五十錢

二等

金二十五錢

三等

金四錢

二百哩又ハ二百海裡未滿

一等

金四十錢

二等

金二十錢

三等

金三錢

百哩又ハ百海裡未滿

一等

金二十錢

二等

金十錢

三等

金二錢

五十哩又ハ五十海裡未滿

一等

金五錢

二等

金三錢

三等

金一錢

四 織物消費稅

毛織物

毛織物以外ノ織物

價格百分ノ十五

從價百分ノ十

從價一割

從價一割五分

五 繭(各種)輸入税

從價一割五分

六 米及初輸入税

通行税ヲ賦課スヘキ場合ニ於テ汽車、電車又ハ汽船ニシテ等級ヲ分クサルモノニ在リテハ三等ノ税額ヲ適用シニ等級ニ分チタルモノニ在リテハ二等ノ税額ヲ適用シ四等級以上ニ分チタルモノニ在リテハ最初ノ二等級ヲ以テ一等ノ税額ヲ爲シ其ノ他ハ總テ三等ノ税額ヲ適用ス

貸切、定期又ハ回数乗船車若ハ多人數乗船車ノ契約ヲ爲シタル場合ニ於テハ通行税ハ第一項第三號税額ノ五倍トス

第五條ヲ第五條ノ一トシ次ニ左ノ六條ヲ加フ

第五條ノ二 行政訴訟ノ書類ニハ其ノ正本ニ左ノ金額ノ印紙ヲ貼用スヘシ但シ裁判所書記ニ口述シテ調書ヲ作ラシメタルトキハ其ノ調書ニ印紙ヲ貼用スヘシ

一 訴狀

金七圓

二 故障

金二圓

三 證據調ノ申立

金二圓

四 判決ノ送達ヲ求ムル申立

金二圓

五 期日ノ變更、辯論ノ延期又ハ辯論期日ノ指定ノ申立

金四十五錢

六 從參加ノ申請

金四十五錢

七 忌避ノ申請

金四十五錢

八 費用額確定ノ申請

金四十五錢

九 答辯書其ノ他前各號ニ掲ケサル申立又ハ申請

金二十五錢

裁判費用ヲ濟済スルコトノ假免除アリタル場合ノ外前項ニ依リ印紙ヲ貼用セサル行政訴訟ノ書類ハ其ノ效キモトス但シ印紙ヲ貼用セス又ハ貼用スルモ不足アルトキハ裁判所ハ相當印紙ヲ貼用セシメ之ヲ有效ナラシムルコトヲ得

第五條ノ三 小切手ノ印紙税ニ付テハ印紙税法第六條第八條第九條第十條第十三條及第十四條ノ規定ヲ適用ス

四條ノ規定ヲ適用ス

第五條ノ四 砂金採取地稅ヲ徵收スル場合ニ於テ一町未滿又ハ一千坪未滿ノ地畝ハ一町又ハ一千坪トシテ計算ス

千坪トシテ計算ス

第五條ノ五 砂金採取地稅ハ毎年十二月中ニ翌年分ヲ前納スヘシ

砂金採取業ノ許可又ハ採取地ノ變更ニ依リ新ニ負擔シ又ハ不足セル砂金採取地稅ニシテ初年ニ係ルモノハ之ヲ即納スヘシ

前項ニ依リ納付スヘキ砂金採取地稅ハ月割ヲ以テ之ヲ計算ス砂金採取業ノ廢止ノ年ニ係ルモノ亦同シ

ノ亦同シ

第五條ノ六 通行税ハ汽車、電車又ハ汽船營業者之ヲ徵收シ一箇月毎ニ取經メ翌月十日迄ニ之ヲ政府ニ納付スヘシ

汽車、電車又ハ汽船營業者カ前項ニ依リ徵收スヘキ通行税ヲ納付セサルトキハ國稅徵收法ニ依リ該營業者ヨリ之ヲ徵收ス

依リ該營業者ヨリ之ヲ徵收ス

外國行ノ汽船ニ乗シ外國ニ赴ク者ニハ通行税ヲ課セシム

當該官吏ハ汽車、電車又ハ汽船營業者ノ帳簿書類ヲ検査スルコトヲ得

第五條ノ七 繭、米及粉輸入税ニ付テハ關稅法及關稅定率法中有稅品ニ關スル規定ヲ準用ス

第六條 左ニ掲クルモノニ付テハ命令ノ定ムル所ニ依リ其ノ消費税ヲ免除ス

一 外國ニ輸出スル織物又ハ製品トナシテ外國ニ輸出セムトスル織物

二 製造者ノ自用ニ供スル織物

消費税ヲ納付シタル織物又ハ之ヲ以テ製造シタル物品ヲ外國ニ輸出シタルトキハ命令ノ定ムル所ニ依リ交付金又ハ相當印紙ヲ交付ス

第七條 毛織物ノ消費税ハ製造場、稅關又ハ保税倉庫ヨリ毛織物ヲ引取ルトキ引取人之ヲ納付ス

毛織物以外ノ織物ノ消費税ハ製造場、稅關又ハ保税倉庫ヨリ織物ヲ移出スル前之ニ相當印紙ヲ

貼用シ税金ノ納付ニ代フヘシ但シ移出前織物ノ價格ニ依リ之ニ相當スル税金ヲ納付シ織物ニ稅

金納付済ノ電印ヲ受ケタルトキハ印紙ヲ貼用スルコトヲ要セシム

印紙ヲ貼用スヘキ場合ニ於テ稅額一錢未満ノ端數ハ總テ一錢トシテ計算ス

第二項ニ依リ印紙ノ貼用、消印及税金納付済ノ電印ニ關スル方法ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第八條ヲ左ノ如ク改ム

第八條ノ一 消費税額ニ相當スル擔保物ヲ提供シタルトキハ政府ハ三箇月以内ノ期間ヲ以テ毛

織物消費税ノ徵收ヲ猶豫ス

第八條ノ二 左ノ場合ニ於テハ命令ノ定ムル所ニ依リ消費税ヲ納付セシメテ織物ノ移出ヲ爲ス

コトヲ得

一 政府ノ承認ヲ得テ他ノ製造場ニ移出シ又ハ貯藏場ニ藏置スル爲メ織物ヲ移出スルトキ

二 政府ノ承認ヲ得テ染色、捺染、刺繡其ノ他ノ加工ヲ爲ス爲メ製造場又ハ藏置場ヨリ織物ヲ移

出スルトキ

三 賃織場ヨリ賃織依頼者ニ織物ヲ引渡ストキ

四 一定ノ場所ニ於テ消費税ヲ納付スル爲メ政府ノ定ムル條件ニ從ヒ織物ヲ移出スルトキ

五 輸出ノ目的ヲ以テ製造セル特殊ノ織物ニシテ製造場ニ於テ政府ノ免稅電印ヲ受ケタル

トキ

前項ノ場合ニ於テハ移出先ヲ以テ製造場ト看做シ移出先ノ營業人ヲ以テ製造者ト看做ス

第八條ノ三 消費税ヲ納付シ製造場ヨリ引取リタル毛織物ヲ再ヒ其ノ製造場ニ戻入シタル場合

ニ於テ其ノ種類及數量ニ付政府ノ承認ヲ受ケタルトキハ其ノ織物ヲ製造場ヨリ引取ルモ更ニ

消費税ノ徵收ヲ爲サス

第九條第一項中「製造場」ヲ第八條ノ二ノ場合ノ外製造場ニ改ム

同條第五項ノ次ニ左ノ二項ヲ加フ

第八條ノ二ノ場合ノ外製造場、稅關又ハ保税倉庫ヨリ毛織物以外ノ織物ヲ移出セムトスル者ハ

之ニ其ノ價格ヲ表記シ消費税ニ相當スル印紙ヲ貼用スヘシ但シ第七條第二項但書ニ該當スル場

合ハ此ノ限ニ在ラズ

前項價格表記ノ方法ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第十條及第十一條中「又ハ第八條」ヲ「第八條ノ一、第八條ノ二又ハ第八條ノ三」ニ毛織物又ハ石油

ニ改ム

明治三十八年一月 法律 第一號

三五

ウ「織物」ニ改ム

第十二條 織物ヲ製造又ハ販賣セムトスル者ハ政府ニ申告スヘシ但シ自用ニ供スル織物ノミヲ製造セムトスル者ハ此ノ限ニ在ラス  
第十三條 左ノ如ク改ム

第十三條ノ一 織物製造者ハ其ノ製造場ニ於テ織物ノ賣買業ヲ兼營スルコトヲ得ス但シ政府ノ總許ヲ得製造ノ場所ト販賣ノ場所トヲ區別シタル場合ハ此ノ限ニ在ラス

第十三條ノ二 織物販賣者印紙ヲ貼用シタル織物ヲ其ノ表記價格ヲ超エテ販賣セムトスルトキハ販賣者ハ價格ヲ改記シ之ニ相當スル印紙ヲ増貼スヘシ

第十四條第十五條第十六條第二十條第二十一條中「毛織物又ハ石油ヲ織物」ニ改ム  
第十七條 左ノ如ク改ム

第十七條ノ一 左ノ各號ノ一ニ該當スル者ハ消費稅五倍ニ相當スル罰金ニ處シ直ニ其ノ税金ヲ徵收ス但シ罰金額ハ十圓ヲ下ルコトヲ得ス

一 自用ニ供スル場合ノ外政府ニ申告セシメテ織物ヲ製造シタルトキ  
二 外國ニ輸出スルモノトシテ消費稅ヲ免除セラレタル織物又ハ之ヲ以テ製造シタル物品ヲ内地ニ於テ消費セシメハ内地ニ於テ消費スル目的ヲ以テ之ヲ讓渡シタルトキ

三 第八條ノ二ニ依リ移出シタル織物ヲ其ノ定メラレタル移出先ニ移入セス又ハ之ヲ消費シタルトキ

四 第十條又ハ第十一條ノ禁令ヲ犯シタルトキ

第十七條ノ二 左ノ各號ノ一ニ該當スル者ハ脱稅高五倍ニ相當スル罰金ニ處シ直ニ其ノ税金ヲ

徵收ス但シ罰金額ハ五圓ヲ下ルコトヲ得ス

一 印紙ヲ貼用メシキ織物ニシテ相當印紙ノ貼用ナキモノヲ販賣シタルトキ

二 第十三條ノ二ニ依ラズシテ印紙ヲ貼用シタル織物ヲ其ノ表記價格ヲ超エテ販賣シタルトキ

第十七條ノ三 織物販賣者印紙ヲ貼用メシキ織物ニシテ相當印紙ノ貼用ナキモノヲ所持シタルトキハ五圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處ス

收稅官吏前項ノ犯則ヲ發見シタルトキハ處罰セラレタルト否トヲ問ハズ販賣者ノ費用ヲ以テ其ノ織物ニ相當印紙ヲ貼用スルコトヲ得

前項ニ依ル費用ノ徵收ハ國稅徵收法ノ規定ヲ準用ス

第十八條第一號中「毛織物又ハ石油ヲ織物」ニ改ム次ニ左ノ二號ヲ加ヘ第二號ヲ第四號ニ改ム

二 織物ニ印紙ヲ貼用メシキ場合ニ於テ命令ノ定メタル方法ニ依リ貼用又ハ消印ヲ爲ササルトキ

三 織物ニ價格ヲ表記スルキ場合ニ於テ命令ノ定メタル方法ニ依リ表記ヲ爲ササルトキ

第二十二條第三項中「營業稅及所得稅」ヲ「營業稅所得稅及釐區稅」ニ改ム

第二十四條 削除

第二十五條 削除

附則

本法ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス但シ不動産及船舶ニ關スル登録稅ニ關シテハ明治三十八年四月一日ヨリ、鐵業ニ關スル登録稅及試掘釐區稅ニ關シテハ鐵業法施行ノ日ヨリ、毛織物以外ノ織物消費

税ニ關シテハ明治三十八年二月一日ヨリ輸入税ニ關シテハ本法發布後六箇月ヲ經テ之ヲ施行ス  
 地租營業稅所得稅 賣藥營業稅ニ關シテハ明治三十八年分ヨリ本法ヲ適用ス但シ明治三十八年分  
 賣藥營業稅前半年分ノ増徴額ハ本法施行後一箇月内ニ之ヲ納ムヘシ  
 明治三十八年分釐區稅ノ増徴額及砂金採取地稅ハ本法施行ノ月ヨリ月割ヲ以テ計算シ本法施行ノ  
 日ヨリ六十日以内ニ之ヲ納ムヘシ  
 本法施行前鑛業條例ニ依リ鑛業ニ關スル出願ヲ爲シ既ニ非常特別稅法ニ依ル登録稅ノ増徴額ヲ納  
 ムタル者鑛業法ニ依リ其ノ事項ニ付鑛業原簿ニ登録ヲ受クルトキハ更ニ本法ニ依ル増徴額ヲ納ム  
 ルコトヲ要セス  
 本法施行前ヨリ織物ヲ製造又ハ販賣シ本法施行後引續キ之ヲ製造又ハ販賣セムトスル者ハ本法施  
 行後三十日以内ニ政府ニ申告スヘシ但シ毛織物ヲ製造スル者及自用ニ供スル毛織物以外ノ織物ノ  
 ミヲ製造スル者ニ關シテハ此ノ限ニ在ラス  
 前項ノ期間内ハ從前ノ製造又ハ販賣ヲ繼續スルコトヲ得  
 本法施行ノ際織物販賣者ノ所持スル毛織物以外ノ織物ニハ其ノ價格百分ノ十二相當スル印紙ヲ貼  
 用スヘシ但シ織物販賣者ハ本法施行ノ月ヨリ毎月ノ販賣高百分ノ十二相當スル金額ヲ其ノ翌月ヨ  
 リ一箇年以内ニ政府ニ納付スルノ條件ヲ以テ印紙貼用ノ免除ヲ請フコトヲ得  
 前項但書ニ依リ印紙免除ノ請求ヲ爲サトスル者ハ本法施行後二十日以内ニ本法施行ノ際ニ所持  
 シタル毛織物以外ノ織物ノ數量價額ヲ記載シ其ノ旨政府ニ申請スヘシ  
 本法施行ノ際織物ヲ販賣スル者ニハ本法施行後三十日以内ニ限リ第十七條ノ三ノ規定ヲ適用セス  
 附則第七項ニ依リ印紙ヲ貼用スヘキ場合ニ於テハ第七條第二項乃至第四項ノ規定ヲ準用ス

附則第八項ニ依リ印紙貼用ノ免除ヲ得タル場合ニ於テハ其ノ織物ニ移出前稅金納付濟ノ證印ヲ受  
 クヘシ但シ小賣ニ供スルモノハ此ノ限ニ在ラス  
 附則第八項ニ依リ印紙貼用ノ免除ヲ得タル者ハ毎月其ノ織物販賣高ヲ政府ニ申告スヘシ  
 附則第八項ニ依リ印紙貼用ノ免除ヲ得タル者ノ納ムヘキ金額ニ關シテハ國稅徵收法ノ規定ヲ準  
 用ス

御名 御璽

明治三十七年十二月三十一日

内閣總理大臣 伯耆 桂 太郎  
大藏大臣 野村 浩吉

法律第二號(官報一月一日)

關稅定率法附屬輸入稅表中左ノ通改正ス

第二種中「五一四ノ一鐵礦」ヲ削リ「五一四ノ二」ヲ「五一四ノ一」ニ改メ「五一八ノ次」ニ左ノ如ク加ヘ  
 以下「五一八ノ四」迄順次繰下ク

五一八ノ一 金銀礦及鐵礦

附則

本法ハ發布後六箇月ヲ經テ之ヲ施行ス

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル酒造稅法中改正法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十七年十二月三十一日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎  
大藏大臣男爵曾根荒助

法律第三號(官報一月二日)  
酒造稅法中左ノ通改正ス

第一條第一條ノ一トシテ左ノ五條ヲ加フ

第一條ノ二 此ノ稅法ニ於テ清酒ト稱スルハ米、米麴及水ヲ原料トシ醱酵セシメ又ハ酒酵母ヲ加ヘテ醱酵セシメ之ヲ濾過シタルモノヲ謂フ  
左ニ掲クルモノハ清酒ト看做ス

一 前項原料ノ外麥、粟、玉蜀黍、稗、清酒粕又ハ燒酎ヲ原料トシ醱酵セシメ又ハ酒酵母ヲ加ヘテ醱酵セシメ之ヲ濾過シタルモノ

二 清酒又ハ清酒ト看做シタルモノヲ粕濾シタルモノ

三 清酒又ハ前二號ニ依リ清酒ト看做シタルモノニ其ノ容量百分ノ一以内ノ燒酎又ハ酒精ヲ混和シタルモノ

第二條ノ三 此ノ稅法ニ於テ濁酒ト稱スルハ米、米麴及水ヲ原料トシテ醱酵セシメ又ハ酒酵母ヲ加ヘテ醱酵セシメ之ヲ濾過セサルモノヲ謂フ

前項原料ノ外麥、粟、玉蜀黍若ハ稗ヲ原料トシ醱酵セシメ又ハ酒酵母ヲ加ヘテ醱酵セシメ之ヲ濾過セサルモノハ濁酒ト看做ス

第一條ノ四 此ノ稅法ニ於テ白酒ト稱スルハ米又ハ米麴ト清酒、濁酒、味淋、燒酎又ハ酒精トヲ混和シテ醱酵シタルモノヲ謂フ

前項原料ノ外水ヲ混和シテ醱酵シタルモノハ白酒ト看做ス

第二條ノ五 此ノ稅法ニ於テ味淋ト稱スルハ米及米麴ト清酒、味淋、燒酎又ハ酒精トヲ混和シテ濾過シタルモノヲ謂フ

前項原料ノ外味淋粕又ハ水ヲ混和シテ濾過シタルモノハ味淋ト看做ス

第一條ノ六 此ノ稅法ニ於テ燒酎ト稱スルハ清酒粕ヲ蒸餾シタルモノヲ謂フ

左ニ掲クル物品ヲ原料トシテ蒸餾シタルモノハ燒酎ト看做ス

一 清酒

二 濁酒

三 味淋粕

四 米、麥、粟、黍、稗若ハ甘藷ト麴及水トヲ原料トシ醱酵セシメ又ハ酒酵母ヲ加ヘテ醱酵セシメタルモノ

第四條第一項ヲ左ノ如ク改ム

酒類ヲ製造スル者ニハ其ノ造石數ニ應ジ左ノ割合ヲ以テ造石稅ヲ課ス

第一種 酒精分二十度以下ノ清酒、濁酒、白酒、味淋及酒

酒精分二十度以下ノ燒酎

第二種 酒精分三十五度以下ノ燒酎

第三種 酒精分四十度以下ノ燒酎

一石ニ付 金十五圓

一石ニ付 金十八圓

一石ニ付 金三十圓

第四種 酒精分四十五度以下ノ燒酎

一石ニ付 金二十三圓

第五種 酒精分二十度ヲ超ケル清酒、濁酒、白酒、味淋及酒

精分四十五度ヲ超ニル燒酎

一石ニ付 酒精分一度毎ニ金七十

五錢

第十二條第三號中第二種ノ酒類ヲ燒酎ニ改ム

第二十條 削除

第二十一條 削除

第二十二條中「酒母、醱又ハ」ヲ削ル

第二十三條 削除

第二十三條ノ二 削除

第三十三條 削除

第四十條 削除

附 則

本法ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

〔參照〕

法律第二十八號酒稅法(明治三十九年三月二十八日官報)抄録

- 第四條 酒類ヲ製造スル者ニハ其ノ造石數ニ應ジテ左ノ割合ヲ以テ造石稅ヲ課ス
  - 一石ニ付 金十五圓
- 第一種 酒精分二十度以下ノ清酒、濁酒、白酒、味淋及酒類
  - 一石ニ付 金十六圓
- 第二種 酒精分四十五度以下ノ燒酎
  - 一石ニ付 金十五圓
- 第三種 酒精分二十度以下ノ清酒、濁酒、白酒、味淋及酒類
  - 一石ニ付 金十五圓

第十二條 左ノ酒類ハ其ノ造石稅ヲ免除スルコトヲ得但シ製造場外ニ移出シタルモノハ此ノ限ニ在ラス

三 廢敗シタル酒類又ハ災害ニ罹リ飲用スヘカラサルニ至リタル酒類ニシテ第二種ノ酒類ノ製造ニ供スルモノ

第二十條 酒類ヲ製造セサル者酒母又ハ醱ヲ製造セムトスルトキハ、政府ノ免許ヲ受ケ酒類ヲ製造スル者ト等シク其ノ検査監督ヲ受クハシ

第二十一條 酒類ヲ製造セサル者ノ製造シタル醱ハ他人ニ讓渡シ、賣入シ、飲料トシテ消費シ又ハ政府ノ承認ヲ受ケシテ製造場外ニ移出スルコトヲ得ス

第二十二條 免許ヲ受ケシテ酒母、醱又ハ酒類ヲ製造シタル者ハ五十圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處ス但シ直ニ造石稅ヲ賦課徴收スルコトヲ妨ケズ

第二十三條 酒類ヲ製造セサル者第二十一條ノ禁令ヲ犯シタルトキハ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十三條ノ二 免許ヲ受ケシテ酒母、醱ヲ製造シタル者又ハ第二十一條ノ禁令ヲ犯シタル者ハ濁酒ヲ製造シタル者トシ其ノ製造ニ係ル酒母、醱、總石數ニ對シテ造石稅ヲ課ス

前項ノ造石稅ハ第六條ノ納期ニ依ラズ直ニ之ヲ納ムヘシ

第三十三條 第二十九條乃至第三十二條ハ酒類ヲ製造セサル者ニシテ酒母又ハ醱ヲ製造スル者ニモ適用ス

第四十條 酒類ヲ製造スル者ハ府縣都市若ハ稅務署管内ヲ一區域トシテ酒造組合ヲ設クヘシ但シ土地ノ狀況ニ依リ郡市若ハ稅務署管内ヲ一區域トシテ酒造組合ヲ設クヘシ但シ土地ノ狀況ニ依リ郡市組合ニ關スル規定ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

朕帝國議會ノ協贊ヲ經テル酒精及酒精含有飲料稅法中改正法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御 名 御 璽

明治三十七年十二月三十一日

内閣總理大臣 伯耆 桂 太郎

大藏大臣 男爵 曾 爾 荒助

法律第四號(官報一月一日)

酒精及酒精含有飲料稅法中ノ通改正ス

第三條ノ二 本法ニ於テ葡萄酒ト稱スルハ葡萄ノ汁液ヲ醱酵セシメタルモノヲ謂フ

左ニ掲タルモノハ葡萄酒ト看做ス

- 一 葡萄ノ汁液ニ糖分ヲ補充シテ其ノ百分ノ二十四ニ達スル限度迄精製糖ヲ加ヘテ醱酵セシメタルモノ但シ葡萄ノ汁液一石ニ付精製糖二十五斤ヲ超ユルモノハ此ノ限ニ在ラス
- 二 葡萄ノ汁液又ハ前號ニ依リ精製糖ヲ加ヘタル葡萄ノ汁液ヲ純炭酸石灰ヲ以テ除酸シ醱酵セシメタルモノ
- 三 葡萄酒又ハ前二號ニ依リ葡萄酒ト看做シタルモノニ其ノ容量百分ノ一以内ノ酒精ヲ混和シタルモノ

第三條ノ三 本法ニ於テ果實酒ト稱スルハ葡萄ヲ除クノ外果實ノ汁液ヲ醱酵セシメタルモノヲ謂フ

葡萄ヲ除クノ外果實ノ汁液ニ命令ノ定ムル所ニ依リ其ノ糖分ヲ補充シ又ハ其ノ酸ヲ稀釋シ醱酵セシメタルモノハ果實酒ト看做ス

第四條中及葡萄酒ヲ以テ醱酵シタル葡萄酒ヲ削ル

第二十四條ノ二 葡萄酒及果實酒ニハ第五條 第十三條 第十四條及第十九條乃至第二十三條ノ規定ニ限リ本法ヲ適用ス

免許ヲ受ケヌシテ葡萄酒又ハ果實酒ヲ製造シタル者ハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

附則  
本法ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

本法施行前ヨリ葡萄酒ヲ製造シ本法施行後引續キ之ヲ製造セヨトスル者ハ本法施行後三箇月以内ニ政府ノ免許ヲ受クヘシ其ノ期間内ハ従前ノ製造ヲ繼續スルコトヲ得

〔參照〕

法律第八號酒類及酒類會社取締法(明治三十四年三月三十日)抄録  
第四條 清酒(白濁味醂、梅酒、麥酒、ビール)及葡萄酒ヲ以テ醱酵シタル葡萄酒ニハ本法ヲ適用セス

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル麥酒稅法中改正法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御 名 御 璽

明治三十七年十二月三十一日

内閣總理大臣 伯耆 桂 太郎  
大藏大臣 岩倉 備前 充助

法律第五號(官報一月一日)

麥酒稅法中左ノ通改正ス

第一條ニ左ノ二項ヲ加フ

本法ニ於テ麥酒ト稱スルハ麥芽、ホップ及水ヲ原料トシ麥酒酵母ヲ加ヘテ醱酵セシメタルモノヲ謂フ

前項原料ノ外麥芽ノ重量十分ノ三以内ノ米ヲ原料トシ麥酒酵母ヲ加ヘテ醱酵セシメタルモノハ麥酒ト看做ス

附則

本法ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス



朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル沖繩縣酒類出港稅則中改正法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十七年十二月三十一日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎  
大藏大臣男爵曾禰荒助

法律第六號(宣報一月一日)

沖繩縣酒類出港稅則中左ノ通改正ス

第一條 沖繩縣内ニ於テ製造シタル清酒、濁酒、白酒、味淋又ハ燒酎ヲ帝國内ノ他ノ地方へ移出スル  
トキハ旅客ノ携帶品タルト否トヲ問ハス其ノ石數ニ應シ酒造稅法第四條ノ稅率ニ依リ出港稅ヲ  
課ス

附則

本法ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

(參照)

勅令第十二號沖繩縣酒類出港稅則(明治二十一年三月二十二日宣報)抄錄

第一條 沖繩縣内ニ於テ製造シタル清酒、濁酒、白酒、味淋又ハ燒酎ヲ帝國内ノ他ノ地方へ移出スルトキハ旅客ノ携帶品タル  
ト否トヲ問ハス其ノ石數ニ應シ左ノ割合ヲ以テ出港稅ヲ課ス  
第一種 白濁酒類 一石ニ付 金十五圓  
第二種 燒酎類 一石ニ付 金十六圓  
滿氏除濕器十五度ノ時ニ於テ原容積百分中純酒精ノ容積第一種ニ在リテハ二十、第二種ニ在リテハ四十五ヲ越スルモノハ前  
項ノ割合ニ依ラヌ一石ニ付原容積百分中純酒精ノ容積一箇毎ニ金七十五圓ノ割合ヲ以テ酒類ノ石數ニ應シ出港稅ヲ課ス  
前項ニ於テ純酒精ト稱スルハ滿氏除濕器十五度ノ時ニ於テ〇・七九四七ノ比重ヲ有スル酒精トス

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル酒母、醱及醱取辦法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十七年十二月三十一日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎  
大藏大臣男爵曾禰荒助

法律第七號(宣報一月一日)

酒母、醱及醱取辦法

第一條 本法ハ酒造稅法ニ依リ酒類ノ製造免許ヲ受ケヌシテ酒母又ハ醱ヲ製造スル者、販賣ノ爲  
ニ醱ヲ製造スル者及醱ヲ請買スル者ニ之ヲ適用ス

第二條 酒母、醱又ハ醱ヲ製造セムトスル者ハ製造場一箇所毎ニ政府ノ免許ヲ受クヘシ

第三條 酒母、醱又ハ醱ノ製造者及醱ノ請買者ハ帳簿ヲ調製シ酒母、醱又ハ醱ノ製造出入ニ關スル  
事實ヲ詳細明瞭ニ記載スヘシ

第四條 收稅官吏ハ酒母、醱若ハ醱ノ製造場又ハ醱ノ販賣場ニ臨ミ酒母、醱又ハ醱、其ノ原料、製造  
用容器、器具、器械、建築物若ハ帳簿書類ヲ検査スルコトヲ得

收稅官吏監督上必要ト認ムルトキハ前項ノ物件ニ封印ヲ施スコトヲ得

第五條 收稅官吏ハ運搬中ニ在ル酒母、醱又ハ醱ヲ検査シ其ノ出所又ハ到達先ヲ質問スルコトヲ  
得

前項ノ場合ニ於テ監督上必要ト認ムルトキハ收稅官吏ハ其ノ運搬ヲ停止シ又ハ荷物若ハ船車ニ  
封印ヲ施スコトヲ得

第六條 酒母、醱又ハ醱ノ製造者其ノ製造ヲ廢止スルモ製造場内ニ酒母、醱、製造用容器、器具又

ハ器械ノ現存スル間ハ收稅官吏ハ其ノ製造場ニ臨ミ建築物又ハ其ノ現在品ヲ検査シ又ハ之ニ封印ヲ施スコトヲ得

第七條 醱ハ之ヲ釀液シ、賣入シ、飲料トシテ消費シ又ハ收稅官吏ノ承認ヲ受ケステ製造場外へ移出スルコトヲ得ス

第八條 酒母ハ政府ノ交付シタル買入認許證ヲ所持スル者ニ讓渡スノ外讓渡シ又ハ賣入スルコトヲ得ス

酒母ハ政府ノ交付シタル買入認許證ヲ所持スル者ニ讓渡シタル場合ノ外收稅官吏ノ承認ヲ受ケステ製造場外へ移出スルコトヲ得ス

第九條 免許ヲ受ケステ酒母、醱若ハ麹ヲ製造シタル者又ハ第七條若ハ第八條ニ違反シタル者ハ三十圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處シ仍共ノ酒母、醱ハ酒酒ト看做シ酒造稅法ニ依リ其ノ總石數ニ對シ直ニ造石稅ヲ徵收ス

第十條 酒母、醱又ハ麹ノ検査ヲ免カレ又ハ免カレムトシタル者ハ十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス

第十一條 酒母、醱若ハ麹ノ製造者又ハ麹ノ請買者酒母、醱又ハ麹ノ製造出入ニ關スル帳簿書類ヲ隱匿シタルトキハ五圓以上百圓以下ノ罰金ニ處シ帳簿ヲ調製セス又ハ其ノ記載ヲ怠リ若ハ不正ノ記載ヲ爲シタルトキハ三十圓以下ノ罰金ニ處ス

第十二條 收稅官吏ノ尋問ニ對シ虚偽ノ答辯ヲ爲シ又ハ收稅官吏ノ職務執行ヲ拒ミ之ヲ忌避シ若ハ之ニ支障ヲ加ヘタル者ハ三十圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス其ノ刑法ニ正條アルモノハ刑法ニ依リ

第十三條 本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ノ規定ニ違反シタル者ニハ刑法ノ減輕、再犯加重、數罪併發ノ例ヲ用ル

第十四條 酒母、醱若ハ麹ノ製造者又ハ麹ノ請買者未成年者又ハ禁治產者ナルトキハ本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ノ規定ニ依リ營業者ニ適用スヘキ罰則ハ之ヲ法定代理人ニ適用ス但シ其ノ營業ニ關シ成年者ト同一ノ能力ヲ有スル未成年者ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

第十五條 酒母、醱若ハ麹ノ製造者又ハ麹ノ請買者ハ其ノ代理人、戶主、家族、同居者、雇人其ノ他ノ從業者ニシテ其ノ業務ニ關シ本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ノ規定ニ違反シタルトキハ自己ノ指揮ニ出サルノ故ヲ以テ處罰ヲ免ルルコトヲ得ス

第十六條 間接國稅犯則考處分法及明治三十二年法律第五十二號ハ本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ノ規定ニ違反シタル者ニ之ヲ準用ス

第十七條 酒母、醱又ハ麹ノ製造者ニシテ其ノ製造ヲ廢止シタルトキハ其ノ冒政府ニ申告スヘシ

第十八條 第九條又ハ第十條ノ處罰ヲ受ケタル者ニ對シテハ政府ハ酒母、醱又ハ麹ノ製造ノ免許ヲ取消スコトヲ得

附則

第十九條 本法ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

第二十條 本法施行前酒造稅法第二十條ニ依リ酒母又ハ醱製造ノ免許ヲ受ケタル者ハ本法ニ依リ

免許ヲ受ケタルモノト看做ス

第二十一條 本法施行前ヨリ麹ヲ製造シ本法施行後引續キ之ヲ製造セムトスル者ハ本法施行後十

前項ノ期間内ハ従前ノ製造ヲ繼續スルコトヲ得  
第二十二條 沖繩縣及東京府下小笠原島伊豆七島ニハ本法ヲ施行セス

朕帝國議會ノ協贊ヲ經テ酒造組合法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十七年十二月三十一日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎  
大藏大臣男爵曾根荒助

法律第八號(宣稱一月二日)

酒造組合法

- 第一條 本法ニ於テ酒類製造者ト稱スルハ清酒、濁酒、白酒、味淋又ハ燒酎ヲ製造スル者ヲ謂フ
- 第二條 酒類製造者ハ稅務署管内ノ一區域トシ酒造組合ヲ設クルコトヲ得但シ土地ノ狀況ニ從ヒ特別ノ區域ニ依ルコトヲ得
- 第三條 酒造組合ハ組合員協同一致シテ營業上ノ弊害ヲ矯正シ信用ヲ保持スルヲ以テ目的ト爲ス
- 第四條 酒造組合ヲ設置セムトスルトキハ其ノ區域内ニ於ケル酒類製造者三分ノ二以上ノ同意ヲ得創立總會ヲ開キ定款ヲ釐定シ政府ノ認可ヲ受クヘシ
- 二種以上ノ酒類ノ製造者組合ヲ設置セムトスルトキハ各種毎ニ其ノ三分ノ二以上ノ同意アルコトヲ要ス
- 第五條 酒造組合設置ノ認可アリタルトキハ其ノ區域内ニ於ケル同種酒類ノ製造者ハ當然其ノ組合員ト爲ル

第六條 酒造組合ハ組合相互ノ氣脈ヲ通シ其ノ目的ヲ達スル爲メ酒造組合聯合會ヲ設置スルコトヲ得

酒造組合聯合會ヲ設置セムトスルトキハ其ノ創立總會ヲ開キ定款ヲ釐定シ政府ノ認可ヲ受クヘシ

第七條 酒造組合及酒造組合聯合會ハ法人トス

第八條 酒造組合又ハ酒造組合聯合會ノ定款ノ變更ハ政府ノ認可ヲ受クヘシ

第九條 酒造組合又ハ酒造組合聯合會ハ營利事業ヲ爲スコトヲ得ス

第十條 政府ハ酒造組合又ハ酒造組合聯合會ノ決議又ハ其ノ役員ノ行爲ニシテ法令若ハ定款ノ規定ニ違背シ又ハ公益ヲ害スト認ムルトキハ其ノ決議ヲ取消シ、其ノ行爲ヲ制止シ、役員ノ改選ヲ命ジ又ハ組合若ハ聯合會ノ解散ヲ命スルコトヲ得

第十一條 本法ニ規定スルモノノ外酒造組合及酒造組合聯合會ニ關スル事項ハ勅令ヲ以テ之ヲ定

附則

第十二條 本法ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

第十三條 酒造稅法ニ依リ設立シタル酒造組合ハ本法施行ノ日ヨリ本法ニ依リ設立シタルモノト看做ス

前項ノ酒造組合ニシテ其ノ區域内ニ於ケル酒類ノ製造者各種毎ニ三分ノ二以上ヨリ成立スルトキハ同區域内ニ於テ未ダ組合ニ加入セサル同種酒類ノ製造者ハ本法施行ノ日ヨリ當然組合員ト爲ル

朕帝國議會ノ協賛ヲ經テル登録稅法中改正法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十七年十二月三十一日

内閣總理大臣 伯爵 桂 太郎  
大藏大臣 男爵 曾 根 荒助

法律第九號 (第一月二日)

登録稅法中左ノ通改正ス

第二條第一項第一號中千分ノ七及第二號中千分ノ十五ヲ千分ノ五ニ改メ第二十號ヲ削ル

第三條第一項第二號中千分ノ六ヲ千分ノ三ニ改メ第十三號ヲ削ル

第十四條 鐵業權ニ關シ鐵業原簿ニ登録ヲ受クルトキハ左ノ區別ニ從ヒ登録稅ヲ納ムヘシ

一 試掘權ノ設定 每一件 金七十五圓

二 試掘權ノ變更 每一件 金三十五圓

三 試掘權ノ移轉 每一件 金十圓

四 探掘權ノ設定 每一件 金百五十圓

五 探掘權ノ變更 每一件 金十圓

六 探掘權ノ移轉 每一件 金三十五圓

七 探掘權ノ設定 每一件 金百五十圓

八 探掘權ノ變更 每一件 金十圓

九 探掘權ノ移轉 每一件 金三十五圓

十 探掘權ノ設定 每一件 金百五十圓

鐵區合併

鐵區分割

五 探掘權ノ變更

鐵區訂正

增區又ハ増減區

減區

六 探掘權ノ移轉

相續

相續以外ノ原因ニ因ル移轉

七 抵當權ノ設定

新規登録

鐵業法第三十五條第二項ニ基キ爲シタル承諾及協

定ニ因ル設定

八 順位ノ變更ニ因ル抵當權ノ變更

九 抵當權ノ移轉

相續

相續以外ノ原因ニ因ル移轉

十 共同鐵業權者ノ脱退

十一 滞納處分以外ノ原因ニ因ル鐵業權又ハ抵當權ノ處

每一件 金五十圓

每一件 金五十圓

每一件 金五十圓

每一件 金七十五圓

每一件 金二十圓

每一件 金二十圓

每一件 金二十圓

每一件 金七十五圓

價額金額 千分ノ六

每一件 金五十圓

每一件 金十圓

每一件 金十圓

每一件 金十圓

每一件 金十圓

每一件 金十圓

每一件 金十圓

每一件 金十圓

每一件 金十圓

分ノ制限

- 十二 廢業ニ因ル鑛業權ノ消滅 債權金額 千分ノ四 每一件 金五圓
- 十三 登錄ノ更正變更又ハ抹消 債權金額ニ因リ課稅額ヲ定ムル場合ニ於テ一定ノ債權金額ナキトキハ債權ノ目的タルモノノ價格ヲ以テ債權金額ト看做ス 每一件 金十圓

附則

本法ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス但シ鑛業原簿ノ登錄ニ付テハ鑛業法施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

本法施行前鑛業條例ニ依リ鑛業ニ關スル出願又ハ届出ヲ爲シ既ニ登錄稅ヲ納メタル者鑛業法ニ依リ其ノ事項ニ付鑛業原簿ニ登錄ヲ受クルトキハ更ニ登錄稅ヲ納ムルコトヲ要セス

〔參照〕

法律第二十七號登錄稅法(明治二十九年三月二十八日官報)抄録

- 第二條 不動產ニ關スル登記ヲ受クルトキハ左ノ區別ニ從ヒ登錄稅ヲ納ムヘシ
  - 一 法定ノ家督相續ニ因ル所有權ノ取得 不動產價格 千分ノ七
  - 二 第一號以外ノ家督相續又ハ遺產相續ニ因ル所有權ノ取得 不動產價格 千分ノ十五
- 第二十 贈與登記 不動產價格 金二十圓
- 第二條 船舶ニ關スル登記ヲ受クルトキハ左ノ區別ニ從ヒ登錄稅ヲ納ムヘシ
  - 一 法定ノ家督相續ニ因ル所有權ノ取得 船舶價格 千分ノ三
  - 二 第一號以外ノ家督相續又ハ遺產相續ニ因ル所有權ノ取得 船舶價格

第十三 豫告登記

第十四條 鑛業ニ關シ左ノ事項ヲ官簿ニ登錄スルトキハ記名者ハ左ノ區別ニ從ヒ登錄稅ヲ納ムヘシ

- 一 探掘 船舶價格 千分ノ六 金二十圓
- 二 探掘 船舶價格 金百五十圓
- 三 探掘増區及増減區ニ係ル訂正 金三十圓
- 四 探掘増區及増減區ニ係ル訂正 金七十五圓
- 五 買受、讓受 金七十五圓
- 六 探掘權時入又ハ試掘延期 金二十圓
- 七 減區ニ係ル訂正 金五圓
- 八 減區ノ合併又ハ分割 金十五圓
- 九 廢業 金五圓

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル相續稅法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十七年十二月三十一日

- 内閣總理大臣 伯爵 桂 太郎
- 内務大臣 子爵 芳川 顯正
- 大藏大臣 男爵 曾禰 荒助
- 司法大臣 波多野 敬直

法律第十號(官報一月一日)

相續稅法

第一條 相續開始シタルトキハ開始地カ帝國内ニ在ルト否トヲ問ハス又被相續人若ハ相續人カ帝

國臣民タルト否トヲ問ハズ本法施行地ニ在ル相続財産ニハ本法ニ依リ相続税ヲ課ス

第二條 被相続人カ本法施行地ニ住所ヲ有スルトキハ左ニ掲クル財産ヲ以テ本法施行地ニ在ル相続財産トス

- 一 本法施行地ニ在ル動産及不動産
  - 二 本法施行地ニ在ル不動産ノ上ニ存スル権利
  - 三 前二號ニ掲ケタルモノ以外ノ財産
- 被相続人カ本法施行地ニ住所ヲ有セザルトキハ前項第一號及第二號ノ財産ヲ以テ本法施行地ニ在ル相続財産トス

船舶ノ所在ハ船籍ノ所在ニ依ル  
相續開始前一年内ニ本法施行地内ヨリ本法施行地外ニ轉シタルモノノ住所又ハ船籍ハ本法施行地内ニ在ルモノト看做ス

第三條 被相続人カ本法施行地ニ住所ヲ有スルトキハ相續開始ノ際本法施行地ニ在ル相続財産ノ價額ニ相續開始前一年内ニ被相続人カ本法施行地ニ在ル財産ニ付爲シタル贈與ノ價額ヲ加ヘ其ノ中ヨリ左ノ金額ヲ控除シタルモノヲ以テ課税價格トス

- 一 公課
  - 二 被相続人ノ葬式費用
  - 三 債務
- 被相続人カ本法施行地ニ住所ヲ有セザルトキハ相續開始ノ際本法施行地ニ在ル相続財産ノ價額ニ相續開始前一年内ニ被相続人カ本法施行地ニ在ル財産ニ付爲シタル贈與ノ價額ヲ加ヘタルモノヨリ左ノ金額ヲ控除シタルモノヲ以テ課税價格トス

ノヨリ左ノ金額ヲ控除シタルモノヲ以テ課税價格トス

- 一 其ノ財産ニ係ル公課
  - 二 其ノ財産ヲ目的トスル留置權特別ノ先取特權質權又ハ抵當權ヲ以テ擔保セラレタル債務
  - 三 其ノ財産ニ關スル贈與ノ義務
- 永代借地權ハ相続税ノ課税價格ニ算入セス  
公共團體又ハ慈善事業ニ對シ爲シタル贈與及遺贈ハ課税價格ニ算入セス

第四條 相続財産ノ價額ハ相續開始ノ時ノ價額ニ依ル

船舶地上權永小作權及定期金ニ付テハ政府ハ左ノ方法ニ依リ其ノ價格ヲ評定ス

- 一 船舶ニ付テハ其ノ製造費中ヨリ製造後ノ年數ニ應シ一年ニ付其ノ二十五分ノ一宛ヲ控除シタルモノヲ以テ其ノ價額トス但シ製造後二十年ヲ經過シタルモノハ製造費ノ五分ノ一ヲ以テ其ノ價額トス

一年ニ滿タサル端數ハ之ヲ一年トシテ計算ス

二 地上權ニ付テハ左ノ金額ヲ以テ其ノ價額トス

遺存期間十年以下ナルモノ	地上權ノ目的タル土地ノ賃賃價格	二倍
遺存期間三十年以下ナルモノ	地上權ノ目的タル土地ノ賃賃價格	三倍
遺存期間五十年以下ナルモノ又ハ存續期間ノ定ナキモノ	地上權ノ目的タル土地ノ賃賃價格	五倍
遺存期間百年以下ナルモノ	地上權ノ目的タル土地ノ賃賃價格	七倍
遺存期間百年ヨリ長キモノ	地上權ノ目的タル土地ノ賃賃價格	十二倍

三 永小作權ニ付テハ左ノ金額ヲ以テ其ノ價額トス  
 殘存期間十年以下ナルモノ 永小作權ノ目的タル土地ノ貸賃價格 二倍  
 殘存期間三十年以下ナルモノ又ハ存續期間ノ定メナキモノ 永小作權ノ目的タル土地ノ貸賃價格 三倍  
 殘存期間五十年以下ナルモノ 永小作權ノ目的タル土地ノ貸賃價格 五倍  
 四 有期定期金ハ其ノ殘存期間ニ於ケル總金額ヲ以テ其ノ價額トス但シ一年ノ定期金ノ二十倍ヲ超ユルコトヲ得ス  
 五 無期定期金ハ其ノ一年ノ定期金ノ二十倍ヲ以テ其ノ價額トス  
 六 終身定期金ハ其ノ目的トセラレタル人ノ年齢ニ依リ左ノ期間ニ於ケル定期金ノ總額ヲ以テ其ノ價額トス  
 二十歳未満ノ者 十年  
 三十歳未満ノ者 八年  
 四十歳未満ノ者 六年  
 五十歳未満ノ者 四年  
 六十歳未満ノ者 二年  
 六十歳以上ノ者 一年  
 前項ニ於テ土地ノ貸賃價格ト稱スルハ貸主カ公課、修繕費、保險料其ノ他土地ノ維持ニ必要ナル經費ヲ負擔スル條件ヲ以テ之ヲ貸賃スル場合ニ於テ貸主ノ收得スヘキ金額ヲ謂フ  
 第五條 條件附權利存續期間ノ不確定ナル權利又ハ訴訟中ノ權利ニ付テハ政府ノ認ムル所ニ依

リ其ノ價格ヲ評定ス  
 第三條ニ依リ控除スヘキ債務金額ハ政府カ確實ト認メタルモノニ限ル  
 第六條 課税價格カ家督相續ニ在リテハ千圓、遺產相續ニ在リテハ五百圓ニ滿タサルトキハ相續税ヲ課セシメ  
 第七條 軍人、軍屬ノ戰死又ハ戰爭ノ爲受ケタル傷痕疾病ニ起因シタル死亡ニ因リ相續開始シタルトキハ相續税ヲ課セシメ但シ傷痕者又ハ疾病者ニシテ負傷又ハ發病後一年ヲ經過シ死亡シタルトキハ此ノ限ニ在ラス  
 第八條 相續税ハ課税價格ヲ左ノ各級ニ區分シ其ノ各區分ニ對シ相續人ノ種類ニ從ヒ遞次ニ各稅率ヲ適用シテ之ヲ課ス  
 家督相續

課税價格	相續人カ被相續人ノ家族タルトキ	相續人カ被相續人ノ家族タルトキ又ハ遺言ニ依リ相續人ノ地位ニ在リタルトキ	相續人カ民法第九百八十五條ニ依リ選定セラレタル者ナルトキ
五千圓以下ノ金額	千分ノ十二	千分ノ十五	千分ノ二十
五千圓ヲ超ユル金額	千分ノ十五	千分ノ十七	千分ノ二十五
一萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ十七	千分ノ二十	千分ノ三十
二萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ二十	千分ノ二十五	千分ノ三十五
三萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ二十五	千分ノ三十	千分ノ四十
四萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ三十	千分ノ三十五	千分ノ四十五

遺産相続

課税價格	税		率
	相続人カ直系 親屬ナルトキ	相続人カ配偶者又ハ 直系親屬ナルトキ	
千圓以下ノ金額	千分ノ十五	千分ノ十七	千分ノ二十五
千圓ヲ超ニル金額	千分ノ十七	千分ノ二十	千分ノ三十
五千圓ヲ超ニル金額	千分ノ二十	千分ノ二十五	千分ノ三十五
一萬圓ヲ超ニル金額	千分ノ二十五	千分ノ三十	千分ノ四十
二萬圓ヲ超ニル金額	千分ノ三十	千分ノ三十五	千分ノ四十五
三萬圓ヲ超ニル金額	千分ノ三十五	千分ノ四十	千分ノ五十
四萬圓ヲ超ニル金額	千分ノ四十	千分ノ四十五	千分ノ五十五
五萬圓ヲ超ニル金額	千分ノ四十五	千分ノ五十	千分ノ六十
七萬圓ヲ超ニル金額	千分ノ五十	千分ノ五十五	千分ノ六十五
十萬圓ヲ超ニル金額	千分ノ五十五	千分ノ六十	千分ノ七十五

外國ノ法律ニ依リ開始シタル相続ニ關シテハ遺産相続ニ關スル税率ヲ準用ス

第九條 相続人ノ廢除若ハ其ノ取消ニ關スル裁判ノ確定前又ハ相続ノ承認若ハ拋棄前ト雖政府ハ

必要ニ依リ其ノ推定家督相続人又ハ推定遺産相続人ニ對スル税率ヲ適用シ相続税ヲ課スルコトヲ得

相続人アルコト分明ナラザルトキハ税率ノ最高キ相続人ニ對スル税率ヲ適用シテ相続税ヲ課ス前二項ニ依リ課税シタル後相続人確定シタルトキハ税率ノ適用ヲ改訂シ税金ノ差額ヲ追徴シ又ハ還付ス

第十條 相続税ヲ課セラレタル後三年以内ニ於テ更ニ相続開始シタルトキハ前ノ相続額ニ對スル相続税ニ相當スル相続税ヲ免除ス

相続税ヲ課セラレタル後五年以内ニ於テ更ニ相続開始シタルトキハ前ノ相続額ニ對スル相続税ノ半額ニ相當スル相続税ヲ免除ス

第十一條 相続人ハ相続開始ヲ知リタル日ヨリ遺言執行者又ハ相続財産管理人ハ就職ノ日ヨリ三箇月以内ニ相続財産ノ目録及相続財産ノ價額中ヨリ控除セラルヘキ金額ノ明細書ヲ政府ニ提出ス

相続カ帝國外ニ於テ開始シタルトキ又ハ前項ノ書類ヲ提出スヘキ者カ帝國内ニ住所ヲ有セザルトキハ前項ノ期間ハ六箇月トス

相続人確定シタルトキハ前二項ノ書類ヲ提出スルト同時ニ又ハ其ノ確定ノ日ヨリ一箇月以内ニ相続人ノ相続關係ヲ記載シタル書面ヲ政府ニ提出スヘシ

第十二條 戸籍吏左ノ事項ニ關スル届書ヲ受理シタルトキハ之ヲ收稅官廳ニ報告スヘシ  
一 死亡又ハ失踪  
二 戸主ノ隱居又ハ國籍喪失



三 戸主カ婚姻又ハ養子縁組ノ取消ニ因リテ其ノ家ヲ去リタルコト

四 入夫婚姻ニ因リ女戸主カ戸主權ヲ喪失シタルコト

五 戸主タル入夫ノ離婚

第十三條 課税價格ハ政府之ヲ決定ス

課税價格ヲ決定シタルトキハ政府ハ之ヲ相續人、遺言執行者又ハ相續財産管理人ニ通知スヘシ

第十四條 相續人、遺言執行者又ハ相續財産管理人前條ノ決定ニ對シ異議アルトキハ通知ヲ受ケ

タル日ヨリ二十日以内ニ申立テ再審査ヲ求ムルコトヲ得

相續人、遺言執行者又ハ相續財産管理人帝國內ニ住所ヲ有セサルトキハ前項ノ期間ハ之ヲ三箇

月トス

第十五條 前條ノ請求アリタルトキハ相續税審査委員會ノ諮問ヲ經テ政府之ヲ決定ス

審査委員會ノ組織及會議ニ關スル規定ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第十六條 課税價格ノ決定ニ對シ不服アル者ハ訴訟又ハ行政訴訟ヲ爲スコトヲ得

第十七條 相續税ハ一時ニ之ヲ納付スヘシ但シ税金額百圓以上ナルトキハ相續税ニ相當スル擔保

ヲ提供シ三年以内ノ年賦延納ヲ求ムルコトヲ得

前項ニ依リテ年賦延納ヲ求ムトスル者ハ第十三條ノ通知ヲ受ケタル後二十日以内ニ政府ニ出

願スヘシ

相續人、遺言執行者又ハ相續財産管理人帝國內ニ住所ヲ有セサルトキハ前項ノ期間ハ三箇月ト

ス

第十八條 審査ヲ求メ訴訟又ハ行政訴訟ヲ爲シタル場合ト雖相續人、遺言執行者又ハ相續財産管理

人ハ通知ヲ受ケタル金額ニ依リ税金ヲ納付スヘシ

第十九條 相續人、遺言執行者又ハ相續財産管理人ハ相續税ヲ納付シ又ハ其ノ延納ノ許可ヲ受ケ

タル後ニ非サレハ遺贈ノ辨濟ヲ爲スコトヲ得ス

第二十條 相續財産ヲ以テ相續税ヲ完納スルコト能ハサルトキハ相續開始前一年内ニ被相續人自

リ本法施行地ニ在ル財産ノ贈與ヲ受ケタル者ハ其ノ限度ニ於テ不足額ヲ納付スヘシ但シ相續税

ノ延納ヲ許可シタル場合ニ於テハ此ノ限ニ在ラス

第二十一條 相續税ノ審査ニ參與シタル者ハ其ノ審査ニ關スル事項ヲ他ニ漏洩スルコトヲ得ス

第二十二條 相續人、遺言執行者又ハ相續財産管理人期限内ニ第十一條ニ依ル書類ヲ提出セサル

トキハ政府ハ期間ヲ定メテ催告ヲ爲スコトヲ得

相續人二人以上ナル場合ニ於テハ政府ハ其ノ一人ニ對シテ前項ノ催告ヲナスコトヲ得

前二項ノ場合ニ於テ相續人、遺言執行者又ハ相續財産管理人共ノ期間内ニ書類ヲ提出セサルト

キハ政府ノ認ムル所ニ依リ課税價格ヲ決定シ催告ニ關スル費用及税金ノ十分ノ一ニ相當スル金

額ヲ相續人、遺言執行者又ハ相續財産管理人ヨリ徴收スルコトヲ得

相續人二人以上ナル場合ニ於テハ各相續人ハ前項ノ徴收金ニ付連帶納付ノ責ニ任ス

第三項ノ金額ノ徴收ニ關シテハ國稅徴收法ノ規定ヲ準用ス

第二十三條 左ニ掲クル場合ニ於テ本法施行地ニ在ル不動産及船舶以外ノ財産ニ付爲シタル贈與

ノ價額カ五百圓以上ナルトキハ遺産相續開始シタルモノト看做シ其ノ財産ノ價額ヲ課税價格トシ

テ本法ニ依リ相續税ヲ課ス

一 被相續人カ推定家督相續人又ハ推定遺産相續人ニ贈與ヲ爲シタルトキ

二 分家ヲ爲スニ際シ若ハ分家ヲ爲セタル後本家ノ戸主又ハ家族カ分家ノ戸主又ハ家族ニ贈與  
ヲ爲レタルトキ

前項ノ遺產相續ニ關シテハ第十條ノ規定ヲ適用セス

第二十四條 第十一條ニ依リ提出シタル書類ニ虛偽ノ記載ヲ爲シタル者其ノ他不正ノ所爲ヲ以テ  
相續税ノ遺脱ヲ圖リ又ハ遺脱シタル者ハ其ノ遺脱シ又ハ遺脱セムトシタル税金ノ三倍ニ相當ス  
ル罰金ニ處ス但シ自首シタル者ハ其ノ税金ヲ徴收シ其ノ罪ヲ問ハス

第二十五條 第二十一條ニ違反シタル者ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

前項ニ依リ處罰セラレタル者ハ其ノ職ヲ失フ

第二十六條 府縣市町村其ノ他ノ公共團體ハ相續税ノ附加税ヲ課スルコトヲ得ス

附則

本法ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

朕帝國議會ノ協贊ヲ經テ爾鹽專賣法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十七年十二月三十一日

内閣總理大臣 伯爵 桂 太郎  
農商務大臣 男爵 清浦 奎吾  
大藏大臣 男爵 曾根 克助

法律第十一號 (第一二二號)

鹽專賣法

第一條 政府ハ鹽ノ專賣權ヲ有ス

第二條 政府ハ便宜ノ地ニ鹽取掘所ヲ設置シ鹽ノ收納及賣渡ヲ取扱ハシム

第三條 鹽ハ政府又ハ政府ノ命ヲ受ケタル者ニ非サレハ之ヲ外國ヨリ輸入シ又ハ本法ヲ施行セサ  
ル地ヨリ移入スルコトヲ得ス

第四條 鹽ハ政府ノ許可ヲ受ケタル者ニ非サレハ之ヲ製造スルコトヲ得ス

第五條 政府ヨリ賣渡シタル鹽ニ非サレハ所有セ、所持シ、讓渡シ、質入シ又ハ消費スルコトヲ得ス  
但シ納付期日前若ハ正當ノ事由ニ因リ納付ヲ遅延シタル場合ニ於テ又ハ製造者ノ自家用ノ爲所  
有所持メタルハ此ノ限ニ在ラス

第六條 政府ハ製鹽地ノ區域又ハ鹽ノ製造期間若ハ生産高ヲ制限スルコトヲ得

第七條 鹽製造者ノ製造セタル鹽ハ政府之ヲ收納ス但シ命令ノ定ムル制限數量以內ノ鹽ニシテ鹽  
製造者ノ自家用ニ供スルモノ又ハ政府ヨリ賣渡シタル鹽ニ依リ再製シタル鹽ハ此ノ限ニ在ラス

第八條 鹽ノ賠償價格ハ政府之ヲ定メ豫メ公示スル

第九條 鹽ヲ製造セムトスル者ハ製鹽ノ方法、採鹹地名、地番、製鹽段別、製鹽場、貯藏場及一年ノ生  
産見込高ヲ定メ政府ニ申請シ許可ヲ受クヘシ之ヲ變更セムトスルトキ亦同シ

第十條 鹽ノ製造業ト鹽ノ賣買業トハ同一ノ場所ニ於テ相兼メタルコトヲ得ス

但シ政府ノ賣渡シタル鹽ニ依リ再製スルハ此ノ限ニ在ラス

第十一條 相續ニ因リ鹽ノ製造ヲ承繼シタルトキハ其ノ旨政府ニ届出ツヘシ

相續ニ因ルノ外鹽ノ製造ヲ承繼セムトスルトキハ政府ノ許可ヲ受クヘシ

第十二條 鹽製造者鹽ノ製造ヲ廢止セムトスルトキハ少クトモ一箇月前ニ政府ニ申告スヘシ但シ

政府ノ許可ヲ受ケテ製造ヲ廢止スルハ此ノ限ニ在ラス

第十三條 鹽製造者本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ノ規定ニ違反シタルトキハ政府ハ製造ノ許

可ヲ取消スコトヲ得

第十四條 鹽製造者鹽ヲ製造シタルトキハ總テ之ヲ政府ニ納付スヘシ但シ第七條但書ニ該當スル

モノハ此ノ限ニ在ラス

政府ハ鹽製造者ヲシテ前項ニ依リ納付スヘキ鹽ヲ其ノ指定シタル者ニ引渡スヘキコトヲ命スル

コトヲ得此ノ場合ニ於テハ政府カ鹽ノ數量ヲ定メ引渡ヲ命シタルトキ製造者之ヲ政府ニ納付シ

タルモノト看做ス

第十五條 鹽製造者鹽ヲ納付シタルトキハ政府ハ鑑定人ヲシテ其ノ品質ヲ鑑定セシメ相當ノ賠償

金ヲ交付スヘシ

製造者前項ノ鑑定ニ不服ナルトキハ再鑑定ヲ求ムルコトヲ得但シ賠償金ノ請求ヲ爲シタルトキ

ハ此ノ限ニ在ラス

再鑑定ニ關スル規定ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第十六條 鹽製造者ノ納付セムトスル鹽ニシテ其ノ品質甚シク粗惡ナルモノニ付テハ政府ハ更ニ

相當ノ處理ヲ爲シタル上納付スヘキコトヲ命スルコトヲ得

第十七條 政府ハ鹽ノ製造又ハ包裝ノ方法、納付場所、納付期日及其ノ運搬通路ヲ定ムルコトヲ得

第十八條 政府ハ定價ヲ以テ鹽ノ賣渡ヲ爲スヘシ

前項ノ定價ハ賠償金ヲ交付シテ收納シタル鹽ニ付テハ賣渡當時ノ品質ニ相當スル賠償金ニ一石

ニ付金二圓五十錢又ハ百斤ニ付金一圓四十八錢ノ割合ノ金額ヲ加算シタルモノヲ超エテ之ヲ定

ムルコトヲ得ス

第十九條 左ニ掲グル鹽ニ付テハ政府ハ命令ノ定ムル所ニ依リ特別ノ定價ヲ以テ之ヲ賣渡スコト

ヲ得

一 外國ニ輸出スルモノ

二 命令ヲ以テ指定スル用途ニ使用スルモノ

前條ニ依リテ賣渡シタル鹽ニレテ命令ノ定ムル用途ニ使用セラレタルトキハ命令ノ定ムル所ニ

依リ交付金ヲ下付ス

第二十條 政府ハ命令ヲ以テ定メタル數量以上ニ非サレハ鹽ノ賣渡ヲ爲サス

第二十一條 鹽買業者ハ鹽ニ他物ヲ混和シテ販賣スルコトヲ得ス

第二十二條 鹽製造者及鹽買業者ハ帳簿ヲ調製シ政府ノ指示ニ從ヒ營業ニ關スル要件ヲ記載ス

ハシ

第二十三條 當該官吏ハ探鹹地、製鹽場、貯藏場其ノ他鹽ノ所在ト認ムル場所ニ立入り鹹水、鹽器

具、器械、建築物又ハ帳簿書類ヲ検査ヘルコトヲ得

當該官吏監督上必要ト認ムルトキハ前項ノ物件ニ封印ヲ施スコトヲ得

第二十四條 當該官吏ハ運搬中ニ在ル鹽ヲ検査シ其ノ出所及到着先ヲ質問スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ當該官吏監督上必要ト認メタルトキハ其ノ運搬ヲ停止シ又ハ荷物若ハ船車ニ

封印ヲ施スコトヲ得

第二十五條 左ノ各號ノ一ニ該當スル者ハ十圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處シ其ノ犯罪ニ係ル鹽ハ之ヲ沒收スルニ可ク又ハ消費シタルトキハ第十八條ノ賣渡定價ニ相當スル金額ヲ追徵ス

一 第三條第四條又ハ第五條ニ違反シタル者

二 許可ヲ受ケサル土地ニ於テ鹽ヲ製造シタル者

三 情ヲ知リテ政府ヨリ賣渡ササル鹽ヲ收受ケタル者

第二十六條 鹽製造者正當ノ事由ナクシテ政府ノ指定シタル者ニ引渡ヲ爲ササルトキハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス政府ノ指定シタル運搬通路ニ依ラズシテ鹽ヲ運搬シタルトキ亦同シ

第二十七條 鹽製造者政府ノ定メタル製造期間外ニ於テ鹽ヲ製造シ又ハ政府ノ許可シタル場所以外ニ於テ鹽ヲ製造シ若ハ貯藏シタルトキハ五圓以上百圓以下ノ罰金ニ處シ其ノ犯罪ニ係ル鹽ハ之ヲ沒收ス情ヲ知リテ其ノ場所ヲ供與シタル者亦同シ

第二十八條 前條ニ該當スル場合ヲ除クノ外鹽製造者許可ヲ受ケスシテ第九條ニ依リ許可ヲ受ケタル事項ヲ變更シタルトキハ三十圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十九條 第十條ニ違反シタル者ハ三十圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十條 第十一條又ハ第十二條ニ違反シタル者ハ二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十一條 鹽買業者第二十一條ノ規定ニ違反シタルトキハ五十圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス其ノ犯罪ニ係ル物件ハ之ヲ沒收ス

第三十二條 鹽製造者又ハ鹽買業者其ノ營業ニ關スル帳簿ヲ關製セズ又ハ其ノ記載ヲ添リ若ハ不正ノ記載ヲ爲シタルトキハ三十圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十三條 當該官吏ノ尋問ニ對シ虚偽ノ答辯ヲ爲シ又ハ當該官吏ノ職務執行ヲ拒ミ、之ヲ忌避シ若シ之ニ支障ヲ加ヘタル者ハ三十圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス其ノ刑法ニ正條アルモノハ刑法ニ依ル

第三十四條 政府ヨリ賣渡ササル鹽ニシテ犯人以外ノ所有ニ係ルモノハ政府之ヲ收納ス此ノ場合ニ於テハ他物ヲ混和シタル鹽ヲ除クノ外第十五條ニ準シ賠償金ヲ交付ス

第三十五條 本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ノ規定ニ違反シタル者ニハ刑法ノ減輕、再犯加重及赦罪俱發ノ例ヲ用井ス

第三十六條 鹽製造者、鹽買業者未成年者又ハ禁治產者ナルトキハ本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ノ規定ニ依リ營業者ニ適用スヘキ罰則ハ之ヲ法定代理人ニ適用ス但シ其ノ營業ニ關シ成年者ト同一ノ能力ヲ有スル未成年者ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

第三十七條 鹽製造者又ハ鹽買業者其ノ代理人、戶主、家族、同居者、雇人其ノ他ノ從業者ニシテ其ノ業務ニ關シ本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ノ規定ニ違反シタルトキハ自己ノ指揮ニ出サルノ故ヲ以テ處罰ヲ免カルルコトヲ得ス

第三十八條 間接國稅犯則者處分法及明治三十二年法律第五十二號ノ規定ハ本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ニ依ル犯罪ニ之ヲ準用ス

間接國稅犯則者處分法中收稅官吏及稅務署長ニ屬スル職務ヲ行フヘキ官吏ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第三十九條 鹽製造者其ノ製造ノ許可ヲ取消サレ又ハ鹽製造者若ハ鹽買業者其ノ業務ヲ廢止スルモ鹽鹽場、貯藏場又ハ販賣場ニ鹽ノ現在スル間ハ仍本法ノ規定ヲ適用ス

第四十條 本法ニ依リ收納シタル鹽ノ賠償金ノ仕拂ニ關シテハ主任ノ官吏ニ現金前渡ヲ爲スコトヲ得

附則

第四十一條 本法ハ明治三十八年六月一日ヨリ之ヲ施行ス但シ第四十四條第四項及第四十五條ハ此ノ限ニ在ラス

第四十二條 本法ハ勅令ヲ以テ指定シタル地方ニ之ヲ施行セス

第四十三條 本法施行ノ際鹽消費者ノ所有ニ係ル鹽ニ關シテハ第五條ヲ適用セス

第四十四條 本法施行ノ際製造者ノ所有又ハ所持スル鹽ハ政府ニ納付スヘシ此ノ場合ニ於テハ第十五條ニ準シ賠償金ヲ交付ス

本法施行ノ際販賣ノ目的ヲ以テ所有シ又ハ所持スル鹽ニ付テハ百斤ニ付金一圓三十錢ノ割合ニ依リ鹽稅ヲ納ムヘシ

前項ノ鹽ヲ所有シ又ハ所持スル者ハ其ノ數量及所在ヲ政府ニ申告スヘシ申告ヲ怠リ又ハ不正ノ申告ヲ爲シタルトキハ其ノ數量ニ對スル稅金ノ三倍ニ相當スル罰金ニ處ス

鹽稅ノ徵收ニ關スル規定ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第二項ニ依ル納稅額ノ鹽ハ政府ノ賣渡シタル鹽ト看做ス

納稅期日前ニ於ケル鹽ノ所有又ハ所持ニ關シテハ第五條ヲ適用セス

第四十五條 本法發布前ヨリ鹽ヲ製造スル者ハ本法發布ノ日ヨリ三箇月以内ニ命令ノ定ムル所ニ依リ許可ヲ受クヘシ

前項ニ依リ許可ヲ受ケタル者ハ第九條ニ依リ許可ヲ受ケタル者ト看做ス

第四十六條 本法施行ノ際鹽ヲ製造スル者ハ本法施行ノ日ヨリ一箇月以内ニ本法ニ依リ許可ヲ受クヘシ其ノ期間内ハ鹽ノ製造ヲ爲スコトヲ得

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル臨時事件費支辨ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十七年十二月三十一日

內閣總理大臣伯爵桂 太郎  
大藏大臣男爵曾根荒助

法律第十二號(官報一月一日)

第一條 臨時事件費支辨ノ爲政府ハ一時借入金ヲ爲シ、國庫債券ヲ發行シ、特別會計ニ屬スル資金ヲ繰替使用シ及公債ヲ募集スルコトヲ得

前項ノ一時借入金、國庫債券及公債ノ額ハ通シテ四億五千五百萬圓以内トス

第二條 明治三十六年勅令第二百九十一號、明治三十七年法律第一號、同年勅令第二百二十八號及本法ニ依ル國庫債券及公債ノ發行價格差減額ヲ補填スル爲必要アル場合ニ於テハ前條ノ制限以外ニ國庫債券ヲ發行シ、公債ヲ募集シ又ハ一時借入金ヲ爲スコトヲ得

第三條 前二條ニ依ル一時借入金、國庫債券及特別會計ニ屬スル資金繰替ヲ整理償還スル爲必要アル場合ニ於テハ第一條ノ制限以外ニ公債ヲ發行スルコトヲ得

第四條 政府ハ臨時軍事費出納上ニ時ノ不足ヲ補充スル爲其ノ歳入ヲ以テ償還スヘキ大藏省證券ヲ發行スルコトヲ得

前項大藏省證券ニ關シテハ前項ニ規定スルモノノ外總テ大藏省證券條例ノ規定ヲ適用ス  
 第五條 一時借入金、國庫債券及公債ノ利率、募集借入ノ方法、規約、据置年限及償還年限ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム  
 第六條 本法ニ依リテ發行スル國庫債券及公債ニ關シテハ本法ニ規定スルモノノ外整理公債條例ヲ適用ス

○ 朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル明治三十五年法律第四十九號中改正法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム  
 御名 御璽

明治三十八年二月十五日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎

法律第十三號(官報二月十六日)  
 明治三十五年法律第四十九號中左ノ通改正ス  
 第三條 第一回國勢調査ヲ行フヘキ時期ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

〔參照〕

○ 法律第四十九號(明治三十五年十二月一日官報)抄錄  
 第三條 第一回國勢調査ハ明治三十八年ニ於テ施行ス但シ第二回ニ限り第一回ヨリ起算シ滿五箇年ヲ以テ施行シ爾後第一條ノ例ニ依ル

○ 朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル古社寺保存法第十六條ニ依リ國庫ヨリ支出スヘキ金額ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年二月十五日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎  
内務大臣子爵芳川源正

法律第十四號(官報二月十六日)

古社寺保存法第十六條ニ依リ毎年國庫ヨリ支出スヘキ金額ハ臨時事件ノ繁屬スル年度中之ヲ十五萬圓以下ニ下スコトヲ得

〔參照〕

法律第四十九號古社寺保存法(明治三十年六月十日官報抄録)

第十六條 本法ニ定メタル保存金及補給金トシテ國庫ヨリ支出スヘキ金額ハ一箇年拾五萬圓乃至貳拾萬圓トス

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル海軍工廠資金會計法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年二月十五日

內閣總理大臣 伯爵 桂 太郎

海軍大臣 伯爵 山本權兵衛

大藏大臣 伯爵 曾根 荒助

法律第十五號(官報二月十六日)

海軍工廠資金會計法

第一條 海軍造船及造兵ノ工廠ニ於ケル材料物品貯蓄ノ資本トシテ海軍工廠資金ヲ置キ特別ノ會計ヲ立テシム

第二條 海軍工廠資金ハ明治三十八年三月三十一日現在スル所ノ海軍造船材料資金及海軍造兵材料資金ヲ以テ之ニ充テ毎年第六條ノ過剩金ニ相當スル金額ヲ加ヘ漸次増加シテ九百五十萬圓トス

第三條 海軍工廠資金會計ニ屬スル材料物品ヲ使用スルトキハ海軍省所管經費ヲ以テ之ヲ購入スヘシ此ノ場合ニ於テハ前金拂ヲ爲スコトヲ得

第四條 海軍工廠資金ヲ以テ貯蓄シタル材料物品ノ損滅ハ豫メ歩合ヲ定メテ材料物品ノ原價ニ加算スヘシ

第五條 海軍工廠ノ事業ニ使用シタル材料ノ殘材殘屑艦船取外シ物品廢船舟及廢兵器ニシテ更ニ材料トシテ使用シ得ヘキモノハ海軍工廠資金會計ノ材料ニ組入ルルコトヲ得

第六條 每會計年度ニ於テ海軍工廠資金特別會計ノ決算上該資金額ニ過剩ヲ生スルトキハ其ノ過剩金ヲ同年度一般ノ歳入ニ編入スヘシ

第七條 政府ハ毎年海軍工廠資金特別會計ノ歳入歳出豫算ヲ調製シ歳入歳出ノ總豫算ト俱ニ帝國議會ニ提出スヘシ

第八條 海軍工廠資金特別會計ノ收入支出ニ關スル規程ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

附則

第九條 第二條ハ海軍造船材料資金會計法第六條及海軍造兵材料資金會計法第六條ノ過剩金ニ相當スル金額ニシテ未ダ資金ニ増加ヲ了セサルモノニモ之ヲ適用ス

第十條 本法ハ明治三十八年度ヨリ之ヲ施行ス



朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル在外國帝國專管居留地特別會計法中改正法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布シ

御名 御璽

明治三十八年二月十五日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎  
大藏大臣男爵曾禰荒助  
外務大臣男爵小村壽太郎

法律第十六號(官報二月十六日)

在外國帝國專管居留地特別會計法中左ノ通改正ス

第三條中「百萬圓ヲ二百五十萬圓」ニ改ム

〔參照〕

法律第二十二號在外國帝國專管居留地特別會計法(明治三十三年三月一日官報)抄録

第三條 在外國帝國專管居留地特別會計ノ收入金額ニ不足ヲ生スルトキハ百萬圓ヲ限度トシ 國庫内他ノ會計ヨリ一時借入ヲ爲スコトヲ得

○ 朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル煙草專賣局及製鐵所據置運轉資本補足ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年二月十五日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎  
大藏大臣男爵曾禰荒助

法律第十七號(官報二月十六日)

第一條 煙草專賣局及製鐵所ノ據置運轉資本ニ不足ヲ生シタルトキハ大藏大臣ハ融通證券ノ發行

○ 二依リ一時之ヲ補足スルコトヲ得但シ其ノ金額ハ煙草專賣局ニ在リテハ七百萬圓製鐵所ニ在リテハ五百五十萬圓ヲ超過スルコトヲ得ス  
第二條 前條ノ融通證券ハ還クトモ翌年度ニ於テ之ヲ償還スヘシ  
第三條 本法ニ依リテ發行スル融通證券ニ關シテハ本法ニ規定スルモノノ外大藏省證券條例ヲ準用ス但シ大藏省證券條例第四條第一項ハ此ノ限ニ在ラズ

御名 御璽

明治三十八年二月十五日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎  
大藏大臣男爵曾禰荒助

法律第十八號(官報二月十六日)

北海道官設鐵道用品資金會計法ハ明治二十七年程度限り之ヲ廢止ス

○ 朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル國債證券及貯蓄債券ノ利子所得稅免除ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年二月十五日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎  
大藏大臣男爵曾禰荒助



法律第二十九號 (官報 二月十六日)

軍備補充ノ爲及臨時事件費支辨ノ爲明治三十七年以降政府ノ發行スル國債證券ノ利子及貯蓄債券  
法ニ依リ發行スル貯蓄債券ノ利子ハ所得稅ヲ免除ス但シ既納ノ税金ハ之ヲ還付セス

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル國債證券價格計算ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年二月十五日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎

大藏大臣男爵曾根荒助

法律第二十號 (官報 二月十六日)

軍備補充ノ爲及臨時事件費支辨ノ爲發行スル國債證券ニ付テハ其ノ最低發行價格ヲ以テ債權ノ價  
格トシテ計算スルコトヲ得

附則

本法ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル實用新案法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年二月十五日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎

農商務大臣男爵清浦奎吾  
司法大臣 波多野敬直

法律第二十一號 (官報 二月十六日)  
實用新案法

第一章 總則

第一條 工業上ノ物品ニ關シ其ノ形狀、構造又ハ組合ハセニ係リ實用アル新規ノ考案ヲ爲シタル  
者又ハ之ヲ承繼シタル者ハ本法ニ依リ實用新案ノ登録ヲ受クルコトヲ得  
左ノ各號ニ該當セサルモノハ新規ナルモノト看做ス

一 登録出願前同一又ハ類似ノ物品ニ關シ帝國内ニ於テ公ニ用井ラレタルモノ又ハ之ニ類似ス  
ルモノ

二 登録出願前同一又ハ類似ノ物品ニ關シ容易ニ應用スルコトヲ得ヘキ程度ニ於テ公刊物ニ記  
載セラレタルモノ又ハ之ニ類似スルモノ

第二條 左ニ掲クル實用新案ハ之ヲ登録セス

一 菊花御紋章又ハ之ニ類似スルモノ

二 秩序若ハ風俗ヲ紊リ又ハ衛生ヲ害スルノ虞アルモノ

第三條 實用新案ニ關シ出願若ハ請求ヲ爲サントスル者又ハ實用新案權者ニシテ帝國内ニ住所ヲ  
有セサルトキハ帝國内ニ住所ヲ有スル者ニ就キ代理人ヲ定メ特許局長ニ届出ツヘシ  
前項ノ代理人ハ本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ニ依リ爲スヘキ手續及實用新案ニ關スル民事  
訴訟、私訴及告訴ニ付本人ヲ代表スルモノトス

第四條 特許局長ハ實用新案ニ關スル代理人ヲ適當ナラスト認ムルトキハ其ノ改任ヲ命スルコトヲ得

第五條 特許代理業者ニ非サレハ實用新案ニ關スル代理ヲ常業トスルコトヲ得ス

第六條 實用新案ニ關シ出願又ハ請求ヲ爲シタル者本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ニ依リ特許局長又ハ審判長ノ定ムル期間内ニ成規又ハ指定ノ手續ヲ爲ササルトキハ特許局長又ハ審判長ハ其ノ出願又ハ請求ヲ無効ト爲スコトヲ得

第七條 本法ニ依リ特許局ニ於テ爲ス書類ノ送付ハ書留郵便又ハ特許局ノ使丁ヲ以テ之ヲ爲ス

第八條 實用新案ニ關シ條約ニ別段ノ規定アルトキハ其ノ規定ニ從フ

第二章 實用新案權

第九條 實用新案權ハ實用新案ノ登録ニ依リ發生ス

實用新案權者ハ其ノ登録ヲ受ケタル物品ヲ製作、販賣、據布又ハ使用スル權利ヲ專有ス

第十條 實用新案權ノ存續期間ハ三箇年トス

前項ノ期間ハ三箇年間之ヲ延長スルコトヲ得

第十一條 實用新案權ハ制限ヲ付シ又ハ付セズシテ之ヲ讓渡スルコトヲ得

第十二條 實用新案權存續期間ノ延長ハ特許局長ニ請求シテ登録ヲ受クルニ非サレハ其ノ效ヲ生

セズ

實用新案權ノ移轉又ハ質入ハ特許局長ニ請求シテ登録ヲ受クルニ非サレハ之ヲ以テ第三者ニ對

抗スルコトヲ得ス

第十三條 無効ノ審判確定シタルトキハ特許局長ハ實用新案ノ登録ヲ取消スヘシ此ノ場合ニ於テ

ハ實用新案權ハ初メヨリ存立セサルモノト看做ス

實用新案權者正當ノ事由ナクシテ六箇月以上第三條ノ手續ヲ怠リタルトキハ特許局長ハ實用新

案ノ登録ヲ取消スコトヲ得此ノ場合ニ於テハ實用新案權ハ以後效力ヲ失フ

第十四條 登録實用新案カ其ノ出願前ノ出願ニ係ル特許發明、登録意匠又ハ登録實用新案ヲ使用

スルニ非サレハ實施スルコト能ハサルトキハ其ノ發明特許權者、意匠權者又ハ實用新案權者ノ

許諾ヲ得タル場合ニ限り之ヲ實施スルコトヲ得

特許發明又ハ登録意匠カ其ノ出願前ノ出願ニ係ル登録實用新案ヲ使用スルニ非サレハ實施スル

コト能ハサルトキハ實用新案權者ノ許諾ヲ得タル場合ニ限り之ヲ實施スルコトヲ得

第十五條 實用新案權者ハ制限ヲ付シ又ハ付セズシテ登録實用新案ノ實施ヲ他人ニ許諾スルコト

ヲ得

實用新案實施ノ許諾ヲ得タル者ニシテ特許局長ニ請求シ其ノ登録ヲ受クルトキハ爾後其ノ實用

新案權ヲ取得シタル者又ハ其ノ實用新案權ニ付質權ヲ取得シタル者ニ對シテモ其ノ效力ヲ生ス

第十六條 實用新案權者又ハ實用新案實施ノ許諾ヲ得タル者ハ其ノ登録實用新案ニ係ル物品ニ登

録標記ヲ附スヘシ物品ノ性質ニ依リ之ニ標記ヲ附スルコト能ハサルトキハ其ノ包裝上ニ之ヲ附

スヘシ

標記ヲ附スルコトヲ怠リタル爲登録實用新案品ナルコトヲ知ラスシテ其ノ權利ヲ侵害シタル者

ニ對シテハ要償ノ所ヲ爲スコトヲ得ス

第三章 出願、審査及登録

第十七條 實用新案ノ登録ヲ受ケムトスル者ハ一實用新案ニ付一物品毎ニ願書ニ圖面ヲ添ヘ特許

局長ニ差出スヘシ

特許局長ハ必要ト認ムルトキハ出願人ニ解説書、圖面、見本又ハ雛形ノ提出ヲ命スルコトヲ得  
第十八條 同一又ハ類似ノ實用新案ニ付テハ最先ニ出願ヲ爲シタル者ニ非サレハ登録ヲ受クルノ  
權利ヲ有セス但シ同日ノ出願ニ係ルトキハ各出願者協議シテ權利者ヲ定ムヘシ協議調ハサルト  
キハ共ニ之ヲ登録セス

第十九條 發明特許又ハ意匠登録ノ出願ヲ爲シ特許又ハ登録スヘカラストノ査定ヲ受ケタル者其  
ノ最初ノ査定ノ送付ヲ受ケタル日ヨリ三十日以内ニ其ノ發明又ハ意匠ニ係ル物品ニ付實用新案  
ノ登録ヲ出願シタルトキハ其ノ發明特許又ハ意匠登録ヲ出願シタル日ニ於テ出願シタルモノト  
看做ス

第二十條 政府又ハ道府縣ノ開設シタル博覽會又ハ共進會ニ出品スル物品ニ付其ノ出品前豫メ之  
ヲ特許局長ニ届出テ博覽會又ハ共進會ニ於テ其ノ物品ヲ受領セシ日ヨリ六箇月以内ニ其ノ實用  
新案ノ登録ヲ出願スルトキハ先ノ届出ノ日ニ於テ登録ヲ出願シタルモノト看做ス

工業所有權ニ付帝國ト相互保護ニ關スル條約アル國ニ於テ萬國博覽會ノ開設アルニ當リ其ノ國  
ニ於テ出品ニ對シ與ヘタル登録願保護ノ期間ハ帝國內ニ於テモ有效トス

第二十一條 實用新案登録ノ出願アリタルトキハ特許局長ハ特許局審査官ヲシテ之ヲ審査セシム  
ヘシ

第二十二條 特許局審査官ニ於テ査定ヲ爲シタルトキハ特許局長ハ其ノ査定ヲ出願人ニ送付スヘ  
シ

第二十三條 特許局審査官ハ第二條及第十八條ノ規定ニ該當スルヤ否ニ付審査スヘシ但シ第一條

ノ規定ニ該當セサルコトヲ發見シタルトキハ之ヲ理由トシテ登録拒絕ノ査定ヲ爲スヘシ

第二十四條 登録拒絕ノ査定ヲ受ケタル者之ニ不服ナルトキハ其ノ送付ヲ受ケタル日ヨリ三十日  
以内ニ特許局ニ再審査ヲ請求スルコトヲ得

前項ノ請求アリタルトキハ特許局長ハ前審査ニ關與セサル特許局審査官ヲシテ之ヲ審査セシム  
ヘシ

前條但書ニ依ル査定ニ對シ不服アル者再審査ノ請求ヲ爲シタル場合ニ於テハ特許局審査官ハ其  
ノ理由ニ付テモ亦審査スヘシ

第二十五條 第三十八條及第三十九條ノ規定ハ審査ニ之ヲ準用ス

第二十六條 登録スヘシトノ査定ヲ受ケタル者其ノ送付ヲ受ケタル日ヨリ三十日以内ニ登録ヲ請  
求スルトキハ特許局長ハ其ノ實用新案ヲ登録シ登録證ヲ下付スヘシ

第二十七條 實用新案ノ登録ヲ請求スル者ハ一實用新案ニ付一物品毎ニ登録料金十五圓ヲ納ムヘ  
シ

實用新案權存續期間ノ延長ヲ請求スル者ハ一實用新案ニ付一物品毎ニ登録料金三十圓ヲ納ムヘ  
シ

第二十八條 實用新案ニ關スル登録ハ實用新案原簿ニ之ヲ爲スヘシ

第二十九條 登録實用新案ニ關スル書類ノ謄本、登録證ノ模本、證明圖面ノ翻製又ハ書類ノ閱覽ヲ  
要スル者ハ其ノ事由ヲ説明シ之ヲ特許局ニ請求スルコトヲ得但シ秘密ヲ要スルモノハ此ノ限ニ  
在ラス

第三十條 特許局ハ實用新案公報ヲ發行スヘシ

實用新案公報ニハ登録實用新案ニ關スル重要ナル事項ヲ掲載スヘシ

第四章 審判及出訴

第三十一條 登録實用新案カ第一條第二條又ハ第十八條ノ規定ニ違フモノナルコトヲ發見シタル者ハ特許局ニ無効ノ審判ヲ請求スルコトヲ得

第三十二條 登録實用新案カ互ニ抵触スルヤ否又ハ登録實用新案ト實用新案ノ登録ヲ受ケサル物品ト抵触スルヤ否ニ付利害關係人ハ特許局ニ抵触ノ審判ヲ請求スルコトヲ得

第三十三條 審判ノ請求ハ審判請求書ヲ差出シテ之ヲ爲スヘシ審判請求書ニハ一定ノ申立及理由ヲ記載スルコトヲ要ス

第三十四條 特許局ニ於テ審判請求書ヲ受理シタルトキハ其ノ副本ヲ被請求人ニ送付シ相當ノ期間ヲ指定シ答辯書ヲ差出サシムヘシ  
特許局ハ必要ト認ムルトキハ相當ノ期間ヲ指定シ請求人又ハ被請求人ヲシテ辯駁書又ハ答辯書ヲ差出サシムルコトヲ得

第三十五條 審判ハ審判官三人又ハ五人ノ合議ニ依リ之ヲ行ヒ審判官中一人ヲ審判長トス

第三十六條 審判長ハ職權又ハ當事者ノ申立ニ依リ口頭審判ヲ爲スコトヲ得

口頭審判ハ之ヲ公開ス但シ安寧秩序又ハ風俗ヲ紊ルノ虞アルトキハ此ノ限ニ在ラス

第三十七條 審判請求人又ハ被請求人成規又ハ指定ノ期間内ニ答辯書又ハ辯駁書ヲ差出サス其ノ他指定ノ手續ヲ爲サス又ハ口頭審判期日ニ出頭セサルトキハ審判長ハ直ニ審判ヲ終結スルコトヲ得

第三十八條 審判ニ關シ必要アルトキハ特許局ハ職權又ハ當事者ノ申立ニ依リ證據調ヲ爲シ且當

事者ノ申立サル事實ヲ斟酌スルコトヲ得

前項證據調ハ區裁判所又ハ臺灣地方法院其ノ他裁判事務ヲ行フ官廳ニ之ヲ囑託スルコトヲ得

第三十九條 證據調ニ付テハ民事訴訟法中證據調ニ關スル規定ヲ準用ス但シ特許局ニ於テ爲ス證據調ニ關シテハ罰金ノ言渡ヲ爲シ又ハ勾引ヲ命スルコトヲ得ス

第四十條 審判ニ關スル費用ノ負擔ハ終局審決ニ依リ之ヲ定ム  
費用ノ負擔ニ付テハ民事訴訟法中訴訟費用ニ關スル規定ヲ準用ス

第四十一條 審決アリタルトキハ特許局長ハ之ヲ當事者ニ送付スヘシ

第四十二條 終局審決ニ對シ不服アル者ハ其ノ審決カ法律ヲ適用セス又ハ不當ニ適用シタルコトヲ理由トスルトキニ限り審決ノ送付ヲ受ケタル日ヨリ六十日以内ニ大審院ニ出訴スルコトヲ得

前項ノ出訴及裁判ニ付テハ民事訴訟ノ上告及其ノ裁判ニ關スル規定ヲ準用ス

第四十三條 大審院ニ於テ出訴ヲ理由アリトスルトキハ原審決ヲ破毀シ更ニ審判ヲ爲サシムル爲事件ヲ特許局ニ差戻スヘシ

大審院ニ於テ裁判ヲ爲スニ當リ法律ノ點ニ付表シタル意見ハ其ノ事件ニ關シ特許局ヲ羈束スルモノトス

第四十四條 民事又ハ刑事ノ訴訟ニ付實用新案權ニ關シ爭アル場合ニ於テ裁判所ハ第三十一條又

ハ第三十二條ノ請求ニ依ル審決ノ確定ニ至ル迄其ノ訴訟ヲ中止スルコトヲ得

第四十五條 審判及出訴ノ費用額ニ關シテハ民事訴訟費用法ヲ準用シ特許局長請求ニ依リ之ヲ決定ス

前項ノ決定ハ強制執行ニ關シテハ公證人ノ作リタル債務名義ト看做ス但シ其ノ執行力アル正本ハ特許局官吏之ヲ付與ス

第五章 罰則

第四十六條 實用新案ノ登録ヲ受ケタル物品ヲ偽造、模造シ又ハ偽造品、模造品ヲ販賣、擴布若ハ使用シタル者ハ十五日以上一年以下ノ重禁錮又ハ十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス

實用新案ノ登録ヲ受ケタル物品ト同一又ハ類似ノモノナルコトヲ知リ之ヲ外國ヨリ輸入シタル者ハ罰前項ニ同シ

本條ノ犯罪ハ實用新案權者ノ告訴ヲ待テ其ノ罪ヲ論ス

第四十七條 前條ノ場合ニ於テハ其ノ偽造品、模造品、輸入品ハ之ヲ沒收シ實用新案權者ニ給付ス

第四十八條 詐偽ノ所爲ヲ以テ實用新案ノ登録ヲ受ケタル者又ハ實用新案ノ登録ヲ受ケサル物品又ハ其ノ包装上ニ實用新案登録ノ標記ヲ附シ若ハ之ニ紛ハシキ表示ヲ爲シタル者又ハ情ヲ知リテ其ノ物品ヲ販賣シタル者ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮又ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

實用新案ノ登録ヲ受ケサル物品ヲ販賣又ハ擴布スル爲廣告、看板、引札等ニ於テ實用新案登録品タルニ紛ハシキ表示ヲ爲シタル者ハ罰前項ニ同シ

第四十九條 證人、鑑定人又ハ通事ニシテ特許局又ハ其ノ囑託ヲ受ケタル區裁判所又ハ臺灣地方法院其ノ他裁判事務ヲ行フ官廳ニ對シ偽證又ハ詐偽ノ陳述ヲ爲シタルトキハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

賄賂其ノ他ノ方法ヲ以テ人ニ囑託シ偽證又ハ詐偽ノ陳述ヲ爲サシメタル者ハ罰前項ニ同シ

前二項ノ罪ヲ犯シタル者其ノ事件ノ査定又ハ審決ニ至ラサル前特許局又ハ其ノ囑託ヲ受ケタル區裁判所又ハ臺灣地方法院其ノ他裁判事務ヲ行フ官廳ニ自首シタルトキハ本刑ヲ免ス

第五十條 特許局ヨリ證人、鑑定人又ハ通事トシテ呼出サレタル者正當ノ理由ナクテ呼出ニ應セス又ハ其ノ義務ヲ盡ササルトキハ四圓以上四十圓以下ノ罰金ニ處ス

附則

第五十一條 本法ハ明治三十八年七月一日ヨリ之ヲ施行ス

第五十二條 左ノ場合ニ於テハ發明特許又ハ意匠登録ノ出願ヲ爲シタル日ヲ以テ第十四條及第八條ノ適用上實用新案ノ登録出願ノ日ト看做ス

一 本法施行前一箇年以内ニ於テ發明特許又ハ意匠登録ヲ出願シ本法施行前特許スヘカラス又ハ登録スヘカラストノ査定ヲ受ケタル者本法施行後三十日以内ニ其ノ發明又ハ意匠ニ係ル物品ニ付實用新案ノ登録ヲ出願シタルトキ

二 本法施行前發明特許又ハ意匠登録ヲ出願シ本法施行後ニ於テ特許スヘカラス又ハ登録スヘカラストノ査定ヲ受ケタル者其ノ査定ノ送付ヲ受ケタル日ヨリ三十日以内ニ其ノ發明又ハ意匠ニ係ル物品ニ付實用新案ノ登録ヲ出願シタルトキ

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル醫病豫防法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御 名 御 璽

明治三十八年二月十五日

内閣總理大臣 伯耆 桂 太郎  
農商務大臣 男爵 清浦 奎吾

法律第二十二號(官報二月十六日)

蠶病預防法

- 第一條 本法ニ於テ蠶病ト稱スルハ微粒子病軟化病硬化病膿病及繻阻病ヲ謂フ
- 第二條 本法ニ於テ蠶種製造者ト稱スルハ他人ニ讓渡スノ目的ヲ以テ蠶種ヲ製造スル者ヲ謂フ  
蠶種製造者ハ命令ノ定ムル所ニ從ヒ蠶種製造ノ届出ヲ爲スヘシ此ノ届出ヲ爲ササル者ハ蠶種製造者ト看做サス
- 第三條 蠶種製造者、養蠶者、生絲製造者又ハ生繭ノ賣買者ハ殺菌乾繭ニ從事スル者ハ命令ノ定ムル所ニ依リ病蠶、蠶阻及其ノ繭ヲ滅殺シ共ノ他蠶病預防ノ爲ニ必要ナル施設ヲ爲スヘシ  
主務大臣ハ學術研究ノ爲養蠶、生絲製造又ハ殺菌乾繭ヲ爲ス者ニ對シ前項ノ規定ヲ適用セサルコトヲ得
- 第四條 蠶種製造者ハ命令ノ定ムル所ニ依リ蠶室及蠶具ノ消毒ヲ行フヘシ
- 第五條 蠶種製造者ハ検査合格ノ原種ヨリ産出シタル繭ヲ用ウルニ非サレハ蠶種ヲ製造スルコトヲ得ス
- 第六條 蠶種製造者ハ左ニ掲クル繭ヲ以テ蠶種ヲ製造スルコトヲ得ス
  - 一 二繭以上合同シテ作りタル繭
  - 二 繭層片薄ナル繭又ハ形狀ヲ失スル繭
  - 三 繭層ノ厚薄ノ全量百ニ對シ一化性ニ在リテハ十、二化性ニ在リテハ七、多化性ニ在リテハ六ニ達セサルモノ
  - 四 繭兒ノ發育不良ニシテ收購ノ量著シク減少シタルモノ

五 蠶種製造者ニ非サル者ノ飼育シタル蠶兒ヨリ産出シタル繭

- 第七條 蠶種製造者ハ原種ヲ複製ニスヘシ
- 第八條 蠶種製造者ハ蠶種製造用ノ蠶兒ト同一ノ飼育時期ニ於テ製絲用ノ蠶兒ヲ飼育スルコトヲ得ス  
蠶種製造者ハ行政廳ノ許可ヲ受クルニ非サレハ蠶兒ヲ讓渡シ又ハ讓受クルコトヲ得ス
- 第九條 蠶種製造者ハ同一飼育時期ニ於テ他ノ蠶種製造者又ハ養蠶者ト同一ノ建物又ハ蠶具ヲ共用スルコトヲ得ス
- 第十條 蠶種製造者ハ收購後ニ於テ播散及繭、産卵後ニ於テ原種ニ在リテハ出殼繭、母蛾及卵、越年スル製絲用種ニ在リテハ出殼繭及卵、越年セサル製絲用種ニ在リテハ出殼繭ノ検査ヲ受クヘシ但シ越年セサル製絲用種ニ在リテモ卵ノ検査ヲ受ケシムルコトヲ得
- 第十一條 主務大臣ハ必要ト認ムルトキハ本法中蠶種製造者ニ關スル規定ノ全部又ハ一部ヲ自家用又ハ學術研究ノ爲蠶種ヲ製造スル者ニ適用スルコトヲ得
- 第十二條 行政廳ハ第十條ノ検査ニ合格シタル蠶種ニ證明ヲ附シ不合格ノ蠶種ヲ燒棄スヘシ
- 第十三條 検査合格ノ證明ナキ蠶種及其ノ蠶種ヨリ産出シタル蠶兒ハ之ヲ讓渡スルコトヲ得ス但シ學術研究ノ爲製造シタル蠶種ニシテ命令ノ定ムル所ニ依リ検査合格ト看做サレタルモノ及其ノ蠶種ヨリ産出シタル蠶兒ハ此ノ限ニ在ラス
- 第十四條 本法ヲ施行セサル地又ハ外國ニ於テ製造シタル蠶種ハ學術研究ノ爲主務大臣ノ認可ヲ受ケタル場合ヲ除クノ外之ヲ移入又ハ輸入スルコトヲ得ス
- 第十五條 錯誤ニ因リ又ハ本法ノ規定ニ違反シテ爲シタル検査合格ノ證明ハ行政廳ニ於テ之ヲ取消スヘシ

第十八條 當該吏員ハ蠶病豫防ニ關スル狀況ヲ臨檢シ検査ノ爲無償ニテ物品ヲ收去シ其ノ他必要ナル處分ヲ爲スコトヲ得

前項ノ吏員ハ其ノ證據ヲ携帶スヘシ

第十七條 當該吏員ハ自己同一戸籍内ニ在ル者又ハ同居者ニ對シ前條ノ臨檢及第十條ノ検査ヲ行フコトヲ得ス

第十八條 蠶病豫防事務ノ費用ハ府縣ノ負擔トス

沖繩縣ニ於テハ國庫ノ負擔トス

第十九條 府縣ハ命令ノ定ムル所ニ依リ蠶種検査ニ關シ手数料ヲ徵收スルコトヲ得

第二十條 府縣ハ命令ノ定ムル所ニ依リ蠶病豫防ノ爲必要ナル吏員ヲ置クヘシ

第二十一條 詐偽ノ所爲ヲ以テ第十條ノ検査ヲ受ケタル者又ハ第八條第二項第十三條若ハ第十四條ノ規定ニ違背シタル者ハ二百圓以下ノ罰金ニ處シ其ノ犯罪ニ係ル蠶種、蠶兒及繭ハ之ヲ沒收シ既ニ讓渡シタルトキハ其ノ代金ヲ追徵ス

第二十二條 當該吏員本法ノ執行ニ關シ不正ノ所爲アリタルトキハ一年以下ノ重禁錮ニ處シ四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス其ノ刑法ニ正條アルモノハ刑法ニ依ル

第二十三條 第三條第一項、第四條乃至第六條、第八條第一項、第九條又ハ第十七條ノ規定ニ違背シタル者ハ百圓以下ノ罰金ニ處ス

本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ニ依ル當該吏員ノ指示ニ從ハス若ハ其ノ職務執行ヲ妨ケタル者ハ前項ニ同シ其ノ刑法ニ正條アルモノハ刑法ニ依ル

第二十四條 本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ノ規定ニ違背シタル者ニハ刑法ノ減輕、再犯加重

及赦罪俱發ノ例ヲ用非ス

第二十五條 營業者カ未成年者又ハ禁治產者ナルトキハ本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ノ規定ニ依リ營業者ニ適用スヘキ罰則ハ之ヲ法定代理人ニ適用ス但シ其ノ營業ニ關シ成年者ト同一ノ能力ヲ有スル未成年者ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

第二十六條 營業者ハ其ノ代理人、戶主、家族、同居者、雇人其ノ他ノ從業者ニシテ其ノ業務ニ關シ本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ノ規定ニ違背シタルトキハ自己ノ指揮ニ出サルノ故ヲ以テ處罰ヲ免ルルコトヲ得ス

第二十七條 前二條ノ場合ニ於テハ禁錮又ハ拘留ノ刑ニ處スルコトヲ得ス

第二十八條 明治三十三年法律第五十二號ノ規定ハ本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ニ依ル犯罪ニ之ヲ準用ス

附則

第二十九條 本法ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

蠶種検査法ハ之ヲ廢止ス

第三十條 本法ハ命令ヲ以テ指定スル地ニ之ヲ施行セシム

第三十一條 本法中府縣ニ關スル規定ハ北海道ニ於テハ之ヲ北海道地方費ニ準用ス

○ 朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル郵便貯金法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年二月十五日

内閣總理大臣 伯耆 桂 太郎  
遞信大臣 大浦 兼武

法律第二十三號(官報二月十六日)

郵便貯金法

- 第一條 郵便貯金ハ政府之ヲ管掌ス
- 第二條 郵便貯金ノ預入ハ郵便貯金通帳ニ依リ其ノ拂戻ハ拂戻證書ニ依リ之ヲ爲ス但シ命令ヲ以テ特別ノ規定ヲ設ケタル場合ハ此ノ限ニ在ラス
- 第三條 一人ノ郵便貯金制限額ハ左ノ如シ
  - 一 一度ノ預入額 十錢以上
  - 二 貯金總額 千圓以下
- 預入金ノ端數ハ圓位ヲ限トス
- 第四條 左ニ掲ケル預入金ニ付テハ前條第一項第二號ノ制限ヲ適用セズ
  - 一 公共團體、社寺、學校又ハ營利ヲ目的トセサル法人若ハ團體ノ預入金
  - 二 命令ノ規定ニ依ル共同貯金ノ預入金
  - 三 產業組合ノ預入金
  - 四 振替計算ノ爲ニスル預入金
- 第五條 郵便貯金通帳ハ命令ヲ以テ定ムル場合ヲ除クノ外一人一冊ヲ限トス
 

前項ノ規定ニ違反シ二冊以上ノ通帳ヲ以テ貯金ノ預入ヲ爲シタル者アルトキハ最初ノ通帳、通帳ノ日附同一ナルトキハ貯金ノ最多額ナルモノニ記入シタル貯金ノ外利子ヲ付セズ

前項ニ依リ利子ヲ付スヘカラサル貯金ニ付既ニ拂戻シタル利子アルトキハ現ニ存在スル貯金ヨリ之ヲ控除シ又ハ別ニ之ヲ追徴ス

- 第六條 郵便貯金額第三條第一項第二號ノ制限ヲ超過シタル場合ニ於テ郵便貯金預ケ人之ヲ其ノ制限以内ニ減額セサルトキハ郵便官署ハ其ノ制限以内ニ減額スルニ必要ナル限度ニ於テ貯金ノ一部ヲ以テ國債證券ヲ購入シ之ヲ保管スヘシ
- 第七條 郵便切手及支拂期ノ開始セル證券ハ命令ノ定ムル所ニ依リ郵便貯金ニ預入スルコトヲ得
- 第八條 郵便貯金ノ利子ニ關スル規程ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム
- 第九條 郵便官署ハ郵便貯金預ケ人ノ請求ニ因リ其ノ貯金ノ一部ヲ以テ國債證券其ノ他ノ證券ヲ購入保管シ又ハ之ヲ賣却スルコトヲ得其ノ證券ノ種類ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム
- 第十條 郵便貯金排出ニ關スル證書ノ有効期間ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム
- 第十一條 郵便貯金ニ關シ無能力者ノ郵便官署ニ對シテ爲シタル行爲ハ能力者ノ爲シタルモノト看做ス
- 第十二條 郵便貯金及保管ニ係ル證券ハ命令ヲ以テ定ムル場合ヲ除クノ外之ヲ讓渡スコトヲ得ス
- 第十三條 成規ノ手續ヲ經テ郵便貯金ヲ排出シ又ハ保管ニ係ル證券ヲ交付シタルトキハ正當ノ拂出又ハ交付ヲ爲シタルモノト看做ス
- 第十四條 郵便官署ハ郵便貯金ニ關スル取扱ノ遲延ニ因リ生シタル損害ニ付賠償ノ責ニ任セス
- 第十五條 郵便官署ハ郵便貯金預ケ人ノ眞偽ヲ調査スル爲メ預ケ人ヲシテ必要ナル證明ヲ爲サシムルコトヲ得
- 第十六條 郵便官署ハ必要ナル場合ニ於テ郵便貯金通帳ヲ檢閲スルコトヲ得
- 第十七條 郵便貯金ニ關スル書類ニハ印紙稅ヲ課セス
- 第十八條 十年間郵便貯金ノ預入及拂出ナク且利子記入又ハ檢閱ノ爲ニスル通帳ノ提出ナキ場合



ニ於テハ郵便官署ハ其ノ預ケ人ニ對シ郵便貯金通帳ノ提出又ハ預入金ノ處分ヲ爲スヘキ旨ヲ催告シ其ノ催告ノ日ヨリ六十日內ニ通帳ヲ提出セヌ又ハ預入金ノ處分ヲ申出サルトキハ其ノ郵便貯金及保管ニ係ル證券ハ國庫ノ所有ニ歸ス

郵便貯金拂出ニ關スル證券ノ有効期間満了ノ日ヨリ三年間再度證券交付又ハ拂出金戻入ノ請求ナキ場合ニ於テハ其ノ拂出金ハ國庫ノ所有ニ歸ス

一定ノ期間拂戻ヲ爲ササル條件ヲ以テ預入シタル郵便貯金ニ付テハ其ノ期間ハ第一項ノ期間ニ算入セス

附則

第十九條 本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

郵便貯金條例ハ之ヲ廢止ス

第二十條 本法施行前ニ預入シタル郵便貯金ニ關シテハ本法ノ規定ヲ適用ス

本法施行前又ハ本法施行後一年內ニ第十八條第一項ノ期間ヲ經過シ又ハ經過スヘキ郵便貯金ニ付テハ本法施行ノ際郵便官署ニ於テ其ノ預ケ人ニ對シ郵便貯金通帳ノ提出又ハ預入金ノ處分ヲ爲スヘキ旨ヲ催告スヘシ其ノ催告ノ日ヨリ一年內ニ通帳ヲ提出セヌ又ハ預入金ノ處分ヲ申出サルトキハ更ニ其ノ旨ヲ公告シ尙一年內ニ之ニ應スル者ナキトキハ其ノ貯金及保管ニ係ル國債證券ハ國庫ノ所有ニ歸ス

本法施行前發行シタル拂戻證券ノ有効期間ハ本法施行ノ日ヨリ六十日トス

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル古物商取締法中改正法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年二月二十三日

内閣總理大臣 伯耆 桂 太郎  
内務大臣 子爵 芳川 顯正

法律第二十四號 (官報二月二十四日)

古物商取締法中左ノ通改正ス

第二十四條但書ヲ削ル

附則

本法ハ明治三十八年十月一日ヨリ之ヲ施行ス

〔參照〕

法律第十三號古物商取締法(明治二十八年三月六日官報)抄録

第二十四號 此ノ法律ハ明治二十八年九月一日ヨリ施行ス但シ沖繩縣ニ施行セス

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル質屋取締法中改正法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年二月二十三日

内閣總理大臣 伯耆 桂 太郎  
内務大臣 子爵 芳川 顯正

法律第二十五號 (官報二月二十四日)

質屋取締法中左ノ通改正ス

第二十七條但書ヲ削ル

附則

本法ハ明治三十八年十月一日ヨリ之ヲ施行ス

〔參照〕

法律第十四號釐金取銷法(明治二十八年三月十三日官報)抄錄  
第二十七條 此ノ法律ハ明治二十八年九月一日ヨリ施行ス但シ沖繩縣ニ施行セス

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル砂糖消費稅法中改正法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年二月二十三日

內閣總理大臣伯爵桂 太郎  
大藏大臣男爵曾根荒助

法律第二十六號(官報二月二十四日)

砂糖消費稅法中左ノ通改正ス

第十二條之三第三項ニ差リ但書ヲ加フ

但シ其書ニ因リ由失レタルモノニシテ政府ノ承認ヲ受ケタルトキハ此ノ限ニ在ラス

〔參照〕

法律第十三號砂糖消費稅法(明治三十四年三月三十日)抄錄  
第十一條ノ一第三項

第二項ノ砂糖及白糖ヲ引取リタル後六箇月以内ニ砂糖糖氷又ハ酒精ヲ製造セサルトキハ消費稅ヲ徵收ス

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル輸入原料砂糖戻稅法中改正法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年二月二十三日

內閣總理大臣伯爵桂 太郎  
大藏大臣男爵曾根荒助

法律第二十七號(官報二月二十四日)

輸入原料砂糖戻稅法中左ノ通改正ス

第一條第二項ヲ左ノ如ク改ム

輸入ノ砂糖ニシテ和蘭標本相第十四號以下ノモノヲ原料トシ政府ノ承認ヲ得テ精製糖及氷砂糖ヲ製造シタル者ハ其ノ原料砂糖ノ數量ヨリ製造ノ際生成シタル和蘭標本相第十四號以下ノ砂糖ノ數量ヲ控除シタル數量ニ對シ納付シタル輸入稅ニ相當スル金額ノ下付テ政府ニ請求スルコトヲ得

〔參照〕

法律第三十三號輸入原料砂糖戻稅法(明治三十五年三月二十六日官報)抄錄  
第一條 輸入ノ砂糖ニシテ和蘭標本相第十四號以下ノモノヲ原料トシ政府ノ承認ヲ得テ精製糖及氷砂糖ヲ製造スル者ハ其ノ原料ニ對シ納付シタル輸入稅ニ相當スル金額ノ下付テ政府ニ請求スルコトヲ得

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル巡查看守退隱料及遺族扶助料法中改正法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年二月二十三日

内閣總理大臣 伯爵 桂 太郎  
陸軍大臣 寺内正毅  
司法大臣 波多野敬直

法律第二十八號(官報二月二十四日)

巡查看守退隱料及遺族扶助料法中左ノ通改正ス

第二十六條及第二十八條第二項中「海軍監獄看守」ノ下ニ「陸軍監獄看守」ヲ「兼職院守衛」ノ下ニ「女監取締」ヲ加フ

第二十九條 陸軍會計卒ニシテ陸軍監獄看守ノ職ヲ奉シ引續キ陸軍看守卒ト爲リ尙引續キ陸軍監獄看守ト爲リタル者又ハ陸軍看守卒ヨリ陸軍監獄看守ト爲リタル者ニ付テハ前在職中ノ年月數ヲ陸軍監獄看守ノ在職年月數ニ通算ス但シ軍人恩給法ニ依リ免除恩給ヲ受ケタル者ハ此ノ限ニ在ラス

前項ニ依リ通算シタル會計卒及看守卒ノ在職年月數ハ官吏恩給法ニ依ル在官年數及軍人恩給法ニ依ル服役年數ニハ之ヲ算入セス

附則

本法ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

第二十九條ノ規定ハ明治三十四年八月一日以後本法施行以前ニ於テ退隱料、扶助料若ハ一時金ヲ受ケ又ハ受クヘキ事由ノ生シタル場合及勲績十年未滿ニシテ在職中死亡シタル者アリタル場合ニモ之ヲ適用ス

前項ノ期間内ニ於テ既ニ一時金ヲ受ケタル者又ハ其ノ遺族ニシテ前項ニ依リ退隱料又ハ扶助料ヲ受クルトキハ一時金ヲ返納セシム共ノ完納ニ至ル迄退隱料又ハ扶助料ヲ以テ返納金ニ充ツ

第二項ニ依リ退隱料、扶助料又ハ一時金ヲ請求シ得ヘキ期間ハ本法施行ノ日ヨリ之ヲ起算ス

女監取締ノ明治三十六年三月三十一日以前ニ於ケル勲績年數ハ巡查看守退隱料及遺族扶助料法ニ規定スル勲績年數ニ非サルモノト看做ス

〔參照〕

法律第三十八號巡查看守退隱料及遺族扶助料法(明治三十四年七月二十六日官報)抄録

第二十六條 本法ハ陸軍監獄看守、海軍監獄看守、海軍警衛、兼職院守衛、兼職院守衛及其ノ遺族ニ之ヲ適用ス

第二十八條第二項

明治十五年太政官達第六十六號(巡查看守補助例實施ノ府縣人員減少等ニ因リ免職ノ者ハ慰勞金支給ノ件)ハ巡查看守ニ明治三十三年法律第三十號(傳染病預防救濟ニ從事スル者ノ手當金ニ關スル件)ハ巡查、看守、陸軍監獄看守、海軍監獄看守、海軍警衛、兼職院守衛、兼職院守衛及其ノ遺族ニ之ヲ適用セス

除帝國議會ノ協贊ヲ經タル明治三十五年法律第二十九號中改正法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年二月二十三日

内閣總理大臣 伯爵 桂 太郎  
陸軍大臣 寺内正毅

法律第二十九號(官報二月二十四日)

明治三十五年法律第二十九號中「臺灣ニ在勤スル巡查看守」ノ下ニ「陸軍監獄看守及陸軍警衛」ヲ加フ

附則

本法ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

〔參照〕

明治三十五年五月廿四日法律第二十九號ハ濠洲ニ在動スル巡査看守退障料及遺族扶助料ニ關スル件ナリ

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル明治三十年法律第十三號中改正法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年二月二十三日

内閣總理大臣 伯耆 桂 太郎  
海軍大臣 男爵 山本 權兵衛  
陸軍大臣 寺内 正毅

法律第三十號 (官報 二月二十四日)

明治三十年法律第十三號中「陸軍ヲ陸海軍ニ改ム

〔參照〕

明治三十年六月廿四日法律第十三號ハ陸軍召集旅費支出ニ關スル件ナリ

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル耕地整理法中改正法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年二月二十三日

内閣總理大臣 伯耆 桂 太郎  
農商務大臣 男爵 清浦 奎吾

法律第三十一號 (官報 二月二十四日)

耕地整理法中左ノ通改正ス

第一條 本法ニ於テ耕地整理ト稱スルハ耕地ノ利用ヲ増進スル目的ヲ以テ其ノ所有者共同シテ土

地ノ交換若ハ分合、區劃形狀ノ變更、道路、堤塘、畦畔、溝渠、沼池等ノ變更廢置及之ニ伴フ灌溉排水

ニ關スル設備並工事を行フヲ謂フ

第三十條中「命スルコトヲ得」ヲ「命シ又ハ整理施行發起ノ認可ヲ取消スコトヲ得」ニ改ム

第三十二條ノ次ニ左ノ一條ヲ加フ

第三十二條ノ二 農商務大臣ハ整理施行ニ關シ其ノ職權ノ一部ヲ地方長官ニ委任スルコトヲ得

第六十六條第二號中「第三十八條第二項」ヲ「第三十八條第二項」ニ改ム

〔參照〕

法律第八十二號耕地整理法(明治三十二年三月二十二日官報)抄録

第一條 本法ニ於テ耕地整理ト稱スルハ耕地ノ利用ヲ増進スル目的ヲ以テ其ノ所有者共同シテ土地ノ交換若ハ分合、區劃形

狀ノ變更及道路、畦畔若ハ溝渠ノ變更廢置ヲ行フヲ謂フ

第三十條 農商務大臣必要ト認ムルコトハ設計書又ハ規約ノ變更ヲ命スルコトヲ得

第六十六條 發起人又ハ整理委員左ノ各號ニ該管スル場合ニ於テハ二圓以上五十圓以下ノ過料ニ處ス

二 第三十八條第一項又ハ第二十九條ノ規定ニ違反シテ整理工事を着手シタルトキ

股帝國議會ノ協贊ヲ經タル司法官試補實地修習期間減縮ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシ

御名 御璽

明治三十八年二月二十五日

内閣總理大臣 伯爵 桂 太郎  
司法大臣 波多野敬直

法律第三十二號 (官報 二月二十七日)

司法官試補ノ實地修習期間ハ今後三年間ハ一年六箇月迄ニ減縮スルコトヲ得

股帝國議會ノ協贊ヲ經タル地租條例中改正法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年二月二十八日

内閣總理大臣 伯爵 桂 太郎  
内務大臣 子爵 芳川 顯正  
大藏大臣 男爵 曾根 克助

法律第三十三號 (官報 三月一日)

地租條例中左ノ通改正ス

第四條 左ニ掲グル土地ニ付テハ其地租ヲ免ス

- 一 國府縣郡市町村其他勅令ヲ以テ指定スル公共團體ニ於テ公用又ハ公共ノ用ニ供スル土地但有料借地ハ此限ニ在ラス
- 二 府縣郡市町村其他勅令ヲ以テ指定スル公共團體カ公用又ハ公共ノ用ニ供スヘキモノト定ムル其所有地但命令ノ定ムル期間内ニ公用又ハ公共ノ用ニ供セサルトキハ此限ニ在ラス
- 三 鄉村社地
- 四 墳墓地
- 五 用惡水路、溜池、隄塘、井溝
- 六 鐵道用地
- 七 保安林

八 公衆ノ用ニ供スル道路

府縣郡市町村其他ノ公共團體ハ前項ノ土地ニ租稅其他ノ公課ヲ課スルコトヲ得ス但所有者以外ノ者前項第一號又ハ第二號ノ土地ヲ使用收益スル場合ニ於テ其土地ニ對シ使用者ニ租稅其他ノ公課ヲ課スルハ此限ニ在ラズ

第十二條 削除

第十三條 地租ハ左ニ掲クル者ヨリ之ヲ徵收ス

- 一 質權ノ目的タル土地ニ付テハ質權者
  - 二 百年ヨリ長キ存続期間ノ定アル地上權ノ目的タル土地ニ付テハ地上權者
  - 三 其他ノ土地ニ付テハ所有者
- 前項ニ於テ質權者、地上權者、所有者ト稱スルハ土地臺灣ニ質權者、地上權者、所有者トシテ登錄セラレタル者ヲ謂フ

附則

本法中第十三條第一項第二號ハ明治三十八年分地租ヨリ之ヲ施行ス

明治三十一年法律第四號及明治三十三年法律第十九號ハ之ヲ廢止ス

〔參照〕

第七號布告地租條例(明治十七年三月十五日)抄錄  
 第十四條 公立學校地、神社地、墳墓地、用排水路、溜池、堤岸、井溝、鐵道用地、築設林及公衆ノ用ニ供スル道路ハ地租ヲ免ス  
 第十二條 地租ハ土地實際地籍名者ヨリ徵收ス但買入ノ土地ハ其實取主ニ於テ之ヲ納ムヘシ  
 第十三條 有租地ヲ公立學校地、神社地、墳墓地、築設林ト爲ストキハ其地租ハ許可又ハ命令ヲ受ケタル月分ヨリ月割ヲ以テ之ヲ免シ用排水路、溜池、堤岸、井溝、鐵道用地及公衆ノ用ニ供スル道路ト爲ストキハ其地租ハ工事着手ノ月分ヨリ月割

ヲ以テ之ヲ免ス  
免租地ヲ有租地ト爲ストキ其地租ハ許可ヲ得シ翌月分ヨリ月割ヲ以テ徵收ス

明治三十一年六月廿九日法律第四號ハ條約附則等ノ敷地地租免除ニ關スル件、同三十三年六月廿九日法律第十九號ハ府縣郡市町村其ノ他ノ公共團體ノ所有地免租ニ關スル件ナリ

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル所得稅法中改正法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム  
御名 御璽

明治三十八年二月二十八日

内閣總理大臣 伯爵 桂 太郞  
大藏大臣 男爵 曾根 荒助

法律第三十四號(官報三月一日)  
所得稅法中左ノ通改正ス

第二條中「營業又ハ職業ヲ」又ハ「營業」ニ改ム

第十一條 各稅務署所轄内ニ所得調查委員會ヲ置ク但シ稅務署所轄内ニ在ル市又ハ北海道ノ區ニ付テハ命令ヲ以テ特ニ調查委員會ヲ置クコトヲ得

調查委員ノ定數ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム但シ定數ノ増減ハ改選期ニ於テスルノ外之ヲ爲スコトヲ得ス

第十三條 調查委員ノ選舉區域ハ調查委員會ヲ置クヘキ區域ニ依リ調查委員選舉人ノ選舉區域ハ市町村及北海道ノ區ノ區域ニ依ル但シ東京市、京都市及大阪市ニ在リテハ區ノ區域ニ依ル

第十四條及第十五條中「第八條ノ申告ヲ爲シタル者」前年所得稅ヲ納メタル者ニシテ第八條ノ申

告ヲ爲シタル者ニ改ム

第十八條ニ左ノ二項ヲ加フ

選舉人ハ自ラ投票所ニ到リ投票スヘシ但シ郵便ヲ以テ投票ヲ送付スルコトヲ得

郵便ヲ以テ投票ヲ送付スル場合ニ於テ投票時間ノ終了スルマテニ到達セザリシ投票ハ無効トス

第二十四條ニ左ノ二項ヲ加フ

調査委員ノ定數ヲ増加シタル場合ニ於テ新ニ選舉セラルヘキ調査委員ノ任期ヲ定ムル必要アルトキハ稅務署長之ヲ定メ選舉期日ト共ニ之ヲ公示ス

調査委員ノ定數ヲ減少シタル場合ニ於テ退任者ヲ定ムル必要アルトキ又ハ前項ニ依リ調査委員ヲ増加シタル場合ニ於テ各調査委員ノ任期ヲ定ムル必要アルトキハ抽籤ヲ以テ之ヲ定ム

第二十五條 調査委員會ノ開會日數ハ三十日以内トシ地方ノ情況ニ依リ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第三十條 八月三十日マテニ調査委員會成立セザルトキハ政府其ノ所得金額ヲ決定ス

調査委員會開會ノ日ヨリ第二十五條ノ期間以内ニ又ハ八月三十日マテニ調査終了セザルトキハ所得金額調査未済ノモノニ限リ政府其ノ所得金額ヲ決定ス

第三十一條中「十五日」ヲ「七日」ニ改ム

第三十四條ノ次ニ左ノ一條ヲ加フ

第三十四條ノ二 稅務署長又ハ其ノ代理官ハ調査上必要アルトキハ納稅義務者又ハ納稅義務アリト認ムル者ニ金錢又ハ物品ヲ支拂フノ義務ヲ有スト認ムル者ニ對シ其ノ金額、數量、價額又ハ支拂期日ニ付質問スルコトヲ得

第四十二條第三項ヲ左ノ如ク改ム

第三種ノ所得ニ付テハ所得稅ノ年額ヲ四分セ左ノ四期ニ於テ之ヲ徵收ス但シ納稅者納稅管理人ヲ定ムシテ帝國外ニ住所若ハ居所ヲ移ストキハ其ノ際直ニ其ノ所得稅ヲ徵收スルコトヲ得

第一期 其ノ年九月一日ヨリ三十日限

第二期 其ノ年十一月一日ヨリ三十日限

第三期 翌年一月一日ヨリ三十一日限

第四期 翌年三月一日ヨリ三十一日限

第四十四條第一項但書ヲ左ノ如ク改ム

但シ住所以外ニ在ル納稅者ハ申告シテ居所地ニ於テ所得稅ヲ納ムルコトヲ得

附則

本法ハ明治三十八年分所得稅ヨリ之ヲ適用ス

〔參照〕

法律第十七號所得稅法(明治三十二年二月十三日官報)抄録

第三條 前條ニ該當セザル者此ノ法律施行地ニ資產稅額又ハ職業ヲ有セ若ハ公債社債ノ利子支拂ヲ受クルトキハ其ノ所得ニ付テハ所得稅ヲ納ムル義務アルモノトス

第十一條 各稅務署所轄内ニ所得稅徵收委員會ヲ設ク

第十三條 調査委員ノ選舉區域ハ稅務署ノ管轄區域ニ依ル

第十四條 選舉區域内ニ住所若ハ居所ヲ有シタル者ハ調査委員選舉人ヲ選舉シ又ハ調査委員若ハ調査委員選舉人ニ

第十五條 調査委員選舉人ノ定數ハ其ノ選舉區域内ニ於ケル第八條ノ申告ヲ爲シタル者十八人ニ付一人トス但シ申告者二百人以上ナルトキハ二十八人ニ止メ申告者十八人未滿ナルトキハ十八人トス

第二十五條 調査委員會ハ選クモ毎年八月一日マテニ開會スルヲ要ス  
 第三十條 八月三十一日マテニ調査委員會成立セサルカ又ハ調査終了セサルトハ所得金額調査未済ノ者ニ付テハ政府ニ於テ其ノ所得金額ヲ決定ス  
 第三十一條 政府ハ調査委員會ノ決議ヲ不當ト認ムルトキハ之ヲ再調査ニ付ス 仍其ノ決議ヲ不當ト認ムルトキ又ハ再調査ニ付シタル日ヨリ十五日以内ニ調査終了セサルトキハ政府ニ於テ所得金額ヲ決定ス  
 第四十二條第三項  
 第三種ノ所得ニ付テハ所得税ノ年額ヲ二分シ其ノ年九月及翌年三月之ヲ徴收ス但シ納税者納税管理人ヲ定メシテ帝國外ニ住所アリテ移ストキハ其ノ際直ニ其ノ所得税ヲ徴收スルコトヲ得  
 第四十四條 第三種ノ所得ニ係ル所得税ハ本人住所ノ地ヲ以テ納税地トシ 住所ナキトキハ居所ノ地ヲ以テ納税地トス但シ納税者ハ申告シテ住所又ハ居所以外ノ地ニ於テ所得税ヲ納ムルコトヲ得

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル北海道一級町村及二級町村ヲシテ租税外國庫歲入ヲ徴收セシムル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年二月二十八日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎  
大藏大臣男爵曾禰荒助

法律第三十五號(官報 三月一日)

第一條 北海道廳長官ハ北海道ニ於ケル一級町村及二級町村ヲシテ其ノ町村内ノ租税外國庫歲入ヲ徴收セシムルコトヲ得  
 前項ノ場合ニ於テハ其ノ徴收金額ノ百分ノ四ヲ其ノ町村ニ交付スヘシ  
 第二條 町村ハ避クヘカラサル災害ニ因リ既收ノ歲入金ヲ失ヒタルトキハ其ノ事實ヲ證明シ大藏

大臣ニ其ノ責任免ラ除請フコトヲ得

前項ノ申出アリタルトキハ大藏大臣ハ其ノ事實ヲ審査シ其ノ免除ヲ爲スコトヲ得

附則

本法ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル罹災救助基金法中改正法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年二月二十八日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎  
内務大臣子爵芳川顯正  
大藏大臣男爵曾禰荒助

法律第三十六號(官報 三月一日)

罹災救助基金法中左ノ通改正ス

第十六條ニ左ノ一項ヲ加フ

内務大臣及大藏大臣ハ必要ト認ムル場合ニ於テハ罹災救助基金ノ管理方法ヲ指定スルコトヲ得  
 第十七條ノ二 第三條ノ制限額以上ニ達シタル府縣ハ其ノ年度初ノ超過額二分ノ一ヲ限リ内務大臣及大藏大臣ノ認可ヲ受ケ十箇年以内ノ期限ヲ以テ府縣ノ災害土木費其ノ他ノ事業費ヘ利付ニテ貸出ヲ爲スコトヲ得



朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル北海道罹災救助基金法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年二月二十八日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎  
内務大臣子爵芳川顯正  
大藏大臣男爵曾根荒助

法律第三十七號 (官報 三月二日)

北海道罹災救助基金法

第一條 北海道地方費ニ於テ貯蓄スヘキ罹災救助基金ノ最少額ハ百萬圓トス

前項ノ金額ニ達セザル年度ヨリ遡リ十箇年間ニ本法ニ依リ支出シタル救助費平均年額ノ二十倍ノ金額カ前項ノ金額ヨリ多キトキハ其ノ金額ヲ以テ最少額トス但シ支出額ノ最高及最低年度ハ平均計算ニ加ヘス

第二條 北海道罹災救助基金ノ積立額ハ毎年度北海道地方費豫算ヲ以テ之ヲ定ム但シ二萬圓ヲ下ルコトヲ得ス

第三條 國庫ハ北海道罹災救助基金ノ補助トシテ本法施行ノ初年度ニ於テ一萬圓ヲ交付ス前項ノ外國庫ハ北海道罹災救助基金ノ補助トシテ第一條ノ制限額ニ達スル迄毎年度地方稅ヲ以テ積立ツル金額ノ二分ノ一ヲ交付ス但シ二萬圓ヲ超スルコトヲ得ス

第四條 本法ニ規定スルモノヲ除クノ外北海道罹災救助基金ニハ罹災救助基金法ヲ準用ス但シ同

法中府縣會トアルハ北海道會、市町村トアルハ區町村ニ該當ス

附則

第五條 本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定メ四十箇年度間之ヲ施行ス

北海道ニ於ケル災害救助ニ關スル從來ノ規定ハ其ノ效力ヲ失フ

第六條 從來北海道ニ於テ災害救助ノ爲國庫ヨリ支出シタル貸與金ハ北海道地方費ニ歸屬ス前項ノ貸與金ニシテ返納ヲ受ケメルトキハ北海道罹災救助基金ニ編入スヘシ

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル俘虜處罰ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年二月二十八日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎  
海軍大臣男爵山本權兵衛  
陸軍大臣 寺内 正毅

法律第三十八號 (官報 三月二日)

第一條 俘虜監督者、監視者又ハ護送者ニ對シ 反抗若ハ暴行ノ所爲アル者ハ重禁獄ニ處シ其ノ情

輕キ者ハ六月以上五年以下ノ輕禁獄ニ處ス

第二條 俘虜共謀シテ多衆前條ノ所爲アルトキハ首魁ハ死刑ニ處ス其ノ他ノ者ハ有期流刑ニ處シ其ノ情輕キ者ハ重禁獄ニ處ス

第三條 俘虜共謀シテ多衆逃走ノ所爲アルトキハ首魁ハ有期流刑ニ處シ其ノ情重キ者ハ死刑ニ處

ス其ノ他ノ者ハ重禁獄ニ處シ其ノ情輕キ者ハ六月以上五年以下ノ輕禁錮ニ處ス  
第四條 宣誓解放ヲ受ケタル俘虜宣誓ニ背ク者ハ重禁獄ニ處シ其ノ宣誓ニ背キ兵器ヲ操リ抗敵ス  
ル者ハ死刑ニ處ス

第五條 俘虜逃走セサル宣誓ヲ爲シ之ニ背ク者ハ重禁獄ニ處ス其ノ他ノ宣誓ニ背ク者ハ輕禁錮ニ  
處ス

第六條 第一條乃至第三條ノ規定ハ再ヒ俘虜トナリタル者ノ前ニ俘虜タリシトキニ犯シタル罪ニ  
之ヲ適用セス

第七條 軍法會議ニ於テ俘虜ノ犯罪ヲ審判スルトキハ其ノ階級ニ應シ帝國軍人ニ關スル規定ヲ準  
用ス

附則

本法ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

明治三十七年勅令第二百二十五號ハ之ヲ廢止ス

〔參照〕

明治三十七年勅令第二百二十五號ハ俘虜ノ處罰ニ關スル件ナリ

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル不動産登記法中改正法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年二月二十八日

內閣總理大臣 伯爵 桂 太郎

大藏大臣 伯爵 曾 根 荒助  
司法大臣 波多野敬直

法律第三十九號(官報 三月一日)

不動産登記法中ノ通改正ス

第十一條第一項ヲ左ノ如ク改ム

登記所ハ土地ニ付キ左ニ掲ケタル事項ノ登記ヲ爲シタルトキハ遲滞ナク其旨ヲ土地邊帳所管廳  
ニ通知スルコトヲ要ス

一 所有權ノ保存若クハ移轉

二 質權ノ設定、移轉若クハ消滅

三 百年ヨリ長キ存續期間ノ定アル地上權ノ設定、移轉若クハ消滅又ハ百年ヨリ長キ存續期間  
ヲ百年以下ニ變更シ若クハ百年以下ノ存續期間ヲ百年ヨリ長キ期間ニ變更シ又ハ存續期間  
ノ定ナキ地上權ニ百年ヨリ長キ期間ヲ定メ若クハ百年ヨリ長キ存續期間ノ定アル地上權ヲ  
存續期間ノ定ナキモノト爲シタルコト

〔參照〕

法律第二十四號不動産登記法(明治三十二年二月二十四日官報抄録)

第十一條 登記所ハ土地ニ付キ所有權ノ移轉又ハ質權ノ設定、移轉若クハ消滅ノ登記ヲ爲シタルトキハ遲滞ナク其旨ヲ土地  
邊帳所管廳ニ通知スルコトヲ要ス未登記ノ土地ニ付キ所有權ノ登記ヲ爲シタルトキ亦同シ

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル遺洋漁業獎勵法改正法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年二月二十八日

内閣總理大臣 伯爵 桂 太郎  
農商務大臣 男爵 清浦 奎吾  
逓信大臣 大浦 兼武

法律第四十號 (官報 三月一日)

遼洋漁業獎勵法

第一條 遼洋漁業ヲ獎勵スル爲國庫ハ豫算ノ定ムル所ニ依リ毎年度十五萬圓以內ヲ支出ス

第二條 本法ニ依リ獎勵金ヲ受クルコトヲ得ヘキ者ハ帝國臣民又ハ帝國臣民ノミヲ社員又ハ株主トシテ帝國法律ニ從ヒ設立シタル法人ニ限ル

第三條 主務大臣ハ遼洋漁船検査規程ニ適合シタル日本船舶ヲ以テ遼洋ニ於ケル漁業又ハ漁獲物ノ處理運搬業ニ従事スル者ニ對シ共ノ業務ノ種類場所、期間並船舶ノ構造噸數及年齡ニ從ヒ率ヲ定メ五箇年ヲ超エサル期間ニ於テ漁業獎勵金ヲ下付スルコトヲ得但シ一箇年ノ定額ハ左ノ制限ヲ超ルコトヲ得ス

一 汽船總噸數每一噸 二十二圓

一 帆船總噸數每一噸 十八圓

前項ニ掲ケタル船舶ノ船員ハ共ノ五分ノ四以上帝國臣民タルコトヲ要ス

第四條 主務大臣ハ前條ニ依リ獎勵金ヲ受クヘキ漁船乗組ノ漁獵員ニ對シ漁業ノ種類、場所及期間ニ從ヒ率ヲ定メ漁獵員獎勵金ヲ下付スルコトヲ得但シ一箇年ノ定額ハ左ノ制限ヲ超ユルコトヲ得ス

- 一 漁獵長每一人 七十二圓
- 一 漁獵手每一人 三十六圓
- 一 漁獵夫每一人 十二圓

第五條 主務大臣ハ豫メ認可シタル方法及設計ニ依リ遼洋漁船検査規程ニ定ムル構造ニ適合シタル日本船舶ヲ新造シ若ハ新造セシメ又ハ日本船舶ニ新造ノ機關ヲ据附ケ若ハ据附ケシメタル船舶所有者ニ對シ共ノ噸數、馬力ニ從ヒ率ヲ定メ漁船獎勵金ヲ下付スルコトヲ得但シ左ノ制限ヲ超ユルコトヲ得ス

- 鐵、鋼製 四十圓
- 木鐵交造又ハ木鋼交造 三十五圓
- 木製 三十圓
- 一 蒸汽機關實馬力每一馬力 十圓
- 一 石油發動機關純馬力每一馬力 二十圓

第六條 獎勵金ヲ下付スルコトヲ得ヘキ漁業ノ種類、船舶ノ噸數ノ制限並漁獵員ノ資格及定員ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム漁業ノ種類ニ依リ共ノ漁獵ノ場所ヲ制限スルノ必要アルトキ亦同シ

遼洋漁船検査規程ハ主務大臣之ヲ定ム

第七條 漁業獎勵金ヲ受クヘキ漁業業者又ハ漁獲物處理運搬業者毎業務期間ニ於テ其ノ業務ニ従事スルコト業務期間ノ四分ノ三ニ滿テサルトキハ共ノ期間ニ對スル獎勵金ヲ下付セス但シ船舶ノ沈没、破壊若ハ行術不明又ハ自己ノ責ニ歸スヘカラサル事由ニ因リ業務ニ従事スルコト能ハサル場合ハ此ノ限ニ在ラス

漁業員獎勵金ヲ受クヘキ漁業員毎業務期間ニ於テ其ノ業務ニ從事スルコト業務期間ノ四分ノ三ニ滿テサルトキ又ハ出漁中共ノ船舶ヲ去リタルトキハ其ノ期間ニ對スル獎勵金ヲ下付セス但シ業務中死亡シ又ハ故意若ハ重大ナル過失ニ因ルニ非スレテ傷痕ヲ受ケ若ハ疾病ニ罹リタルトキ及前項但書ノ場合ハ此ノ限ニ在ラス

第八條 漁船獎勵金ヲ受ケタル船舶ノ所有者及其ノ承繼人ハ其ノ獎勵金ヲ受ケタル日ヨリ五箇年間之ヲ外國人ニ讓渡、貸付又ハ擔保ニ供スルコトヲ得ズ但シ既ニ受ケタル漁船獎勵金ヲ償還シタルトキ、天災其ノ他抗拒スヘカワサル強制ニ因リ航行ニ堪ヘサルニ至リタルトキ又ハ主務大臣ノ許可ヲ得タルトキハ此ノ限ニ在ラス

第九條 漁船獎勵金ヲ受ケタル船舶ノ所有者及其ノ承繼人ハ其ノ獎勵金ヲ受ケタル日ヨリ五箇年間主務大臣ニ於テ正當ノ事由ニ因リ已ムヲ得サルモノト認ムル場合ヲ除クノ外毎年業務期間ノ四分ノ三以上遼洋ニ於ケル漁業又ハ漁獲物處理運搬ノ爲之ヲ使用シ又ハ使用セシムルコトヲ要ス

第十條 主務大臣ハ漁業獎勵金ヲ受クル者又ハ漁船獎勵金ヲ受ケタル船舶ノ所有者及其ノ承繼人ヲシテ遼洋漁業ニ關スル調査ヲ爲サシメ及漁業獎勵金ヲ受クル者ノ使用スル船舶又ハ漁船獎勵金ヲ受ケタル船舶ニ遼洋漁業練習生ヲ乗組マシムルコトヲ得

第十一條 遼洋漁業ノ指導、監督及遼洋漁業練習生養成ノ爲必要ナル費用ハ第一條ノ金額ヨリ支出シ之ニ充ツルコトヲ得

第十二條 主務大臣ハ漁業獎勵金ヲ受クル者又ハ漁船獎勵金ヲ受ケタル者及其ノ承繼人ノ業務ヲ監督シ之カ爲必要ナル命令ヲ發シ又ハ處分ヲ爲スコトヲ得

第十三條 主務大臣ハ本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ノ規定ニ違反シ又ハ主務大臣ノ命令ニ従ハサル者ニ對シ獎勵金ノ下付ヲ廢止スルコトヲ得

第十四條 詐偽ノ所爲ヲ以テ獎勵金ヲ受ケタル者又ハ第八條ノ規定ニ違反シタル者ハ三年以下ノ重禁錮又ハ千圓以下ノ罰金ニ處ス

前項ノ罪ヲ犯サムトシテ未タ遂ケサル者ハ刑法未遂犯罪ノ例ニ依リ處斷ス

第十五條 主務大臣ハ詐偽ノ所爲ヲ以テ獎勵金ヲ受ケタル者ニ對シテハ其ノ因テ得タル金額、第八條又ハ第九條ノ規定ニ違反シタル者ニ對シテハ其ノ既ニ受ケタル金額ヲ償還セシムヘシ

前項ノ償還金ハ國稅徵收法ノ規定ニ依リ之ヲ徵收スルコトヲ得

主務大臣ハ前項ノ徵收金ニ付國稅ニ次キ先取特權ヲ有ス

第十六條 本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ノ規定ニ違反シタル者ニハ刑法ノ減輕、再犯加重及數罪併發ノ例ヲ用非ス

第十七條 營業者カ未成年者又ハ禁治產者ナルトキハ本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ノ規定ニ依リ營業者ニ適用スヘキ罰則ハ之ヲ法定代理人ニ適用ス但シ其ノ營業ニ關シ成年者ト同一ノ能力ヲ有スル未成年者ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

第十八條 營業者ハ其ノ代理人、戶主、家族、同居者、雇人其ノ他ノ從業者ニシテ其ノ業務ニ關シ本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ノ規定ニ違反シタルトキハ自己ノ指揮ニ出サルノ故ヲ以テ處罰ヲ免ルルコトヲ得ス

第十九條 前二條ノ場合ニ於テハ禁錮又ハ拘留ノ刑ニ處スルコトヲ得ス

第二十條 明治三十三年法律第五十二號ノ規定ハ本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ニ依ル犯罪ニ

之ヲ準用ス

附則

第二十一條 本法ハ明治三十八年四月一日ヨリ八箇年間之ヲ施行ス但シ本法施行前ニ於テ獎勵金下付ノ許可ヲ受ケタル者ニ對シテハ其ノ許可期間内ハ仍從前ノ規程ヲ適用ス

第二十二條 總噸數二十噸未満ノ船舶ニ關シ本法ニ依リ獎勵金ヲ受ケ又ハ受ケムトスル場合ニ於テハ命令ノ定ムル所ニ依リ船舶検査法、船舶職員法、船舶法及船員法ノ規定ヲ準用スルコトヲ得

○ 朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル居留民團法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月七日

内閣總理大臣 伯耆 桂 太郎  
外務大臣 岩倉 小村 壽太郎

法律第四十一號 (宣稱 三月八日)

居留民團法

第一條 專管居留地、各國居留地、雜居地其ノ他ニ住居スル帝國臣民ノ狀態ニ依リ外務大臣ニ於テ必要ト認ムルトキハ地區ヲ定メ其ノ地區内ニ住居スル帝國臣民ヲ以テ組成スル居留民團ヲ設立スルコトヲ得

居留民團ノ廢置分合又ハ其ノ地區ノ變更ニ關スル事項ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第二條 居留民團ハ法人トシ官ノ監督ヲ受ケ法令又ハ條約ノ範圍内ニ於テ其ノ公共事務及法令條

約又ハ慣例ニ依リ之ニ屬スル事務ヲ處理ス

第三條 居留民團ニ定員及居留民會ヲ置ク

第四條 居留民會ノ組織、居留民團吏員又ハ居留民會職員ノ任免、選舉、任期、給與及職務權限等ニ關スル事項並居留民團ノ財產、負債、營造物、經費ノ賦課徵收及會計ニ關スル事項ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第五條 居留民團ハ領事、公使及外務大臣順次ニ之ヲ監督ス但シ土地ノ情況ニ依リ第二次ノ監督ヲ省略スルコトヲ得

前項監督ニ關シ必要ナル事項ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第六條 居留民團設立ノ際其ノ地區内ニ住居スル帝國臣民ノ共同財產及負債ノ處分其ノ他本法施行ニ關シ必要ナル事項ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

○ 朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル明治二十九年法律第六十三號ノ有効期間ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月七日

内閣總理大臣 伯耆 桂 太郎  
内務大臣 金子 爵 芳川 顯正

法律第四十二號 (宣稱 三月八日)

明治二十九年法律第六十三號ハ同法第六條ノ期限後ニ於テモ平和克復ノ翌年末日迄仍其ノ效力ヲ有ス

〔參照〕

法律第六十三號(明治二十九年三月三十一日官報)抄録  
第六條 本法ハ明治三十八年三月三十一日迄其ノ效力ヲ有ス

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル醫師免許規則中改正法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月七日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎  
内務大臣子爵芳川顯正

法律第四十三號(官報 三月八日)

醫師免許規則中左ノ通改正ス

第三條中官立及府縣立醫學校ヲ官立及公立ノ醫學校並文部大臣ノ指定シタル私立醫學專門學校ニ改ム

〔參照〕

第三十五號市會醫師免許規則(明治十六年十月二十三日)抄録

第三條 官立及府縣立醫學校ノ卒業證書ヲ得タル者其證書ヲ以テ開業免許ヲ得シコトヲ願出タルトキハ内務大臣ハ試験ヲ要セシメテ免許ヲ授與スルコトアルヘシ

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル市町村立小學校教育費國庫補助法及教育基金令ニ依ル沖繩縣ノ配賦金及配當金ノ仕拂殘額ヲ翌年度ニ繰越使用ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月七日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎  
大藏大臣男爵實楠荒助  
文部大臣 久保田讓

法律第四十四號(官報 三月八日)

市町村立小學校教育費國庫補助法及教育基金令ニ依ル沖繩縣ノ配賦金及配當金ハ毎年度ノ仕拂殘額ヲ順次翌年度ニ繰越使用スルコトヲ得

附則

本法ハ明治三十七年度分ヨリ之ヲ適用ス

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル鐵業法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月七日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎  
農商務大臣男爵清浦奎吾  
大藏大臣男爵曾根荒助

法律第四十五號(官報 三月八日)

鐵業法

第一章 總則

第一條 本法ニ於テ鑛業ト稱スルハ鑛物ノ試掘、採掘及之ニ附屬スル事業ヲ謂フ

第二條 本法ニ於テ鑛物ト稱スルハ金鑛、銀鑛、銅鑛、鉛鑛、銻鑛、安替丹尼鑛、水銀鑛、亞鉛鑛、鐵鑛、硫化鐵鑛、格魯模鐵鑛、滿佈鐵鑛、重石鑛、水鉛鑛、砒鑛、燐鐵鑛、黑鉛、石炭、亞炭、石油、土瀝青及硫黃ヲ謂フ但シ砂鑛ハ此ノ限ニ在ラス

第三條 未ダ掘採セザル鑛物(廢鑛及鑛滓ヲ含ム)ハ國ノ所有トス

第四條 本法ニ於テ鑛業權ト稱スルハ試掘權及採掘權ヲ謂フ

鑛業權者ハ鑛區ニ於テ其ノ許可ヲ受ケタル鑛物ヲ掘採シ及之ヲ取得スル權利ヲ有ス但シ鑛區ノ重複シタル場合ニ於テハ鑛業權者ハ互ニ其ノ權利ヲ制限セラル

第五條 帝國臣民又ハ帝國法律ニ從ヒ成立シタル法人ニ非サレハ鑛業權者トナルコトヲ得ス

第六條 本法ニ規定シタル鑛業權者ノ權利義務ハ鑛業權ト共ニ移轉ス

本法ニ規定ニ依リ爲シタル手續其ノ他ノ行爲ハ鑛業ヲ出願セムトスル者鑛業出願人、鑛業權者ト地所有者又ハ關係人ノ承諾人ニ對シテモ其ノ效力ヲ有ス

第七條 二人以上共同シテ鑛業ヲ爲シ又ハ之ヲ爲サムトスルトキハ内一人ヲ選定シテ代表者ト爲シ鑛山監督署長ニ届出ヘシ其ノ届出ナキトキハ鑛山監督署長之ヲ指定ス

代表者ハ國ニ對シ共同鑛業出願人又ハ共同鑛業權者ヲ代表ス

共同鑛業出願人又ハ共同鑛業權者ハ組合契約ヲ爲シタル者ト看做ス

第八條 本法ニ於テ鑛夫ト稱スルハ鑛業ニ從事スル勞役者ヲ謂フ

第九條 本法ニ於テ鑛區ト稱スルハ鑛業權ノ登録ヲ得タル土地ノ區域ヲ謂フ

鑛區ノ境界ハ直線ヲ以テ之ヲ定メ地表境界線ノ直下ヲ限トス其ノ面積ハ石炭ニ在リテハ五萬坪以上其ノ他ノ鑛物ニ在リテハ五千坪以上トシ共ニ百萬坪ヲ超スルコトヲ得ス但シ鑛利保護上又ハ鑛區分合上已ラ得サル場合ニハ百萬坪ヲ超スルコトヲ得

同一ノ鑛區ニ於テハ二以上ノ鑛業權ヲ設定スルコトヲ得ス但シ其ノ目的異種ノ鑛物ナルトキ及

第三十六條 場合ハ此ノ限ニ在ラス

第十條 宮城、離宮、神宮及皇陵ノ周圍ニ三百間以内並要地帶第一區内ノ場所ハ之ヲ鑛區ト爲スコトヲ得ス

陸海軍所轄ノ軍港、要港、火藥製造所、火藥庫及彈藥庫ノ周圍三百間以内並要地帶第二區及第三區内ノ場所ハ所轄官廳ノ許可ヲ受ケルニ非サレハ之ヲ鑛區ト爲スコトヲ得ス

前二項ニ掲ケタル場所ハ所轄官廳ノ許可ヲ受ケルニ非サレハ鑛業ノ爲之ヲ使用スルコトヲ得ス

第十一條 鐵道、軌道、道路、運河、河川、沼池、堤防、社寺境内地、墓地、公園地其ノ他ノ營造物及建物ノ地表地下トモ其ノ周圍三百間以内ノ場所ニ於テハ所轄官廳ノ許可、所有者及關係人ノ承諾ヲ受ケルニ非サレハ鑛業ヲ爲シ又ハ鑛業ノ爲之ヲ使用スルコトヲ得ス但シ所有者及關係人ハ正當ノ理由ヲ示シテ其ノ承諾ヲ拒ムコトヲ得ス

第十二條 鑛業出願地又ハ鑛區ノ訂正、増減及改正ノ出願ニ付テハ鑛業ノ出願ニ關スル規定ヲ準用ス

第十三條 本法ニ於テ鑛業稅ト稱スルハ鑛區稅及鑛產稅ヲ謂フ

第十四條 本法ハ第八章ノ規定ヲ除クノ外國ノ鑛業ニ之ヲ適用ス

第二章 鑛業權

第十五條 礦業權ハ物權トシテ不動産ニ關スル規定ヲ準用ス但シ民法第七十九條第一項ノ規定ハ此ノ限ニ在ラス

第十六條 礦業權ハ不可分トス

第十七條 礦業權ハ相續、讓渡、滯納處分及強制執行ノ目的タルノ外權利ノ目的タルコトヲ得ス但シ探掘權ハ抵當權ノ目的ト爲スコトヲ得

第十八條 試掘權ノ存続期間ハ登錄ノ日ヨリ二箇年トス

前項ノ期間ハ礦區ノ増減又ハ改正ノ爲變更セラルルコトナシ

第十九條 礦業權及抵當權ノ設定、變更、移轉、消滅或處分ノ制限ハ礦業原簿ニ登錄ス共同礦業權者ノ脱退ニ付テモ亦同シ但シ礦業權ノ處分ヲ制限セラレタルトキハ廢業ノ登錄ヲ爲スコトヲ得ス

前項ノ登錄ハ登記ニ代ルモノトス

登錄ニ關スル規程ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第二十條 前條第一項ニ掲ケタル事項ハ相續期限ノ到來ニ因ル礦業權ノ消滅或第四十二條及第四十三條ノ競賣ノ場合ヲ除クノ外登錄ヲ爲スニ非サレハ其ノ效力ヲ生ゼス

第二十一條 礦業ヲ爲サントスル者ハ願書ニ礦區圖ヲ添ヘ試掘ニ付テハ礦山監督署長、探掘ニ付テハ農商務大臣ニ出願スヘシ

第二十二條 礦業出願人ハ名義ノ變更ヲ爲スコトヲ得此ノ場合ニ於テハ試掘ニ付テハ礦山監督署長、探掘ニ付テハ農商務大臣ニ届出ヲ爲スニ非サレハ其ノ效力ヲ生ゼス

第二十三條 探掘出願人ハ出願地ニ其ノ探掘セムトスル礦物ノ存在スルコトヲ證明スヘシ

第二十四條 農商務大臣ニ於テ試掘出願地探掘ニ適スルモノト認メタルトキハ探掘ノ出願ヲ命ス

ハシ

前項ノ場合ニ於テ命令書到達ノ日ヨリ六十日以内ニ探掘ノ出願ヲ爲ササルトキハ試掘ノ出願ハ之ヲ許可セズ

第二十五條 探掘出願地ノ位置形狀、礦床ノ位置形狀ト相違シ礦利ヲ損スルモノト認メタル場合ニ之ヲ準用ス農商務大臣ハ其ノ訂正ノ出願ヲ命スヘシ

前項ノ場合ニ於テ命令書到達ノ日ヨリ六十日以内ニ訂正ノ出願ヲ爲ササルトキハ探掘ノ出願ハ之ヲ許可セズ

第二十六條 探掘出願地ノ位置形狀、礦床ノ位置形狀ト相違シ礦利ヲ損スルモノト認メタルトキハ探掘出願人ハ其ノ訂正ヲ出願スルコトヲ得

第二十七條 礦業出願人ハ出願地ノ増減ヲ出願スルコトヲ得

第二十八條 試掘出願地出願ノ當時礦區ト重複スル場合ニ於テ同種ノ礦物ナルトキハ其ノ重複スル部分ニ付テハ其ノ出願ヲ許可セズ

第二十九條 探掘出願地出願ノ當時他人ノ礦區ト重複スル場合ニ於テ同種ノ礦物ナルトキハ其ノ重複スル部分ニ付テハ其ノ出願ヲ許可セズ但シ第三十六條ノ場合ハ此ノ限ニ在ラス

第三十條 探掘出願地他人ノ試掘出願地ト重複スル場合ニ於テ同種ノ礦物ナルトキハ其ノ重複スル部分ニ付テハ第二十四條第一項及第二項ノ規定ヲ準用ス

第三十一條 礦業出願地他人ノ礦區ト重複スル場合ニ於テ異種ノ礦物ナルトキハ礦山監督署長ハ之ヲ礦業權者ニ通知スヘシ



鑛業權者ハ前項ノ通知書到達ノ日ヨリ六十日以内ニ自ラ其ノ鑛業ヲ出願スルコトヲ得

前二項ノ規定ハ第三十六條及豫メ鑛業權者ノ承諾ヲ得タル場合ニハ之ヲ適用セス

第一項ノ出願他人ノ鑛業ニ妨害アリト認メタルトキハ之ヲ許可セス

第三十二條 公益ヲ害スルモノト認メタルトキ又ハ鑛業ノ價值ナシト認メタルトキハ鑛業ノ出願ヲ許可セス

第三十三條 試掘出願地又ハ探掘出願地重複スルトキハ其ノ重複スル部分ニ付テハ願書發送ノ日時ノ先ナル者優先權ヲ有ス願書發送ノ日時同一ナルトキハ鑛山監督署長ハ之ヲ各出願人ニ通知スヘシ此ノ場合ニ於テハ出願人ハ其ノ通知書發送ノ日ヨリ六十日以内ニ協議ヲ關ヘ之ヲ届出ヘ

出願人前項ノ届出ヲ爲ササルトキハ抽籤ニ依リ優先權者ヲ定ム

前二項ノ規定ハ第二十五條第二十六條第三十一條第三十二條第三十六條ノ場合ニハ之ヲ適用セ

試掘出願地探掘出願地ト重複スル場合ニ於テ願書發送ノ日時同一ナルトキハ其ノ重複スル部分ニ付テハ探掘出願人ハ優先權ヲ有ス

第三十四條 試掘出願人同種ノ鑛物ニ付更ニ探掘ノ出願ヲ爲シタル場合ニ於テ出願地重複スルトキハ其ノ重複スル部分ニ付テハ探掘ノ出願ハ試掘願書發送ノ日時ニ於テ試掘ノ出願ニ代リタルモノト看做ス但シ前條第四項ノ場合ハ此ノ限ニ在ラス

前項本文ノ規定ハ探掘出願人同種ノ鑛物ニ付更ニ試掘ノ出願ヲ爲シタル場合ニ之ヲ準用ス  
前三項ノ規定ハ第二十四條及第二十五條ノ場合ニ於ケル期限經過後ノ出願ニ之ヲ適用セス

第三十五條 探掘權者ハ鑛區ハ合併又ハ分割ヲ農商務大臣ニ出願スルコトヲ得鑛區ノ一部ヲ分割シテ之ヲ他ノ鑛區ニ合併セシムトスルトキハ亦同シ

抵當權ノ設定アル場合ニ於テ前項ノ出願ヲ爲サルトスルトキハ抵當權者ノ承諾及抵當權ノ順位ニ關スル協定ヲ經ヘシ

第三十六條 鑛床ノ位置形狀ニ依リ鄰接スル他人ノ鑛區ニ掘進スルノ必要アルトキハ鄰接鑛業權者ノ承諾ヲ經テ鑛區ノ訂正ヲ出願スルコトヲ得但シ鄰接鑛業權者ハ正當ノ理由ナクシテ其ノ承諾ヲ拒シコトヲ得ス

第三十七條 第二十五條第一項第二十六條第二十七條及第三十三條第三項ノ規定ハ之ヲ鑛區ニ準用ス

第三十八條 第二十五條第一項ニ該當スル場合ニ於テ命令書到達ノ日ヨリ六十日以内ニ出願ヲ爲ササルトキハ農商務大臣ハ探掘權ヲ取消スヘシ

第三十九條 鑛業公益ヲ害スルモノト認メタルトキハ農商務大臣ハ鑛業權ヲ取消スヘシ  
抵當權ノ設定アル場合ニ於テ鑛區ノ減少ヲ出願セムトスルトキハ豫メ抵當權者ノ承諾ヲ經ヘシ

第四十條 鑛業權者正當ノ理由ナクシテ登錄ノ日ヨリ二箇年以内ニ鑛業ニ著手セズ若ハ一箇年

以上休業シタルトキ又ハ施業案ニ依ラズシテ探掘ヲ爲シタルトキハ農商務大臣ハ鑛業權ヲ取消

スコトヲ得

第四十一條 鑛業權者第七十二條ノ命令ニ從ハサルトキ又ハ鑛業稅ヲ納メサルトキハ農商務大臣ハ鑛業權ヲ取消スコトヲ得

第四十二條 採掘權取消ノ登錄アリタルトキハ鑛山監督署長ハ直ニ之ヲ抵當權者ニ通知スヘシ  
抵當權者ハ前項ノ通知ヲ受ケタル日ヨリ三十日以内ニ採掘權ノ競賣ヲ請求スルコトヲ得但シ第三十八條第一項及第三十九條ノ規定ニ依ル採掘權取消ノ場合ハ此ノ限ニ在ラス  
採掘權ハ前項ノ期間内又ハ競賣ノ手續完結ノ日迄競賣ノ目的ノ範圍内ニ於テ仍存續スルモノト看做ス

競賣ニ依ル賣得金ハ競賣ノ費用及抵當權者ニ對スル債務ノ辨濟ニ充テ其ノ殘金ハ國庫ニ歸屬ス  
競買人ハ採掘權取消ノ登錄アリタル時ニ於テ採掘權ヲ競受ケタルモノト看做ス

第四十三條 前條ノ規定ハ採掘權者廢業シタル場合ニ之ヲ準用ス

第四十四條 採掘權者ハ命令ノ定ムル所ニ從ヒ施業案ヲ鑛山監督署長ニ差出スヘシ其ノ之ヲ變更シタルトキ亦同シ

採掘權者ハ施業案ニ依ルニ非サレハ採掘ヲ爲スコトヲ得ス

第四十五條 鑛山監督署長ハ理由ヲ示シテ施業案ノ變更ヲ命スルコトヲ得

前項ニ依リ變更シタル施業案ハ鑛山監督署長ノ許可ヲ受クルニ非サレハ之ヲ變更スルコトヲ得ス

第四十六條 採掘權者ハ命令ノ定ムル所ニ從ヒ坑内實測圖及鑛業簿ヲ鑛業事務所ニ備置キ且其ノ原本ヲ鑛山監督署長ニ差出スヘシ

第四十七條 鑛業權者ハ命令ノ定ムル所ニ從ヒ鑛業ニ關スル明細表ヲ鑛山監督署長ニ差出スヘシ  
第四十八條 試掘ニ依リテ得タル鑛產物ハ鑛山監督署長ノ許可ヲ受クルニ非サレハ之ヲ處分スルコトヲ得ス

第四十九條 鄰接鑛業權者其ノ他ノ利害關係人ハ他人ノ鑛區ニ付鑛山監督署長ニ其ノ實地調査ヲ出願スルコトヲ得

出願人ハ前項ノ調査ニ要スル人夫及物品ヲ供スヘシ

第三章 土地使用

第五十條 本章ニ於テ關係人ト稱スルハ第五十二條乃至第五十四條及第五十六條ノ通知前使用又ハ收用スヘキ土地ニ關シテ權利ヲ有スル者及其ノ通知後ニ於テ通知前ヨリ既存セル權利ヲ承繼シタル者ヲ謂フ

第五十一條 本章ニ於テ補償金ト稱スルハ對價、使用料其ノ他土地所有者及關係人ノ通常受クヘキ損失ニ對スル補償金ヲ總稱ス

第五十二條 鑛業ノ出願又ハ鑛業ノ爲必要アルトキハ鑛業ヲ出願セムトスル者、鑛業出願人又ハ鑛業權者ハ鑛山監督署長ノ許可ヲ得テ他人ノ土地ニ立入り測量又ハ検査ヲ爲スコトヲ得

前項ノ許可ヲ得タル者他人ノ土地ニ立入ラムトスルトキハ豫メ土地占有者ニ通知スヘシ

第五十三條 前條ノ規定ニ依ル測量又ハ検査ノ爲必要アルトキハ鑛山監督署長ノ許可ヲ得テ障礙物ヲ除却スルコトヲ得

前項ノ許可ヲ得タル者障礙物ヲ除却セムトスルトキハ豫メ其ノ所有者及占有者ニ通知スヘシ

第五十四條 鑛業上急迫ノ危險ヲ防ク爲必要アルトキハ鑛業權者ハ鑛山監督署長ノ許可ヲ得テ直

ニ他人ノ土地ニ立入り又ハ之ヲ使用スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ礦業權者ハ運搬ナク之ヲ土地占有者ニ通知スヘシ

第五十五條 前三條ニ依リ所有者及關係人ノ受ケタル損失ニ對シテハ其ノ請求ニ因リ補償金ヲ拂渡スヘシ

第五十六條 礦業權者ハ左ニ掲グル目的ノ爲必要アルトキハ他人ノ土地ヲ使用スルコトヲ得

- 一 錐鑛孔又ハ坑口ノ開鑿
- 二 鑛物土石燐礦藥用材薪炭鑛滓又ハ灰燼ノ置場ノ設置
- 三 選鑛場又ハ製鑛場ノ建設
- 四 鐵道軌道道路運河溝渠管樋池井索道又ハ電線ノ開設
- 五 其ノ他礦業上必要ナル工事又ハ工作物ノ施設

前項ノ規定ニ依リ礦業權者他人ノ土地ヲ使用セムトスルトキハ鑛山監督署長ノ許可ヲ受クヘシ

鑛山監督署長前項ノ許可ヲ與ヘタルトキハ之ヲ土地所有者及關係人ニ通知スヘシ

第五十七條 土地ノ使用又ハ收用スルコトキハ土地ノ形質ヲ變更スルトキハ所有者ハ其ノ收用ヲ請求スルコトヲ得

第五十八條 土地ノ一部ヲ收用スルニ因リテ殘地ヲ從來用非タル目的ニ供スルコト能ハサルトキハ土地所有者ハ其ノ全部ノ收用ヲ請求スルコトヲ得

第五十九條 土地ヲ使用又ハ收用スルトキハ土地所有者及關係人ニ補償金ヲ拂渡スヘシ

第六十條 土地ノ一部ヲ使用又ハ收用スルニ因リテ殘地ノ價格ヲ減シ其ノ他殘地ニ關シテ損失ヲ生ズヘキトキハ其ノ補償金ヲ拂渡スヘシ

第六十一條 土地ヲ使用又ハ收用スルニ因リテ道路、溝渠、柵柵其ノ他ノ工作物ノ新築、改築、増築又ハ修繕ヲ爲スノ必要ヲ生ズルトキハ其ノ補償金ヲ拂渡スヘシ

第六十二條 第五十六條ノ通知ノ後土地ノ形質ヲ變更シ工作物ノ新築、改築、増築若ハ大修繕ヲ爲シ又ハ物件ヲ附加増設セムトスルトキハ土地所有者又ハ關係人ハ鑛山監督署長ノ許可ヲ受クヘシ許可ヲ受ケスレテ之ヲ爲シタル者ハ之ニ關スル補償金ヲ請求スルコトヲ得

第六十三條 第五十六條ノ通知ノ後事業ヲ廢止又ハ變更シタルニ因リテ土地所有者又ハ關係人ノ受ケタル損失ニ對シテ礦業權者ハ其ノ補償金ヲ拂渡スヘシ

第六十四條 土地所有者及關係人ハ礦業權者ヲシテ補償金ニ付相當ノ擔保ヲ供セシムルコトヲ得

第六十五條 土地ノ使用又ハ收用ノ協議調ヒ裁決確定シ又ハ判決アリタルトキハ補償金又ハ擔保ノ裁決確定セサルトキト雖礦業權者ハ其ノ裁決ニ依ル補償金ヲ供託シ又ハ擔保ヲ供シテ土地ヲ使用又ハ收用スルコトヲ得

第六十六條 礦業權者補償金ノ拂渡若ハ供託ヲ爲サス又ハ擔保ヲ供セサルトキハ土地所有者及關係人ハ土地ヲ用ウルコトヲ拒ムコトヲ得

第六十七條 土地ヲ收用スルトキハ收用ノ時期ニ於テ所有權ハ礦業權者之ヲ取得シ其ノ他ノ權利ハ消滅ス

土地ヲ使用スルトキハ其ノ權利ハ使用ノ時期ニ於テ礦業權者之ヲ取得シ其ノ他ノ權利ハ使用ノ

期間其ノ行使ヲ停止セラル但シ使用ヲ妨ケサルモノハ此ノ限ニ在ラス  
第六十八條 土地ノ使用ヲ終リタルトキハ鑛業權者ハ土地ヲ原狀ニ復シ又ハ原狀ニ復セサルニ因  
リテ生スル損失ニ對シ補償金ヲ拂渡シテ之ヲ返還スヘシ

第六十九條 先取特權、質權又ハ抵當權ハ其ノ目的物ノ使用又ハ收用ニ因リテ債務者ノ受クヘキ  
補償金ニ對シテモ之ヲ行フコトヲ得但シ其ノ拂渡前ニ差押ヲ爲スヘシ  
第七十條 土地ノ使用及收用ニ關スル規定ハ水ノ使用ニ關スル權利ニ之ヲ準用ス

第四章 鑛業警察

第七十一條 鑛業ニ關スル左ノ警察事務ハ命令ノ定ムル所ニ依リ農商務大臣及鑛山監督署長之ヲ  
行フ  
一 建設物及工作物ノ保安  
二 生命及衛生ノ保護  
三 危害ノ豫防其ノ他公益ノ保護

第七十二條 鑛業上危險ノ虞アリ又ハ公益ヲ害スルノ虞アリト認メタルトキハ農商務大臣ハ鑛業  
權者ニ其ノ豫防又ハ鑛業ノ停止ヲ命スヘシ  
急迫ノ危險ヲ防ク爲必要アルトキハ鑛山監督署長ハ前項ノ處分ヲ爲スコトヲ得

第七十三條 農商務大臣ハ採掘權者ニ技術ニ關スル管理者ノ選任又ハ改任ヲ命スルコトヲ得  
管理者ノ資格及職務ニ關スル規程ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第七十四條 鑛業權消滅シタル後ト雖一箇年間ハ農商務大臣及鑛山監督署長ハ第七十二條ノ規定  
ニ準リ其ノ鑛業權ヲ有セシ者ニ對シテ危害豫防ニ關スル設備ヲ爲スヘキコトヲ命スルコトヲ得

前項ノ命令ヲ受ケタル者ハ危害豫防ノ目的ノ範圍内ニ於テ鑛業權者ト看做ス

第五章 鑛夫

第七十五條 採掘權者ハ鑛夫ノ雇傭及勞役ニ關スル規則ヲ定メ鑛山監督署長ノ許可ヲ受クヘシ  
第七十六條 鑛業權者ハ命令ノ定ムル所ニ從ヒ鑛夫名簿ヲ鑛業事務所ニ備置クヘシ

第七十七條 鑛業權者鑛夫ヲ解雇シタル場合ニ於テハ其ノ請求ニ因リ雇傭ノ期間、業務ノ種類、技  
能、賃金及解雇ノ事由ヲ記載シタル證明書ヲ與フヘシ

第七十八條 鑛業權者ハ毎月一回以上期日ヲ定メ通貨ヲ以テ鑛夫ニ其ノ賃金ヲ支拂フヘシ  
第七十九條 農商務大臣ハ命令ヲ以テ鑛夫ノ年齢及就業時間並婦女、幼者ノ勞役ノ種類ヲ制限ス  
ルコトヲ得

第八十條 鑛夫自己ノ重大ナル過失ニ因ラスレテ業務上負傷シ疾病ニ罹リ又ハ死亡シタルトキ  
ハ鑛業權者ハ命令ノ定ムル所ニ從ヒ鑛夫又ハ其ノ遺族ヲ扶助スヘシ

第六章 鑛業稅

第八十一條 鑛業權者ニハ鑛業稅ヲ課ス  
金鑛、銀鑛、鉛鑛及鐵鑛ニ付テハ鑛產稅ヲ課セス

第八十二條 鑛業權者ニハ其ノ鑛業ニ付營業稅ヲ課セス  
第八十三條 鑛區稅ハ鑛區一千坪毎ニ毎年試掘ニ付テハ十錢、採掘ニ付テハ四十錢トス但シ一千  
坪未滿ハ之ヲ一千坪ト看做ス

第八十四條 鑛區稅ハ毎年十二月中ニ翌年分ヲ前納スヘシ  
第三十五條第二項ニ依ルモノヲ除クノ外鑛業權ノ設定若ハ變更ノ登録ニ依リ新ニ負擔シ又ハ不

足セル鐵區稅ニシテ其ノ登錄ノ年ニ係ルモノハ之ヲ即納スヘシ

前項ニ依リ納付スヘキ鐵區稅ハ月割ヲ以テ之ヲ計算ス鐵業權ノ存續期間満了ノ年ニ係ルモノ亦同シ

第八十五條 鐵產稅ハ鐵產物ノ價格ノ百分ノ一トス

鐵產物ノ價格ハ主要ナル市場ノ平均相場ヲ標準トシ農商務大臣之ヲ告示ス其ノ告示セサルモノハ之ヲ檢定ス

第八十六條 鐵產稅ハ毎年三月中ニ前年分ヲ納付スヘシ但シ鐵業權消滅ノ場合ニ於テハ即納スヘシ

第八十七條 共同鐵業權者ノ納稅義務ハ連帶トス

第八十八條 北海道府縣及市町村ハ鐵業稅ニ對シ各本稅百分ノ十以內ノ附加稅ヲ課スルコトヲ得前項ノ附加稅ノ外北海道府縣及市町村ハ鐵業稅ニ對シ又ハ鐵夫鐵產物鐵區若ハ直接鐵業用ノ工作物器具機械ヲ標準トシテ課稅スルコトヲ得ス

前二項ノ規定ハ北海道及沖繩縣ノ區並間切島其ノ他町村ニ準スヘキモノニ之ヲ準用ス

第七章 訴願、訴訟及裁決

第八十九條 鐵業ニ關スル出願ノ許可又ハ拒否ニ不服アル者ハ訴願ヲ提起スルコトヲ得違法ニ權利ヲ侵害セラレタルトキハ行政訴訟ヲ提起スルコトヲ得

第九十條 第十一條又ハ第三十六條ノ承諾ヲ拒マレタル者及其ノ承諾ヲ得ルコト能ハサル者ハ鐵山監督署長ノ裁決ヲ申請スルコトヲ得

前項ノ裁決ニ不服アル者ハ訴願ヲ提起スルコトヲ得違法ニ權利ヲ侵害セラレタルトキハ行政訴訟ヲ提起スルコトヲ得

第九十一條 鐵業權ノ取消ニ不服アル者ハ訴願ヲ提起スルコトヲ得違法ニ權利ヲ侵害セラレタルトキハ行政訴訟ヲ提起スルコトヲ得

第九十二條 土地ノ使用若ハ收用、補償金又ハ擔保ニ付協議關ハサルトキ又ハ協議ヲ爲スコト能ハサルトキハ鐵業權者ハ鐵山監督署長ノ裁決ヲ申請スルコトヲ得

前項ノ裁決中土地ノ使用又ハ收用ニ付不服アル者ハ訴願ヲ提起スルコトヲ得違法ニ權利ヲ侵害セラレタルトキハ行政訴訟ヲ提起スルコトヲ得

第九十三條 處分又ハ裁決ノ通告書ヲ受ケタル日ヨリ三十日ヲ經過シタルトキハ訴願又ハ訴訟ヲ提起スルコトヲ得

前項ノ期間ハ處分又ハ裁決ノ通告書ヲ受ケサル者ニ付テハ其ノ公示ノ日ヨリ之ヲ起算ス

第八章 罰則

第九十四條 鐵業權ヲ有セスレテ鐵物ヲ掘採シタル者又ハ詐偽ノ所爲ヲ以テ鐵業權ヲ得タル者ハ二年以下ノ重禁錮又ハ千圓以下ノ罰金ニ處ス

過失ニ因リ鐵區外ニ掘採シタル者ハ五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第九十五條 前條ノ場合ニ於テハ其ノ掘採シタル鐵物ヲ沒收ス既ニ之ヲ讓渡シ又ハ消費シタルトキハ其ノ代金ヲ追徵ス

第九十六條 第十條第三項若ハ第十一條ノ規定ニ違背シタル者又ハ第七十二條若ハ第七十四條第一項ノ命令ニ從ハサル者ハ二百圓以下ノ罰金ニ處ス

第九十七條 第四十四條若ハ第四十五條第二項ノ規定ニ違背シタル者、第四十五條第一項若ハ第

七十三條第一項ノ命令ニ従ハサル者又ハ第七十九條若ハ第八十條ニ基キテ發スル命令ノ規定ニ違背シタル者ハ百五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第九十八條 第四十六條乃至第四十八條、第七十六條又ハ第七十八條ノ規定ニ違背シタル者ハ百圓以下ノ罰金ニ處ス

第九十九條 第五十三條第一項ノ許可ヲ受ケスシテ障礙物ヲ除却シタル者又ハ第七十五條ノ規定ニ違背シタル者ハ五十圓以下ノ罰金ニ處ス

當該官吏ニ對シテ鑛業ニ關スル書類若ハ物件ノ検査ヲ拒ミ又ハ之ヲ妨ケタル者ハ罰前項ニ同シ但シ其ノ刑法ニ正條アルモノハ刑法ニ依ル

第一百條 第七十七條ノ規定ニ違背シタル者ハ二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第一百一條 詐偽其ノ他不正ノ所爲ヲ以テ鑛業稅ヲ免レ又ハ免レムトシタル者ハ其ノ脫稅金額三倍ニ相當スル罰金ニ處ス

第一百二條 本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ノ規定ニ違背シタル者ニハ刑法ノ減輕、再犯加重及赦罪俱發ノ例ヲ用非ス

第一百三條 鑛業權者カ未成年者又ハ禁治產者ナルトキハ本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ノ規定ニ依リ鑛業權者ニ適用スヘキ罰則ハ之ヲ法定代理人ニ適用ス但シ鑛業ニ關シ成年者ト同一ノ能力ヲ有スル未成年者ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

第一百四條 鑛業權者ハ其ノ代理人、戶主、家族、同居者、雇人其ノ他ノ從業者ニシテ其ノ業務ニ關シ本法ヲ犯シタルトキハ自己ノ指揮ニ出テサルノ故ヲ以テ本法ノ處罰ヲ免ルルコトヲ得ス

本法ニ基キテ發スル命令中別段ノ規定アル場合ヲ除クノ外其ノ命令ニ規定セル罰則ニ付テモ亦

同シ

第一百五條 前二條ノ場合ニ於テハ禁錮又ハ拘留ノ刑ニ處スルコトヲ得ス

第一百六條 明治三十三年法律第五十二號ノ規定ハ本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ニ依ル犯罪ニ之ヲ準用ス

附則

第一百七條 本法ハ明治三十八年七月一日ヨリ之ヲ施行ス

鑛業條例ハ之ヲ廢止ス

第一百八條 鑛業條例ニ依ル試掘ノ認可ハ試掘權ノ登録ト看做ス

第一百九條 日本坑法ニ依ル借區ノ許可及鑛業條例ニ依ル探掘ノ特許ハ探掘權ノ登録ト看做ス但シ鑛業條例第四十一條第二項ニ定メタル面積ニ滿タサル鑛區ニ對スルモノハ其ノ期限ノ到來ニ因

リテ消滅ス

第一百十條 本法施行前ニ於ケル官廳所屬ノ探掘區域ハ探掘鑛區トシ本法施行ノ日ニ於テ探掘權ノ登録ヲ得タルモノト看做ス

第一百十一條 鑛業條例ニ依ル探掘權ノ書入ノ登録ハ抵當權ノ登録ト看做ス

第一百十二條 第七十四條ノ規定ハ本法施行前ニ試掘認可又ハ探掘特許ノ消滅シタル場合ニモ之ヲ適用ス但シ一箇年ノ期間ハ其ノ消滅ノ日ヨリ之ヲ起算ス

第一百十三條 日本坑法ニ依リ借區ノ許可ヲ得タル者及鑛業條例ニ依リ試掘ノ認可又ハ探掘ノ特許ヲ得タル者ハ本法施行ノ日ヨリ六十日以内ニ明治三十八年分ノ鑛區稅又ハ其ノ不足額ヲ納付スヘシ其ノ鑛區稅ハ月割ヲ以テ計算ス

第百十四條 明治三十八年分ノ鐵產稅ハ本法施行前ニ得タル鐵產物ニ付テモ之ヲ課ス  
 第百十五條 第八十八條ノ規定ハ明治三十八年度分ノ稅ニ限リ之ヲ適用セズ  
 第百十六條 鐵業條例ニ依リテ爲シタル處分、手續其ノ他ノ行爲ハ本法中之ニ相當スル規定アル  
 場合ニ於テハ本法ニ依リテ之ヲ爲シタルモノト看做ス  
 第百十七條 本法施行前ニ爲シタル處分ニ對スル訴訟、裁定請求、行政訴訟又ハ民事訴訟ニ關シテ  
 ハ鐵業條例ノ規定ニ依ル  
 第百十八條 鐵業條例ニ依リ試掘又ハ探掘ヲ出願シタル鐵區ノ面積ニ付テハ鐵業條例第四十一條  
 第二項ノ規定ヲ適用ス  
 第百十九條 明治三十七年十二月三十一日以前ヨリ引續キ重石鐵又ハ水鉛鐵ヲ掘採スル者ニシテ  
 明治三十八年七月三十一日迄ニ其ノ掘採者ノ特許ヲ出願スルトキハ其ノ掘採區域ニ限リ第三  
 十一條第三十三條及鐵區ノ面積ニ關スル第九條ノ規定ニ拘ラヌ特許ヲ與フヘシ  
 前項ノ掘採者ニシテ明治三十八年七月三十一日迄ニ其ノ特許ヲ出願シタル者ハ其ノ指令ノ日迄  
 本法ノ規定ニ拘ラヌ其ノ掘採ヲ繼續スルコトヲ得  
 第二十項ノ規定ニ依リ特許ヲ得タル區域ノ面積五千坪未滿ナル場合ニ於テハ其ノ特許ハ五箇年ヲ  
 經過シタルトキ消滅ス

朕帝國議會ノ協贊ヲ經テ爾國稅徵收法中改正法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月九日

内閣總理大臣 伯爵 桂 太郎  
 大藏大臣 伯爵 曾根 龍助

法律第四十六號 (宣稱 三月十日)

國稅徵收法中左ノ通改正ス

第四條ノ八中「書類」ノ受取ヲ拒ミタルトキ「下」又ハ帝國內ニ住所、居所アラサルトキ」ヲ加フ

第二十二條ニ左ノ一項ヲ加フ

差押物件ノ保管證ニ關シテハ印紙稅ヲ納ムルコトヲ要セス

第二十三條ノ二 債權及所有權以外ノ財產權ノ差押ヲ爲ストキハ收稅官吏ハ之ヲ其ノ權利者ニ通  
 知スヘシ

前項ノ財產權ニシテ其ノ移轉ニ付登記又ハ登録ヲ要スルモノニ在リテハ差押ノ登記又ハ登録ヲ  
 關係官廳ニ囑託スヘシ其ノ抹消又ハ變更ニ付テモ亦同シ

第二十三條ノ三 不動産又ハ船舶ヲ差押ヘタルトキハ收稅官吏ハ差押ノ登記ヲ所轄登記所ニ囑託  
 スヘシ其ノ抹消又ハ變更ノ登記ニ付テモ亦同シ

差押ノ爲不動産ヲ分割又ハ區分シタルトキハ收稅官吏ハ分割又ハ區分ノ登記ヲ所轄登記所ニ囑  
 託スヘシ其ノ合併又ハ變更ノ登記ニ付テモ亦同シ

第二十三條ノ四 差押ノ解除ニ關シテハ登録稅ヲ納ムルコトヲ要セス

第二十四條ニ左ノ一項ヲ加フ  
 債權及所有權以外ノ財產權ニ付テハ前二項ノ規定ヲ準用ス

〔參照〕

法律第三十一號國稅徵收法(明治三十年三月二十九日官報抄録)

第四條ノ八、登記ノ送達ヲ受クヘキ者其ノ住所又ハ居所ニ於テ登記ノ受取ヲ拒ミタルトキ若ハ其ノ住所、居所共ニ不明ナルトキハ登記ノ受取ヲ公署ノ初日ヨリ七日ヲ経過シタルトキハ將領ノ送達アリタルモノト看做ス。

第二十三條ノ二、不動産又ハ船舶ヲ差押ヘタルトキハ收税官吏ハ差押ノ登記ヲ所轄登記所ニ囑託スヘシ其ノ抹消又ハ變更ノ登記ニ付テモ亦同シ。

差押ノ爲不動産ヲ分割シタルトキハ收税官吏ハ分割ノ登記ヲ所轄登記所ニ囑託スヘシ其ノ抹消又ハ變更ノ登記ニ付テモ亦同シ。

第二十四條、差押ヘタル動産、有價證券、不動産及第二十三條ノ一ニ依リ收税官吏カ第三債務者ヨリ給付ヲ受ケタル物件ハ通貨ヲ除クノ外公賣ニ付ス公賣ノ手續ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム。

公賣ニ付スルモ賣受人ナキカ又ハ其ノ價格見積價格ニ達セサルトキハ其ノ見積價格ヲ以テ政府ニ買上クルコトヲ得。

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル外國ニ於ケル銀行事業ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム。

御名 御璽

明治三十八年三月九日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎  
大藏大臣伯爵會 福荒助  
外務大臣伯爵小村壽太郎

法律第四十七號 (官報 三月十日)

外國ニ於テ銀行業ヲ營ムモノニ付テハ勅令ヲ以テ特別ノ規程ヲ設ケ之ニ準據セシムルコトヲ得。

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル日本勸業銀行法中改正法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム。

御名 御璽

明治三十八年三月九日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎  
大藏大臣伯爵會 福荒助

法律第四十八號 (官報 三月十日)

日本勸業銀行法中左ノ通改正ス。

第二十一條ニ左ノ一項ヲ加フ。

前項ノ據置年限ハ相手方ノ希望ニ因リ之ヲ定メサルコトヲ得。

第二十八條第一項中「之ヲ拂込マサルトキ」ノ下ニ「又ハ期限内ノ償還要求ニ對シ其ノ拂込ヲ爲ササルトキ」ヲ加フ。

第三十一條ノ二、日本勸業銀行ハ其ノ業務ニ附帶シテ委託金ヲ受領シ又ハ地金銀若ハ有價證券ノ保護預リヲ爲スコトヲ得。

第三十二條第一項中「營業上餘裕金」ヲ「前條ノ委託金又ハ營業上ノ餘裕金」ニ改メ第二項中「前項ニ依ルノ外」ノ下ニ「前條ノ委託金又ハ」ヲ加フ。

第三十六條ノ二、日本勸業銀行ハ第二十三條ニ依リ期限前ノ償還ヲ受ケタル場合ニ於テハ大藏大臣ノ認可ヲ受ケ其ノ金額ヲ限度トシ勸業債券ノ買入消却ヲ爲スコトヲ得。

〔參照〕

法律第八十二號日本勸業銀行法明治二十九年四月二十日官報抄録

第三十一條、貸付金ノ年賦償還ニ付キテハ二箇年以上五箇年以内ニ於テ据置年限ヲ定ムヘシ其ノ年限間ノ利子ハ此ノ限ニ在ラス。

第二十八條、無擔當ニテ借入ヲ爲シタル府縣郡市町村其ノ他法律ヲ以テ組織セル公共團體ニ於テ年賦金、定期償還金又ハ利子ノ拂込期日ヲ過キ之ヲ拂込マサルトキハ日本勸業銀行ハ監督官廳ニ其ノ處分ヲ請求スルコトヲ得。



第三十二條 日本勸業銀行ハ營業上餘裕金アルトキハ一時各種ノ國債證券地方債證券ヲ買入レ又ハ大藏大臣ノ認可ヲ受ケ  
買取ケル銀行ニ預ケ金ヲ爲スコトヲ得  
日本勸業銀行ハ前項ニ依ルノ外營業上ノ餘裕金ヲ使用スルコトヲ得ス

御名 御璽

朕帝國議會ノ協贊ヲ經メ日本勸業銀行法中改正法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治三十八年三月九日

内閣總理大臣 伯耆 桂 太郎  
大藏大臣 男爵 曾根 克助

法律第四十九號 (官報 三月十日)

日本勸業銀行法中左ノ通改正ス

第八條ニ左ノ但書ヲ加フ

但レ主務大臣ノ認可ヲ受ケタルトキハ此ノ限ニ在ラス

第九條第四號中「地方債證券、社債券及株券ニ關スル」ヲ削リ左ノ二號ヲ加フ

第五 手形ノ割引

第六 法律ノ規定ニ依リ設定シタル財團ヲ抵押トスル貸付

同條ニ左ノ一項ヲ加フ

前項第五號ノ手形ハ割引依頼人ヨリ國債證券、地方債證券、社債券又ハ株券ヲ擔保ニ提供スルモ

ノニ限ル

第十一條ニ左ノ但書ヲ加フ

但シ主務大臣ノ認可ヲ受ケ外國ニ於テ營業銀行業務及其ノ附帶業務ニ付テハ此ノ限ニ在ラス  
第十二條 日本勸業銀行ハ排込資本金額ノ十倍ヲ限リ債券ヲ發行スルコトヲ得但シ其ノ貸付金現  
在商割引手形現在商及其ノ所有ニ係ル國債證券、地方債證券、社債券現在商ヲ超過スルコトヲ  
得ス  
第十三條ノ次ニ左ノ一條ヲ加フ

第十二條ノ二 日本勸業銀行ハ外國ニ於ケル公益事業ニ對シ資金ノ需要アル場合ニ限リ主務大

臣ノ認可ヲ受ケタルトキハ本法第十二條、第十五條及商法第二百條ノ規定ニ依ラスレテ債券

ヲ發行スルコトヲ得

前項公益事業ノ種類ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第十四條中但書ヲ削ル

第十四條ノ次ニ左ノ一條ヲ加フ

第十四條ノ二 日本勸業銀行ニ於テ債券ヲ發行スル場合ニハ商法第百九十九條ノ規定ヲ適用セ

ス

〔參照〕

法律第七十號 日本勸業銀行法(明治三十三年三月二十三日官報)抄録

第八條 總裁及理事ハ何等ノ名稱ニ拘ラス他ノ職務又ハ商業ニ從事スルコトヲ得ス

第九條 日本勸業銀行ハ左ノ業務ヲ營ムコトヲ得

第四 地方債證券、社債券及株券ニ關スル信託ノ業務

第十一條 日本勸業銀行ハ本法ニ關シテ營業上ノ餘裕金ヲ使用スルコトヲ得但シ其ノ貸付金現在商及其ノ所有ニ係ル地  
方債證券及社債券現在商ヲ超過スルコトヲ得ス

第十四條 日本興業銀行ニ於テ債券ヲ發行セムトスルトキハ主務大臣ノ認可ヲ受クヘシ但シ外國ニ於ケル債券發行ノ規定ハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ定ム

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル北海道拓殖銀行法中改正法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月九日

内閣總理大臣 伯爵 桂 太郎  
大藏大臣 伯爵 曾根 荒助

法律第五十號 (官報 三月十日)

北海道拓殖銀行法中左ノ通改正ス

第六條ニ左ノ但書ヲ加フ

但シ營利ヲ目的トセサル職務ニシテ主務大臣ノ認可ヲ受ケタルトキハ此ノ限ニ在ラス

第七條第一項第四號ヲ左ノ如ク改ム

四 爲替、荷爲替及北海道ノ產物ヲ擔保トスル貸付

同條第一項第五號ノ次ニ左ノ一號ヲ加フ

六 手形ノ割引

同條第二項ヲ左ノ如ク改ム

拓殖銀行ハ前項第四號ニ依ルノ外仍北海道ノ產物ノ貯藏ヲ主タル目的トスル倉庫内ニ貯藏スル產業上必要ノ貨物ヲ擔保トシテ貸付ヲ爲スコトヲ得

第一項第六號ノ手形ハ割引依頼人ヨリ北海道ノ產物又ハ北海道ノ拓殖ヲ目的トスル株式會社ノ株券、債券ヲ擔保ニ供スルモノニ限ル

第二項第三號、第四號、第六號及第二項ノ事業ニ使用スヘキ金額ハ第一項第一號及第二號ニ依ル貸付金額額ノ二分ノ一ヲ超過スルコトヲ得ス

第八條ニ左ノ二項ヲ加フ

二十人以上ノ農業者又ハ工業者申合セ連帶責任ヲ以テ借用ヲ申出テタルトキハ其ノ信用ノ確實ナルモノニ限リ五箇年以内ニ於テ定期償還ノ方法ニ依リ無抵當貸付ヲ爲スコトヲ得

產業組合法ニ依リ設立シタル無限責任ノ信用組合、販賣組合、購買組合及生産組合ニハ五箇年以内ニ於テ定期償還ノ方法ニ依リ無抵當貸付ヲ爲スコトヲ得

第九條ノ二 北海道拓殖銀行ハ日本銀行、日本興業銀行及日本興業銀行ノ代理店トナルコトヲ得

第十二條ニ左ノ一項ヲ加フ

〔參照〕

法律第七十六號北海道拓殖銀行法(明治三十二年三月二十二日官報)抄録

第六條 取締役ハ在任中何等ノ名稱ニ拘ラス他ノ職務ニ從事スルコトヲ得ス

第七條 北海道拓殖銀行ハ左ノ事業ヲ營ムモノトス

四 北海道ノ農產物ヲ擔保トスル貸付及荷爲替

前項第三號ノ事業ニ使用スヘキ金額ハ前項第一號及第二號ニ依ル貸付金額高ノ五分ノ一ヲ超過スルコトヲ得ス

朕帝國議會ノ協贊ヲ經テル臺灣銀行ニ於テ發行スル銀行券ノ偽造變造等ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月九日

内閣總理大臣 伯耆桂 太郎  
大藏大臣 伯耆曾根 荒助

法律第五十一號 (官報 三月十日)

刑法中貨幣ニ關スル犯罪ノ規定ハ臺灣銀行ニ於テ發行スル銀行券ニ之ヲ準用ス

朕帝國議會ノ協贊ヲ經テル擔保附社債信託法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月十一日

内閣總理大臣 伯耆桂 太郎  
大藏大臣 伯耆曾根 荒助  
司法大臣 波多野 敬直

法律第五十二號 (官報 三月十三日)

擔保附社債信託法

第一章 總則

第一條 本法ニ於テ信託會社ト稱スルハ擔保附社債ニ關スル信託事業ヲ營ム會社ヲ謂フ

第二條 社債ニ物上擔保ヲ附セシムトスルトキハ其ノ社債ヲ發行スル會社ト信託會社トノ信託契約ニ從ヒテ之ヲ發行スル

第三條 本法ニ依ル信託ノ引受ハ之ヲ商行爲トス

第四條 社債ニ附スルコトヲ得ヘキ物上擔保ハ左ニ掲ケルモノニ限ル

- 一 動産
- 二 證券ノ債權
- 三 不動産抵當
- 四 船舶抵當
- 五 鐵道抵當
- 六 工場抵當
- 七 鐵業抵當

第五條 擔保附社債ニ關スル信託事業ハ特別ノ法律ニ依ル場合ヲ除クノ外主務官廳ノ免許ヲ受ケルニ非サレバ之ヲ營ムコトヲ得ス

第六條 信託會社ハ銀行事業ヲ除クノ外他ノ事業ヲ兼ムルコトヲ得ス

第七條 信託會社ノ資本又ハ金銀ヲ目的トスル出資ノ總額ハ百萬圓ヲ下ルコトヲ得ス

第八條 信託會社ハ資本又ハ金銀ヲ目的トスル出資ノ拂込金額カ五十萬圓ニ達スル迄其ノ事業ニ著手スルコトヲ得ス

第九條 信託ノ業務ハ主務官廳ノ監督ニ屬ス

第十條 主務官廳ハ何時ニテモ信託會社ヲシテ其ノ事業ノ報告ヲ爲サシメ又ハ業務及財産ノ狀況ヲ検査スルコトヲ得

第十一條 主務官廳ハ信託會社ノ業務又ハ會社財産ノ狀況カ信託事業ノ執行ニ適セスト認ムルトキハ其ノ事業ノ停止又ハ業務執行方法ノ變更ヲ命シ其ノ他委託會社及社債權者ノ利益ヲ保護スルニ必要ナル命令ヲ發スルコトヲ得

第十二條 信託會社カ法令ニ定款若ハ主務官廳ノ命令ニ違反シ又ハ公益ヲ害スル行爲ヲ爲シタルトキハ主務官廳ハ其ノ事業ノ停止若ハ取締役ノ改選ヲ命シ又ハ免許ヲ取消スコトヲ得

第十三條 擔保附社債ニ關スル信託事業ヲ專業トスル會社ハ免許ノ取消ニ因リテ解散ス

第十四條 信託會社カ免許ノ取消ニ因リテ解散シタルトキハ主務官廳ハ利害關係人ノ請求ニ因リ清算人ヲ選任ス

第十五條 商法第八十八條第八十九條第九十六條第二項第百條第二百二十六條第二項第二百二十八條第二項又ハ第二百三十二條ニ定ムル清算人ノ選任又ハ解任ハ主務官廳ニ於テ之ヲ爲ス

商法第二百二十八條第二項ニ依ル請求ハ委託會社又ハ社債權者集會ニ於テモ之ヲ爲スコトヲ得

第十六條 信託會社ノ清算ハ主務官廳ノ監督ニ屬ス

主務官廳ハ何時ニテモ前項ノ監督ニ必要ナル検査ヲ爲スコトヲ得

第十七條 外國ニ於テ物上擔保附社債ヲ募集セムトスル會社ハ主務官廳ノ許可ヲ受ケ外國會社ト信託契約ヲ締結スルコトヲ得

前項ノ規定ニ依リ信託ヲ引受ケタル外國會社カ日本ニ支店ヲ有セサルトキハ日本ニ於ケル代表者ヲ定ムヘシ

商事會社ハ前項ノ代表者タルコトヲ得

第二項ノ規定ニ依リ代表者ヲ定ムタルトキハ遲滞ナク其ノ氏名及住所又ハ商號及本店ヲ主務官廳ニ届出ヘシ

日本ニ於ケル外國會社ノ代表者ハ信託事務ニ關シテハ信託會社ノ取締役又ハ之ヲ代表スル社員ト同一ノ權限ヲ有ス

第二章 信託證書  
第十八條 信託契約ハ信託證書ニ依リ之ヲ締結スヘシ

第十九條 信託證書ニハ左ノ事項ヲ記載シ委託會社及受託會社ノ代表者之ニ署名スヘシ

- 一 委託會社及受託會社ノ商號
- 二 社債ノ總額
- 三 各社債ノ金額
- 四 社債發行ノ價額又ハ其ノ最低價額
- 五 社債ノ利率
- 六 社債償還ノ方法及期限
- 七 利息支拂ノ方法及期限
- 八 債券ニ記載スヘキ事項ノ表示及利札附ナルトキハ其ノ旨ノ表示
- 九 擔保ノ種類、目的物、順位、先順位ノ擔保ヲ附シタル債權ノ金額其ノ他目的物ニ關シ擔保權者ニ對抗スルコトヲ得ヘキ權利ノ表示
- 十 第三十二條ニ依ル社債ナルトキハ其ノ事實及各會社ノ負擔部分

十一 委託及受託ノ表示

十二 證券作成ノ年月日

各社債ノ金額ハ均一ナルカ又ハ最低額ヲ以テ差除シ得ヘキモノナルコトヲ要ス

第二十條 信託證書ハ委託會社及受託會社ニ於テ各自其ノ一通ヲ保存スヘシ

前項ノ信託證書ハ其ノ原本ヲ本店ニ其ノ謄本ヲ各支店ニ備置クヘシ

第二十一條 信託證書ノ原本又ハ謄本ハ委託會社ノ株主、債權者又ハ社債應募者ノ請求アルトキハ營業時間内何時ニテモ之ヲ閲覧セシムヘシ

第三章 社債募集

第二十二條 信託契約ニ依リ物上擔保附社債ヲ募集スル會社ハ左ノ事項ヲ公告スヘシ

一 第十九條第一項第一號乃至第七號及第十號ニ掲ケタル事項

二 物上擔保附社債ナルコト

三 信託證書ノ表示

四 擔保ノ價格ヲ知ラレムルニ必要ナル程度ニ於テ第十九條第一項第九號ニ掲ケタル事項ノ概要ヲ表示

五 前ニ社債ヲ募集シタルトキハ其ノ償還ヲ了ヘサル總額

六 會社ノ資本及拂込ミタル株金ノ總額

七 最終ノ貸借對照表ニ依リ會社ニ現存スル財産ノ額

八 信託證書者ハ其ノ謄本ヲ應募者ノ閲覧ニ供スヘキ時及場所

前項ノ公告ハ委託會社ノ承認ヲ得テ之ヲ爲スヘシ

第二十三條 委託會社ハ信託契約ニ依リ社債ノ募集ヲ委託會社ニ委任スルコトヲ得此ノ場合ニ於テ信託契約ニ別段ノ定メキトキハ委託會社ハ債券ノ發行、社債ノ償還及利息ノ支拂ニ關スル一切ノ行為ヲ爲ス權限ヲ有ス

第二十四條 前條ノ場合ニ於テハ第二十二條第一項ニ掲ケタル公告ハ委託會社ニ於テ之ヲ爲スルニ依リ前項ノ公告ニハ委託會社ヲ委託會社ニ代リテ社債ノ募集ヲ爲ス旨ヲ記載スヘシ

第二十五條 委託會社ハ信託契約ノ定メタル所ニ依リ社債ノ總額ヲ引受クルコトヲ得前項ノ場合ニ於テハ第二十二條及前條ニ定メタル公告ヲ爲スコトヲ要ス

第二十六條 前條第一項ノ場合ニ於テ委託會社ハ其ノ引受ケタル社債ヲ分割シテ之ニ相當スル債券ノ發行ヲ委託會社ニ請求スルコトヲ得

委託會社ハ信託契約ニ依リ債券發行ノ權限ヲ有スルトキハ委託會社ニ通知シテ前項ノ債券ヲ發行スルコトヲ得

第二十七條 受託會社カ第二十五條第一項ニ依リ引受ケタル社債ヲ讓渡サルトスルトキハ其ノ旨ヲ公告スヘシ

前項ノ公告ニ記載スル事項ヲ付テハ第二十二條第一項ノ規定ヲ準用ス

委託會社ハ社債ヲ讓渡ケルトスル者ノ請求アルトキハ營業時間内何時ニテモ信託證書又ハ其ノ謄本ヲ閲覧セシムヘシ

第二十八條 受託會社カ前條ノ規定ニ依リ社債ヲ讓渡シタル場合ニ於テハ委託會社ニ代リテ其ノ社債ノ償還及利息ノ支拂ニ關スル一切ノ行為ヲ爲ス權限ヲ有ス

第二十九條 委託會社又ハ受託會社ハ信託契約ノ定ムル所ニ從ヒ第三者ヲシテ社債ノ總額ヲ引受ケルコトヲ得

前項ニ依ル社債總額ノ引受ハ之ヲ商行爲トス

第一項ニ依リ社債ノ總額ヲ引受ケタル者ハ其ノ引受ケタル社債ヲ分割シテ之ニ相當スル債券ノ發行ヲ委託會社ニ請求スルコトヲ得

受託會社カ信託契約ニ依リ債券發行ノ權限ヲ有スルトキハ受託會社ニ對シテ前項ノ請求ヲ爲スコトヲ得

第三十條 第二十五條第二項、第二十七條第一項、第二項及第二十八條ノ規定ハ前條第一項ニ依リ第三者カ社債ノ總額ヲ引受ケタル場合ニ之ヲ準用ス

第三十一條 委託會社又ハ受託會社ハ信託契約ノ際本ヲ第二十九條第一項ニ依リ社債ノ總額ヲ引受ケタル者ニ交付スヘシ

前項ノ股本ハ委託會社又ハ受託會社ノ代表者之ニ署名シテ原本ト相違ナキコトヲ認證スヘシ

第三十二條 會社ハ合同シテ社債ヲ發行スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ社債ノ募集ヲ受託會社ニ委任シ又ハ受託會社ヲシテ社債ノ總額ヲ引受ケルコトヲ得

第三十三條 前條ノ場合ニ於テハ受託會社ハ債券ノ發行、社債ノ償還及利息ノ支拂ニ關スル一切ノ行爲ヲ爲ス權限ヲ有ス

第三十四條 委託會社ハ商法第二百四條第二項ノ規定ニ從ヒ左ノ事項ヲ登記スヘシ  
一 第十九條第一項第一號乃至第三號、第五號乃至第七號、第九號及第十號ニ掲ケタル事項

二 第二十二條第一項第二號及第三號ニ掲ケタル事項

三 第二十三條ニ依ル委任又ハ第二十五條第一項ニ依ル引受アリタルトキハ其ノ事實

四 第二十九條第二項ニ依ル引受アリタルトキハ其ノ事實及引受人ノ氏名又ハ商號

第四章 債券  
第三十五條 信託證書ニ依ル債券ニハ左ノ事項ヲ記載スヘシ  
一 第十九條第一項第一號乃至第三號、第五號乃至第七號ニ掲ケタル事項

二 第二十二條第一項第二號及第三號ニ掲ケタル事項

三 債券ノ番號  
四 前條第三號及第四號ニ掲ケタル事項

第三十六條 受託會社ハ委託會社カ信託契約ノ條款ニ適合スル債券ヲ發行シタルトキハ其ノ請求ニ依リ債券カ信託證書ニ依ル債券ナルコトヲ證明シテ之ヲ委託會社又ハ其ノ指定シタル者ニ引渡スヘシ

前項ノ證明ハ各債券ニ記載シテ受託會社ノ取締役又ハ之ヲ代表スル社員之ニ署名スルニ依リテ之ヲ爲ス

第三十七條 信託證書ニ依ル債券ハ前條ノ證明アルニ非サレハ其ノ效力ヲ生セズ

第三十八條 受託會社カ委託會社ニ代リテ債券ヲ發行シタルトキハ其ノ旨ヲ各債券ニ記載シ受託會社ノ取締役又ハ之ヲ代表スル社員之ニ署名スヘシ

前項ノ場合ニ於テハ前二條ノ規定ヲ適用セズ  
第三十九條 受託會社カ委託會社ニ代リテ債券ヲ發行シタルトキハ商法第二百六條ニ依ル記載ハ

受託會社ニ於テ之ヲ爲シ商法第二百七條ニ依リ請求ハ受託會社ニ對シテ之ヲ爲ス

第五章 社債原簿

第四十條 會社カ物上擔保附社債ヲ發行シタルトキハ社債原簿ニ商法第百七十三條ニ掲ケタル

モノノ外左ノ事項ヲ記載スヘシ

- 一 第十九條第二項第一號第七號第九號及第十號ニ掲ケタル事項
- 二 第三十四條第二號乃至第四號ニ掲ケタル事項

第四十一條 委託會社ハ社債原簿ノ原本ヲ作成シテ之ヲ受託會社ニ交付スヘシ

前項ノ原本ハ委託會社ノ取締役又ハ之ヲ代表スル社員之ニ署名シテ原本ト相違ナキコトヲ認證スヘシ

第四十二條 受託會社ハ前條ノ原本ヲ其ノ本店ニ備置キ社債權者ノ請求アルトキハ營業時間内何時ニテモ之ヲ閲覧セシムルコトヲ得

第四十三條 社債原簿ノ記載ニ變更ヲ生シタルトキハ其ノ都度委託會社ハ取締役又ハ之ヲ代表スル社員ノ署名シタル書面ヲ以テ之ヲ受託會社ニ通知スヘシ

受託會社ハ前項ノ書面ヲ受ケタルトキハ之ヲ社債原簿ノ原本ニ添附シテ保存スヘシ

第四十四條 受託會社ハ委託會社ニ代リテ債券ヲ發行シタルトキハ社債原簿ハ受託會社ニ於テ之ヲ作成シ其ノ本店ニ備置クヘシ

商法第百七十三條第二項ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第四十五條 前條第一項ノ場合ニ於テハ受託會社ニ於テ社債原簿ノ原本ヲ作成シテ之ヲ委託會社ニ交付スヘシ

第四十一條第二項第四十二條第四十三條及商法第百七十一條第二項ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第四十六條 委託會社又ハ受託會社カ社債原簿ヲ作成シタルトキハ其ノ原本ヲ第三十九條第一項ニ依リ社債權者ノ總額ヲ引受ケタル者ニ交付スヘシ

第四十七條 委託會社ハ受託會社又ハ第二十條第一項ニ依リ社債ノ總額ヲ引受ケタル者カ社債

原簿ノ記載ニ變更ヲ生シタルトキハ其ノ都度書面ヲ以テ社債原簿ヲ備フル會社ニ之ヲ通知スヘシ

第六章 社債權者集會

第四十八條 受託會社又ハ第二十九條第一項ニ依リ社債ノ總額ヲ引受ケタル者ハ必要アルトキハ何時ニテモ社債權者集會ヲ招集スルコトヲ得

第四十九條 委託會社又ハ社債總額ノ十分ノ一ニ當ル社債權者ハ集會ノ目的及共ノ招集ノ理由ヲ記載シタル書面ヲ受託會社又ハ第二十九條第一項ニ依リ社債ノ總額ヲ引受ケタル者ニ提出シテ社債權者集會ノ招集ヲ請求スルコトヲ得

前項ノ請求ヲ受ケタル者ハ其ノ請求アリタル後二週間内ニ集會招集ノ手續ヲ爲ササルトキハ其ノ請求ヲ爲シタル者ハ主務官廳ノ許可ヲ受ケ共ノ招集ヲ爲スコトヲ得

第五十條 第十五條第二項第八十九條第九十四條又ハ第九十九條ニ定メタル集會ハ社債總額ノ十分ノ一ニ當ル社債權者ハ於テ自ラ之ヲ招集スルコトヲ得

前項ノ招集ハ信託契約ニ別段ノ定メキトキハ受託會社本店ノ所在地ニ於テ之ヲ爲スヘシ

第九十四條又ハ第九十九條ニ定メタル集會ハ委託會社モ亦自ラ之ヲ招集スルコトヲ得

第五十一條 商法第五百十六條ノ規定ハ社債權者集會ノ招集ニ之ヲ準用ス

第五十二條 社債權者集會ノ決議ハ信託契約ニ別段ノ定アル場合ヲ除クノ外行使セラレタル議決權ノ過半數ヲ以テ之ヲ爲ス但シ第六十四條第六十七條第一項第七十五條第八十五條第八十六條及第九十七條第一項ニ記載シタル事項ノ決議ハ記名債券ヲ有スル者及第二項ノ規定ニ依リ債券ヲ供託シタル者ノ半數以上ニシテ社債總額ノ半數以上ニ當ル社債權者カ議決權ヲ行使シタル場合ニ非ツレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

商法第六十一條第二項乃至第四項ノ規定ハ社債權者集會ノ決議ニ之ヲ準用ス

集會ニ出席セサル社債權者ハ信託契約ニ別段ノ定アル場合ヲ除クノ外書面ヲ以テ議決權ヲ行フコトヲ得

各社債權者ハ社債ノ最低金額毎ニ一箇ノ議決權ヲ有ス但シ社債ノ最低金額ノ十一倍以上ヲ有スル社債權者ノ議決權ハ信託契約ヲ以テ之ヲ制限スルコトヲ得

第五十三條 第二十九條第一項ニ依リ社債ノ總額ヲ引受ケタル者又ハ其ノ代表者ハ社債權者集會ニ出席シテ發言シ又ハ書面ヲ以テ意見ヲ述フルコトヲ得

第五十四條 委託會社ノ代表者ハ社債權者集會カ第八十九條第二項ニ規定シタル事項ニ付招集セラレタル場合ヲ除クノ外之ニ出席シテ發言シ又ハ書面ヲ以テ意見ヲ述フルコトヲ得

第五十五條 社債權者集會ヲ招集スル者ハ前二條ニ掲ケタル者又ハ其ノ代表者ニ招集ノ通知ヲ發スルコトヲ得

商法第五百十六條第一項及第二項ノ規定ハ前項ノ通知ニ之ヲ準用ス

第五十六條 社債權者集會又ハ之ヲ招集シタル者ニ於テ必要ト認ムルトキハ委託會社ニ通知シテ其ノ代表者ノ出席ヲ求ムルコトヲ得

第五十七條 社債權者集會招集ノ手續又ハ其ノ議決ノ方法カ本法又ハ信託契約ノ條款ニ違反スルトキハ委託會社ハ委託會社又ハ各社債權者ハ其ノ決議ノ無効ノ宣告ヲ裁判所ニ請求スルコトヲ得

前項ノ請求ハ決議ノ日ヨリ一箇月内ニ之ヲ爲スヘシ

社債權者カ第一項ノ請求ヲ爲ストキハ其ノ債券ヲ供託シ且招集ヲ爲シタル者ノ請求ニ因リ相當ノ擔保ヲ供スヘシ

第五十八條 社債權者集會ニ於テ決議スヘキ事項ハ本法ニ規定アルモノノ外特ニ信託契約ニ定メタルモノニ限ル

第五十九條 社債權者集會ヲ招集シタル者ハ決議錄ヲ作成スヘシ

第六十條 委託會社ハ社債權者集會ノ決議錄ノ原本又ハ謄本ヲ本店及支店ニ備置クヘシ

委託會社ハ委託會社又ハ社債權者ノ請求アルトキハ營業時間内何時ニテモ前項ノ決議錄ヲ閱覽セシムヘシ

第六十一條 委託會社以外ノ者カ決議錄ヲ作成セタルトキハ自ラ其ノ原本ヲ保存シ其ノ謄本ヲ受託會社ニ交付スヘシ

前條第二項ノ規定ハ前項ノ謄本ニ之ヲ準用ス

第六十二條 社債權者集會ノ費用ハ委託會社又ハ第二十九條第一項ニ依リ社債ノ總額ヲ引受ケタル者ニ於テ招集シタル場合ヲ除クノ外集會ヲ招集シタル者ニ於テ之ヲ負擔ス

第六十三條 社債權者集會ノ決議ハ委託會社之ヲ執行ス但シ其ノ性質カ委託會社ニ於テ執行スル



第六十四條 信託契約ニ別段ノ定メキトキハ社債權者集會ニ於テ一人又ハ數人ノ代表者ヲ選任シ其ノ決議スル事項ノ決定ヲ之ニ委任スルコトヲ得

代表者ハ第二十九條第一項ニ依リ社債ノ總額ヲ引受ケタル者又ハ社債總額ノ千分ノ一以上ヲ有スル者ノ中ヨリ之ヲ選任ス

代表者數人アル場合ニ於テ集會ニ於テ別段ノ定メササルトキハ代表者ノ權限ニ屬スル事項ハ其ノ過半数ヲ以テ之ヲ決ス

第六十五條 代表者ハ第六十三條但書ニ該當セル場合ニ於テハ其ノ權限ニ屬スル事項ヲ自ラ執行シ又ハ他人ヲシテ執行セシムルコトヲ得

第六十六條 代表者就任シタルトキハ其ノ公告ヲ爲シ委託會社、受託會社及第二十九條第一項ニ依リ社債ノ總額ヲ引受ケタル者ニ之ヲ通知スヘシ

第六十七條 社債權者集會ハ何時ニテモ代表者ヲ解任シ又ハ其ノ權限ヲ變更スルコトヲ得前項ノ場合ニ於テハ集會ハ其ノ公告ヲ爲シ委託會社及第二十九條第一項ニ依リ社債ノ總額ヲ引受ケタル者ニ之ヲ通知スヘシ

第七章 信託契約ノ效力

第六十八條 受託會社ハ公平且誠實ニ信託事務ヲ處理スヘシ

第六十九條 受託會社ハ委託會社及社債權者ニ對シテ善良ナル管理者ノ注意ヲ以テ信託事務ヲ處理スル義務ヲ負フ

第七十條 信託契約ニ依リ物上擔保ノ信託證書ニ記載セル總社債ノ爲ニ受託會社ニ歸屬ス

受託會社ハ總社債權者ノ爲ニ擔保權ヲ保存シ且實行スル義務ヲ負フ

第七十一條 社債權者ハ其ノ擔保權ニ屬シ平等ニ擔保ノ利益ヲ享受ス

第七十二條 信託契約ニ依リ物上擔保ノ社債成立以前ニ於テ其ノ效力ヲ生ズ

第七十三條 民法第三百四十八條、第三百七十五條及商法第二百七十七條ノ規定ハ信託契約ニ依リ擔保權ニ之ヲ適用ス

第七十四條 受託會社ハ委託會社トノ契約ヲ以テ擔保ヲ追加スルコトヲ得

第七十五條 受託會社ハ社債權者集會ノ決議ニ依リ委託會社トノ契約ヲ以テ擔保ヲ變更スルコトヲ得

第七十六條 前二條ノ契約ハ信託契約ト同一ノ效力ヲ有ス

第七十七條 第七十四條及第七十五條ノ契約ハ委託會社及受託會社ノ代表者ノ署名シタル書面ヲ以テ之ヲ爲シ委託會社及受託會社通達ナク各自之ヲ公告スヘシ但シ知レル社債權者及第二十九條第一項ニ依リ社債ノ總額ヲ引受ケタル者ニハ各別ニ之ヲ通知スヘシ

前項ノ契約證書ニハ第二十條及第二十一條ノ規定ヲ準用ス

第七十八條 信託契約ニ依リ擔保權ハ總社債權者ノ爲ニノミ之ヲ行使スルコトヲ得

第七十九條 委託會社ハ定期ニ社債ノ一部ヲ償還スヘキ場合ニ於テ其ノ償還ヲ遲延シ二箇月ヲ越シタルトキハ受託會社ハ社債權者集會ノ決議ニ依リ一定ノ期間内ニ支拂ヲ爲スヘキ旨及其ノ期間内ニ支拂ヲ爲ササルトキハ社債ノ總額ニ付期限ノ利益ヲ失ハシムル旨ヲ委託會社ニ通告スルコトヲ得

委託會社ハ前項ノ期間内ニ支拂ヲ爲ササルトキハ社債ノ總額ニ付期限ノ利益ヲ失フ

第一項ノ催告ハ書面ヲ以テ之ヲ爲スヘシ

第八十條 前條ニ依リ委託會社カ期限ノ利益ヲ失ヒタルトキハ受託會社ハ遲滞ナク之ヲ公告スヘシ但シ知レタル社債權者及第二十九條第一項ニ依リ社債ノ總額ヲ引受ケタル者ニハ各別ニ之ヲ通知スヘシ

第八十一條 前二條ノ規定ハ委託會社カ社債ノ利息ノ支拂ヲ遲延シ三箇月ヲ經過シタル場合ニ之ヲ準用ス

第八十二條 社債カ期限ニ至リ辨濟セラレヌ又ハ委託會社カ社債ノ辨濟ヲ完了セスシテ解散シタルトキハ受託會社ハ遲滞ナク社債權者集會ノ決議ニ依リ擔保權ヲ實行スヘシ

民法第三百五十四條ノ規定ハ信託契約ニ依ル財產質ニ之ヲ適用セス

第八十三條 受託會社ハ總社債權者ノ爲ニ付與セラレタル執行力アル正本ニ基キ擔保物ニ付強制執行ヲ爲シ又ハ競賣法ニ依ル競賣ノ申立若ハ委任ヲ爲スコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ債權者ニ對スル異議ハ受託會社ニ對シテ之ヲ主張スルコトヲ得

第八十四條 受託會社ハ信託契約ニ別段ノ定ナキトキハ社債權者ノ爲ニ債權ノ辨濟ヲ得ルニ必要ナル一切ノ行爲ヲ爲ス權限ヲ有ス

第八十五條 受託會社ハ社債權者集會ノ決議ニ依リ總社債ニ付支拂ヲ猶豫シ不履行ニ因リテ生シタル責任ヲ免除シ又ハ和解ヲ爲スコトヲ得

第八十六條 受託會社ハ社債權者集會ノ決議ニ依リ總社債權者ノ爲ニ訴訟行爲ヲ爲シ又ハ破産手續ニ屬スル一切ノ行爲ヲ爲スコトヲ得

第八十七條 受託會社カ第八十二條 第八十五條又ハ前條ニ掲ケタル行爲ヲ完了シタルトキハ遲

滞ナク之ヲ公告スヘシ但シ知レタル社債權者及第二十九條第一項ニ依リ社債ノ總額ヲ引受ケタル者ニハ各別ニ之ヲ通知スヘシ

第八十八條 受託會社カ社債權者ノ爲ニ辨濟ヲ得タル金額ハ遲滞ナク債權額ニ應シテ各社債權者ニ交付スヘシ

受託會社カ前項ノ金額ヲ自己ノ爲ニ費消シタルトキハ民法第六百四十七條ノ規定ヲ準用ス

社債權者ヲ確知スルコト能ハサルトキ又ハ社債權者カ受領ヲ拒ミ若ハ受領スルコト能ハサルトキハ受託會社ハ其ノ社債權者ノ爲ニ前項ノ金額ヲ供託スヘシ

受託會社ハ必要アル場合ニ於テハ第二十九條第一項ニ依リ社債ノ總額ヲ引受ケタル者ニ第一項及第三項ノ行爲ヲ委任スルコトヲ得

第八十九條 受託會社カ總社債權者ノ爲ニ爲スヘキ行爲ヲ怠リタルトキハ主務官廳ハ社債權者集會ノ申請ニ因リ特別代理人ヲ選任シテ之ヲ爲サシムルコトヲ得

社債權者ト受託會社トノ利益相反スル場合ニ於テ總社債權者ノ爲ニ裁判上又ハ裁判外ノ行爲ヲ爲ス必要アルトキ亦前項ニ同シ

第九十條 本法ニ依リ總社債權者ニ代リテ裁判上又ハ裁判外ノ行爲ヲ爲ス場合ニ於テハ各別ニ社債權者ヲ表示スルコトヲ要セス

第九十一條 受託會社ハ委託會社ニ對シ信託事務ノ處理ニ付相當ノ報酬ヲ請求スルコトヲ得

信託契約ニ別段ノ定ナキトキハ民法第六百四十八條第二項及第三項ノ規定ハ信託契約ニ之ヲ準用ス

第九十二條 委託會社ハ受託會社カ信託事務ヲ處理スルニ付正當ニ支出シタル一切ノ費用及支出

ノ日以減シ其ノ利息ヲ徵收シ及過失ヲタシテ受ケタル一切ノ損害ヲ賠償スル義務ヲ負フ  
 受託會社ハ信託事務ヲ處理スルニ付要スル費用ノ前拂ヲ委託會社ニ請求スルコトヲ得  
 前二項ノ規定ハ第二十九條第一項ニ依リ社債ノ總額ヲ引受ケタル者ニ關シテ之ヲ準用ス  
 第九十三條 信託契約ニ依リ物件擔保ノ前條第二項ノ規定ニ依リ受託會社ニ生ズヘキ債權ノ爲ニ  
 其ノ效力ヲ有ス

受託會社ハ前項ノ債權ニ付社債權者ニ優先シテ擔保物ヨリ辨濟ヲ受ツル權利ヲ有ス  
 第九十四條 受託會社ハ故意若シテ過失ニ因リ物件擔保ヲ消滅セシメ又ハ其ノ價格ヲ減少セシメタ  
 ルトキハ主務官廳ハ委託會社又ハ社債權者集會ノ申請ニ因リ受託會社ヲシテ相當ノ金額ヲ供託  
 セシムルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ委託會社ハ供託金ノ上ニ債權ヲ設定シタルモノト看做ス  
 前項ノ規定ハ信託契約ニ依リ物件擔保ト看做ス

第九十五條 委託會社第六十四條第二項ニ依リ選任セラレタル代表者又ハ社債總額ノ十分ノ一  
 以上ニ當リ社債權者ノ何時ニテモ受託會社ニ於ケル擔保物保管ノ狀況ヲ検査スルコトヲ得  
 無記名式ノ債券ヲ有スル者ハ其ノ債券ヲ受託會社ニ供託スルニ非ザレハ前項ノ検査ヲ爲スコト  
 ヲ得  
 第九十六條 民法第二百九十八條第三項ノ規定ハ信託契約ニ依リ債權者ニ之ヲ準用セシ  
 メ  
 第九十七條 信託事務ノ承継及終了

第九十七條 受託會社ハ信託契約ノ定ムル所ニ依リ又ハ委託會社及社債權者集會ノ同意ヲ得テキ  
 ハ信託事務ヲ承継シタル委託會社ヲ定メテ解任スルコトヲ得  
 信託事務ヲ承継シタル委託會社ハ外國會社トシテ之ヲ定ムル時ハ第六十七條第二項ノ規定ヲ準用ス

第九十八條 受託會社ハ已ムコトヲ得サル事由アルトキハ主務官廳ノ許可ヲ受ケ解任スルコトヲ  
 得

第九十九條 受託會社カ其ノ義務ニ違反シ又ハ信託事務ヲ處理スルニ不適任ナルトキ其ノ他正當  
 ノ事由アルトキハ主務官廳ハ委託會社又ハ社債權者集會ノ申請ニ因リ受託會社ヲ解任スルコト  
 ヲ得

第一百條 前二條ノ規定ニ依リ受託會社カ解任セシ若ハ解任セラレタルトキ又ハ免許ヲ取消サレ若  
 ハ解散シタルトキハ主務官廳ハ更ニ受託會社ヲ選任シテ信託事務ヲ承継セシムヘシ

第一百一條 第九十七條ニ依リ信託事務ノ承継ハ委託會社、前受託會社及新受託會社ノ代表者ノ冊  
 名シタル契約書ヲ作成スルニ因リテ其ノ效力ヲ生ス

前項ノ契約ヲ締結シタルトキハ各會社ハ過渡ナク書面ヲ以テ之ヲ主務官廳ニ届出ヘシ  
 前條ニ依リ承継ハ新受託會社ニ對シテ主務官廳ノ命令書ヲ交付スルニ因リテ其ノ效力ヲ生ス

第一百二條 信託事務ノ承継ハ第九十七條ニ依リ場合ニ於テハ委託會社、前受託會社及新受託會社第  
 百條ニ依リ場合ニ於テハ委託會社及新受託會社過渡ナク各自之ヲ公告スヘシ但シ知レタル社債  
 權者及第二十九條第一項ニ依リ社債ノ總額ヲ引受ケタル者ニハ各別ニ之ヲ通知スヘシ

第一百三條 第九十七條ニ依リ定メラル又ハ第一百條ニ依リ選任セラレタル新受託會社ハ前受託會社  
 ノ締約シタル條款ニ從ヒ信託事務ヲ處理スヘシ  
 社債權者又ハ委託會社ノ爲ニ前受託會社ニ歸屬シタル權利義務ハ前受託會社ノ解任、解任、免許  
 ノ取消又ハ解散ノ時ニ過リテ新受託會社ニ移轉ス但シ前受託會社ノ契約違反又ハ不法行爲ニ因  
 リ生ズル責任ハ此ノ限ニ在ラズ

第四百條 前受託會社ノ不法處分ニ因リ質物ノ占有ヲ得タル者カ惡意ナリレトキハ新受託會社カ共ノ者ノ爲ニ占有ヲ奪ハレタルモノト看做ス

第四百五條 前受託會社ノ取締役、之ヲ代表スル社員、清算人又ハ破産管財人ハ遲滞ナク共ノ委託會社又ハ社債權者ノ爲ニ保管スル物及信託事務ニ關スル書類ヲ新受託會社ニ移付シ共ノ他信託事務ヲ新受託會社ニ引繼ク爲必要ナル一切ノ行爲ヲ爲スヘシ

前項ニ掲ケタル引繼ヲ完了シタルトキハ各會社ハ共同シテ書面ヲ以テ之ヲ主務官廳ニ届出ヘシ  
前項ノ届書ニハ移付シタル物ノ目錄ヲ添附スヘシ

第四百六條 承繼ニ關スル事務ハ主務官廳ノ監督ニ屬ス  
第四百七條 受託會社カ信託事務ヲ終了シタルトキハ總計算書ヲ作成シテ之ヲ公告スヘシ

第九章 罰則

第四百八條 第五條ノ規定ニ違反シテ擔保附社債ニ關スル信託事業ヲ營ム者ハ十圓以上千圓以下ノ過料ニ處ス

第四百九條 左ノ場合ニ於テハ會社ノ業務ヲ執行スル社員、取締役、清算人、破産管財人、第八十九條ノ特別代理人又ハ外國會社ノ代表者ヲ十圓以上千圓以下ノ過料ニ處ス

- 一 第六條ノ規定ニ違反シタルトキ
- 二 第八條ノ規定ニ違反シタルトキ
- 三 本法ニ依ル主務官廳ノ命令ニ違反シタルトキ
- 四 本法ニ依ル主務官廳ノ検査ヲ妨ケタルトキ

第五百十七條 第一項又ハ第九十七條第二項ノ規定ニ違反シタルトキ

第六 本法ニ依リ債券ニ記載スヘキ事項ヲ記載セズ又ハ不正ノ記載ヲ爲シタルトキ

第七 委託會社ニ於テ債券ヲ發行シタル場合ニ於テ第三十六條ニ定メタル手續ヲ履行セズシテ之ヲ交付シタルトキ

第八 第七十條第二項ニ依ル擔保權ノ保存又ハ實行ヲ怠リタルトキ

第九 第八十八條第一項又ハ同條第三項ノ規定ニ違反シタルトキ

第十 第九十五條第一項ニ依ル検査ヲ妨ケタルトキ

第十一 第九十五條第一項ニ定メタル事務ノ引繼ヲ怠リタルトキ

第十二 社債權者集會ノ決議ニ依ルヘキ場合ニ於テ之ニ依ラス又ハ之ニ違反シタルトキ

第十三 社債權者集會又ハ其ノ代表者ニ對シテ不實ノ報告ヲ爲シ又ハ事實ヲ隱蔽シタルトキ

第一百十條 左ノ場合ニ於テハ會社ノ業務ヲ執行スル社員、取締役、清算人、破産管財人、第二十九條第一項ニ依リ社債ノ總額ヲ引受ケタル者、第六十四條ノ代表者、第八十九條ノ特別代理人又ハ外國會社ノ代表者ヲ五百圓以上五百圓以下ノ過料ニ處ス

一 本法ニ定メタル届出、公告若ハ通知ヲ爲スコトヲ怠リ又ハ不正ノ公告若ハ通知ヲ爲シタルトキ

二 本法ニ依リ交付スヘキ書類ヲ交付セズ又ハ之ニ不正ノ記載ヲ爲シタルトキ

三 本法ニ依リ閱覽ヲ許スヘキ書類ヲ正當ノ理由ナクシテ閱覽セシメサリシトキ

四 本法ニ依リ備置クヘキ書類ヲ備置カス、之ニ記載スヘキ事項ヲ記載セズ又ハ不正ノ記載ヲ爲シタルトキ

第百十一條 非訟事件手續法第二百六條乃至第二百八條ノ規定ハ本章ニ定メタル過料ニ之ヲ準用ス

附則

第百十二條 本法ニ依リ署名スヘキ場合ニ於テハ記名捺印ヲ以テ署名ニ代フルコトヲ得

第百十三條 擔保附社債ニ關スル信託事業ヲ營ム合名會社及合資會社ノ設立登記ヲ申請スル場合ニ於テハ申請書ニ非訟事件手續法第一百七十九條第二項ニ掲ケタル書面ノ外主務官廳ノ免許書又ハ其ノ謄本ヲ添附スヘシ

既設ノ會社カ擔保附社債ニ關スル信託事業ヲ營ム免許ヲ受ケタルニ因リ其ノ登記ヲ申請スルトキ亦前項ニ同シ

第百十四條 信託會社ノ登記スヘキ事項ニシテ主務官廳ノ免許ヲ要スルモノニ付テハ免許書ノ到達ノ日ヨリ登記ノ期間ヲ起算ス

第百十五條 主務官廳カ第十二條又ハ第十三條ノ規定ニ依リ事業ノ停止ヲ命ジ又ハ免許ヲ取消シタルトキハ登記所ハ主務官廳ノ囑託ニ因リ其ノ登記ヲ爲スヘシ

第百十六條 本法ニ依ル社債ノ登記ノ申請書ニハ非訟事件手續法第九十一條ニ掲ケタル書面ノ外信託證書ヲ添附スヘシ

第百十七條 本法ニ依ル社債ノ登記事項ニ變更ヲ生シタルトキハ委託會社ノ取締役又ハ之ヲ代表スル社員ノ選擇ナシ其ノ登記ヲ申請スヘシ

前項ノ登記ノ申請書ニハ其ノ變更ヲ證明スル書類ヲ添附スヘシ

第百十八條 信託契約ニ依ル擔保權設定ノ登記ニ付テハ委託會社ヲ登記權利者トス

第百十九條 信託契約ニ依ル擔保權設定ノ登記ヲ申請スル場合ニ於テハ不動産登記法第百十七條又ハ同法第七條ニ依ル擔保權ノ登記ノ社債ノ種類ヲ表示スルモノヲ以テ足ル

第百二十條 本法施行ノ期日ニ至ル以前ニ以テ定ム

陸帝國議會ノ協賛ヲ經テ本鐵道抵當法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セリ

御 名 御 璽

明治三十八年三月十一日

内閣總理大臣 伯耆 桂 太郎  
司法 大臣 波多野 敬直  
遞信 大臣 大浦 兼武

法律第五十二號(第三十三號) 鐵道抵當法

第一條 總則

第一條 本法ニ於テ會社ト稱スルハ私設鐵道株式會社ヲ謂フ

第三條 會社ノ抵當權ノ目的ヲ爲ス爲鐵道ノ全部又ハ一部ニ付鐵道財團ヲ設ケルコトヲ得

鐵道財團ニ屬スルモノハ同時ニ他ノ鐵道財團ニ屬スルモノトシ得ズ

鐵道財團ハ之ヲ二箇ノ物トシ得ズ

鐵道財團ハ抵當權ノ消滅ニ因リテ消滅ス

第三條 鐵道財團ハ左ニ掲ケタルモノニシテ鐵道財團ノ所有權ヲ屬スルモノヲ以テ之ヲ組成ス

一 鐵道線路、其ノ他ノ鐵道用地及其ノ上ニ存スル工作物並之ニ屬スル器具機械

二 工場、倉庫、發電所、變壓所、配電所、事務所、宿舍及其ノ敷地並之ニ屬スル器具機械

三 鐵道用水ニ關スル工作物及其ノ敷地並之ニ屬スル器具機械

四 鐵道用通信、信號又ハ送電ニ要スル工作物及其ノ敷地並之ニ屬スル器具機械

五 前四號ニ掲ケタル工作物ヲ所有シ又ハ使用スル爲他人ノ不動産ノ上ニ存スル地上權、登記シタル質借權及前四號ニ掲ケタル土地ノ爲ニ存スル地役權

六 車輛及之ニ屬スル器具機械

七 保線ニ要スル材料及器具機械

第四條 鐵道財團ハ所有權及抵當權以外ノ物權又ハ差押、假差押若ハ假處分ノ目的ト爲スコトヲ得ス

鐵道財團ニ屬スルモノハ所有權以外ノ物權又ハ差押、假差押若ハ假處分ノ目的ト爲スコトヲ得ス

鐵道財團ニ屬スヘキモノニシテ所有權以外ノ物權又ハ差押、假差押若ハ假處分ノ目的タルトキ又ハ鐵道財團ニ屬スヘキ不動産ニシテ質借權ノ目的タルトキハ會社ハ鐵道財團ヲ設クルコトヲ得ス但シ不動産ニ關スル權利ニ付其ノ登記ナキトキハ此ノ限ニ在ラス

第五條 抵當權ノ設定又ハ變更ハ總株金四分ノ一以上ノ拂込アリタル後定款變更ト同一方法ノ決議ヲ經主務官廳ノ認可ヲ受クルニ因リテ其ノ效力ヲ生ス

第六條 鐵道財團ヲ抵當ト爲ス債務ノ額ハ社債ノ額ト合セテ總株金拂込額ヲ超ユルコトヲ得ス但シ舊債償還ノ爲ニスル場合ニ於テハ舊債務ノ額ハ之ヲ算入セス

第七條 抵當權設定ノ認可ヲ申請スルニハ抵當證書及鐵道財團目錄ヲ差出スヘシ但シ擔保附社債ヲ發行スル場合ニ在リテハ信託證書ヲ以テ抵當證書ニ代フ

抵當證書ニハ左ノ事項ヲ記載スヘシ

一 鐵道財團ニ屬スル線路ノ表示

二 抵當權者、債務者及鐵道財團ノ所有者ノ名稱及住所

三 抵當權ノ順位

四 債權額及償還ノ方法並期限

五 利率及利息支拂ノ方法並期限

抵當證書又ハ信託證書ニ記載シタル事項ニ變更ヲ生スヘキ契約ハ主務官廳ノ認可ヲ受クルニ非サレハ其ノ效力ヲ生セス

第八條 抵當權ノ設定認可ノ申請アリタルトキハ主務官廳ハ直ニ官報ヲ以テ鐵道財團ニ屬スヘキモノニ關シ第四條第三項ノ權利ヲ有スル者又ハ差押、假差押若ハ假處分ノ債權者ハ一定ノ期間内ニ申出ツヘキ旨ヲ公告スヘシ但シ其ノ期間ハ一箇月ヲ下ルコトヲ得ス

主務官廳ハ抵當權ノ設定認可ノ申請前ニ於テモ會社ノ申請ニ因リ豫メ前項ノ公告ヲ爲スコトヲ得此ノ場合ニ於テ公告後六箇月内ニ抵當權設定認可ノ申請ナキトキハ公告ハ其ノ效力ヲ失フ

會社ハ前項ノ申請ヲ爲ストキハ鐵道財團目錄ヲ差出スヘシ

第九條 前條第二項ニ依ル公告ヲ爲シタルトキ又ハ抵當權ノ設定認可ノ申請ヲ爲シタルトキハ鐵道財團ニ屬スヘキモノハ之ヲ讓渡スコトヲ得ス

第十條 第八條ノ公告アリタル後ハ同條第三項ニ依ル公告カ效力ヲ失ハサル間、抵當權ノ設定認可ノ申請カ却下セラレサル間及其ノ認可カ效力ヲ失ハサル間ハ鐵道財團ニ屬スヘキ不動産ニ關

スル權利ヲ行使スル時ニ決定スルモノトシ得ズ

前項ノ規定ハ動産ニ對スル債權ノ場合ニ之ヲ準用ス

第十二條 抵當權設定ノ認可アリタルトキハ其ノ鐵道ニ關スルモノニシテ第三條ニ掲ケタルモノ  
ハ當然鐵道財團ニ屬ス其ノ抵當權設定後新ニ鐵道財團ノ所有者ニ屬シタルモノ亦同シ

前項ニ掲ケタルモノニ關シテ第四條第三項ノ權利アリトキハ不動産ニ關スルモノノ登記ハ其ノ效  
力ヲ失ヒ動産ニ關スルモノハ存続セザルモノト看做シ差押假處分ハ其ノ效力ヲ失フ  
但シ抵當權設定ノ認可ハ效力ヲ失ヒタルトキハ此ノ限ニ在ラス

前項ノ場合ニ於テハ第四條第三項ノ權利ヲ有スル者又ハ差押假處分若ハ假處分ノ債權者ハ鐵  
道財團ノ所有者ニ對シテ損害賠償ノ請求ヲ爲スコトヲ得但シ第八條ノ公告アリタルモノニ付期間  
内ニ申出テ其ノ權利者或ハ期間經過後ニ於テ登記ノ申請ヲ爲セザル者動産ニ關シテ所有權以  
外ノ物權ヲ取得スル者又ハ差押假處分ヲ爲シタル者ハ此ノ限ニ在ラス

第十三條 第六條第三項ニ規定スル公告ハ效力ヲ失ヒタルトキハ抵當權ノ設定ヲ認可セザルトキ  
又ハ其ノ認可ハ效力ヲ失ヒタルトキハ主務官廳ハ直ニ官報ヲ以テ其ノ旨ヲ公告スヘシ

第十三條 抵當權設定ノ認可アリタル後二箇月内ニ其ノ登録ノ申請ナキトキハ認可ハ其ノ效力ヲ  
失フ

第十四條 抵當權ハ債權消滅以前ニ於テ其ノ效力ヲ生ズ

第十五條 抵當權ノ行使若シテ鐵道財團ノ所有權ノ移轉ハ登録ヲ爲スニ非サレハ之ヲ以テ  
第三條ニ規定スル手續ヲ履行スルモノトシ得ズ

第十六條 鐵道財團ノ債權ヲ擔保スル爲メ前項ノ鐵道財團ニ付抵當權ヲ設定シタルトキハ其ノ抵當權ノ

順位及登録ノ前後ニ依ル

第十七條 抵當權者ハ鐵道財團ニ付他ノ債權者ニ先テ自己ノ債權ノ執行ヲ受クルコトヲ得

第十八條 抵當權者ハ債權ノ全部ノ擔保ヲ受クル迄ハ鐵道財團ノ全部ニ付其ノ權利ヲ行フコトヲ  
得

第十九條 抵當權ハ鐵道財團又ハ之ニ屬スルモノノ讓渡ヲ付滅失又ハ公債損ニ因リテ會社カ受ク  
ル金銀其ノ他ノ物ヲ擔保シテ之ヲ行フコトヲ得但シ抵當權者ハ其ノ擔渡又ハ引渡前ニ差押ヲ  
爲スコトヲ要ス

第二十條 會社カ鐵道財團ヲ讓渡シ付付シ若シテ抵當ト爲シ鐵道財團ニ關スル營業ノ管理委託ヲ  
爲シ其ノ線路ヲ變更シ又ハ其ノ線路ノ全部若ハ一部ニ付營業ヲ休止セムトスルトキ又ハ鐵道  
財團ニ屬スルモノヲ處分セムトスルトキハ抵當權者ニ對シテ異議アリハ一定ノ期間内ニ之ヲ述フ  
ハ差押ヲ催告スヘシ但シ其ノ期間ハ三箇月ヲ下ルコトヲ得ズ

抵當權者カ前項ノ期間内ニ異議ヲ述ヘタルトキハ會社ハ主務官廳ノ規定ヲ求ムヘシ此ノ裁定ハ  
終局トス

抵當權者カ外國ニ住所ヲ有スル場合ニ於テハ第一項ノ期間ハ四箇月ヲ下ルコトヲ得ズ  
本條ノ規定ハ抵當權者カ豫メ同意ヲ與ヘタル場合ニハ之ヲ適用セズ

第二十一條 會社カ鐵道財團ニ關スル工率方法ノ變更ヲ申請シタル場合ニ於テ其ノ變更  
カ鐵道財團ノ價額ヲ著シク減スヘキ時アリト認ムルトキハ主務官廳ハ會社ヲシテ抵當權者ニ對  
シ異議アリハ之ヲ述フハキ旨ヲ催告セシムヘシ  
前條ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第二十二條 免許ノ失効又ハ取消ノ場合ニ於テハ抵當權者ハ其ノ權利ヲ實行スルコトヲ得  
前項ニ依リ抵當權ヲ實行セムトスルトキハ抵當權者ハ免許ノ失効又ハ取消ノ日ヨリ六箇月内ニ  
其ノ手續ヲ爲スヘシ

免許ハ前項ノ期間及抵當權實行ノ終了ニ至ル迄仍存續スルモノト看做ス

第二十三條 債權者カ同一ノ債權ノ擔保トシテ數箇ノ鐵道財團ノ上ニ抵當權ヲ有スル場合ニ於テ  
同時ニ其ノ代價ヲ配當スヘキトキハ其ノ各鐵道財團ノ價額ニ準シテ其ノ債權ノ負擔ヲ分ツ

或鐵道財團ノ代價ノミヲ配當スヘキトキハ抵當權者ハ其ノ代價ニ付債權ノ全部ノ辨濟ヲ受ケル  
コトヲ得此ノ場合ニ於テハ次ノ順位ニ在ル抵當權者ハ前項ノ規定ニ從ヒ右ノ抵當權者カ他ノ鐵  
道財團ニ付辨濟ヲ受クヘキ金額ニ滿シル迄之ニ代位シテ抵當權ヲ行フコトヲ得

第二十四條 前條ノ規定ニ從ヒ代位ニ因リテ抵當權ヲ行フ者ハ其ノ抵當權ノ登録ニ其ノ代位ヲ附  
記スルコトヲ得

第二十五條 抵當權者ハ鐵道財團ノ代價ヲ以テ辨濟ヲ受ケサル債權ノ部分ニ付テノミ他ノ財産ヲ  
以テ辨濟ヲ受ケルコトヲ得

前項ノ規定ハ鐵道財團ノ代價ニ先チテ他ノ財産ノ代價ヲ配當スヘキ場合ニハ之ヲ適用セズ但シ  
他ノ債權者ハ抵當權者ヲシテ前項ノ規定ニ從ヒ辨濟ヲ受ケレムルカ爲之ニ配當スヘキ金額ノ供  
託ヲ請求スルコトヲ得

第二十六條 政府カ鐵道及附屬物件ヲ買上ケタル場合ニ於テ抵當權設定後二十箇年又ハ据置年限  
ヲ經過シタルトキハ抵當附債務ヲ辨濟スルコトヲ得但レ少クトモ一箇年前ニ豫告スヘシ

第二章 登録

第二十七條 鐵道財團ニ關スル登録ヲ爲ス爲主務官廳ニ鐵道抵當原簿ヲ備フ

鐵道抵當原簿ハ一箇ノ鐵道財團ニ付一用紙ヲ設ク

第二十八條 登録ハ本法ニ別段ノ定アル場合ヲ除クノ外當事者ノ申請ニ因リテ之ヲ爲ス

第二十九條 抵當權設定ノ登録申請書ニハ左ノ書面ヲ添附スヘシ

一 抵當權ノ設定ニ關スル證書

二 鐵道財團目錄

當事者ハ抵當權設定認可ノ申請書ニ添附シタル鐵道財團目錄ヲ前項第二號ノ書面トシテ引用ス  
ルコトヲ得

第一項第二號ノ書面ハ第二以下ノ順位ノ抵當權設定ノ登録申請書ニハ之ヲ添附スルコトヲ要セ  
ズ

第三十條 抵當權設定ノ登録ハ鐵道抵當原簿ニ左ノ事項ヲ記載スルニ依リテ之ヲ爲ス

一 第七條第二項第一號乃至第五號ニ掲ケタル事項

二 免許ニ附シタル條件

三 抵當權ヲ設定シタルコト

四 抵當權設定認可ノ年月日

五 登録ノ年月日

第七條第二項第一號及前項第二號ニ掲ケタル事項ハ第二以下ノ順位ノ抵當權ニ付テハ之ヲ登録  
スルコトヲ要セス

第三十一條 登録シタル事項ニ變更ヲ生シ又ハ其ノ事項消滅シタルトキハ當事者ハ遲滞ナク變更



又ハ消滅ノ登録ヲ申請スヘシ

前項ノ申請書ニハ變更又ハ消滅ノ事由ヲ記載シ之ヲ證スル書面ヲ添附スヘシ  
變更又ハ消滅カ主務官廳ノ命令又ハ認可ニ因リテ生シタル場合ニ於テハ前項ノ證明書ハ之ヲ添  
附スルニヨリテ要セス

第三十二條 同一ノ債權ノ擔保トシテ數箇ノ鐵道財團ノ上ニ抵當權ヲ設定シタル場合ニ於テハ其  
ノ各鐵道財團ノ用紙ニ他ノ鐵道財團ヲ表示シ之ト共ニ抵當權ノ目的タル旨ヲ記載スヘシ

他ノ鐵道財團ニ關スル變更又ハ消滅ノ登録カ前項ノ記載ヲ變更スルコトヲ要スルニ至リタルト  
キハ其ノ記載ニ變更ヲ附記シ他ノ鐵道財團ニ關スル消滅ノ登録カ前項ノ記載ヲ要セサルニ至リ  
タルトキハ其ノ記載ヲ抹消スヘシ

第三十三條 鐵道抵當原簿ニ抵當權ノ設定ヲ登録シタルトキハ鐵道財團目錄ニ爲シタル記載ハ登  
録ト同一ノ效力ヲ生ス

第三十四條 鐵道財團目錄ニ記載シタル事項ニ變更ヲ生シ又ハ其ノ事項消滅シタルトキハ會社ハ  
過期シテ其ノ旨ヲ届出ヘシ

前項ノ届書ハ鐵道財團目錄ニ編綴スルニ依リテ前條ノ效力ヲ生ス

第三十五條 一用紙ノ抵當權ノ登録カ全部抹消セラレタルトキハ主務官廳ハ其ノ用紙ヲ閉鎖スヘ  
シ

第三十六條 左ノ場合ニ於テハ主務官廳ハ直ニ其ノ旨ヲ檢査官廳所ニ通知スヘシ但シ第二號ノ場  
合ニ於テハ新ナル檢査官廳所ニ通知スヘシ  
一 第三順位ノ抵當權ノ設定ヲ登録シタルトキ

二 不備要件ニ關シテ權利又新ニ鐵道財團ニ屬シタルトキ

三 鐵道財團ノ用紙ヲ閉鎖スルトキ

前項第二號又ハ第三號ノ場合ニ於テハ主務官廳ハ直ニ官報ヲ以テ其ノ旨ヲ公告スヘシ

第三十七條 登記官更シ前條第一號又ハ第二號ノ通知ヲ受ケタルトキハ第三號ノ通知ヲ受ケル迄  
ハ鐵道財團ノ所有權ニ屬スルモノニ付所有權以外ノ物權、賃借權又ハ差押、假差押若ハ假處分ノ  
登記ヲ爲スコトヲ得ス但シ所有權以外ノ物權、賃借權又ハ差押、假差押若ハ假處分ノ目的タルモ  
ノカ主務官廳ノ證明書ニ依リ鐵道財團ニ屬セサルコト明白ナルトキハ此ノ限ニ在ラス

第三十八條 何人ト雖鐵道抵當原簿及鐵道財團目錄ノ閱覽ヲ請求シ又ハ手数料ヲ納付シテ鐵道抵  
當原簿ノ原本若ハ抄本ノ交付ヲ請求スルコトヲ得

手数料ノ外郵送料ヲ納付シテ鐵道抵當原簿ノ原本又ハ抄本ノ送付ヲ請求スルコトヲ得

第三十九條

鐵道抵當原簿ノ調製、鐵道財團目錄ノ様式其ノ他登録ニ關スル細則ハ主務大臣之ヲ  
定ム

第四十條 強制執行及強制管理

第四十條 鐵道財團ニ對スル抵當權ノ強制執行ハ強制執行又ハ強制管理ニ依リテ之ヲ爲ス  
抵當權者ハ自己ノ選擇ニ依リ前項ニ掲ゲタル一箇ノ方法ヲ以テ又ハ二箇ノ方法ヲ併シテ強制執  
行ヲ爲スコトヲ得

第四十一條 抵當證書又ハ債權證書及之ニ記載シタル事項ヲ變更スル契約證書ハ強制執行ニ關シ  
テハ公證人ノ作成シタル債務名義ト看做ス但シ其ノ執行力アル正本ハ主務官廳ノ官吏之ヲ付與  
ス

第四十二條 強制執行ハ鐵道財團ノ所有者タル會社ノ本店所在地ヲ管轄スル區裁判所ノ管轄ニ專屬ス

第四十三條 強制競賣ノ申立ハ書面ヲ以テ之ヲ爲スヘシ

申立書ニハ左ノ事項ヲ記載シ申立人又ハ其ノ代理人之ニ署名捺印スヘシ

一 債務者タル會社及鐵道財團ノ所有者タル會社ノ商號及其ノ本店ノ所在地

二 競賣ニ付スヘキ鐵道財團ノ表示

三 競賣ノ原因タル事由

四 年月日

五 裁判所

申立書ニハ執行力アル正本ノ外鐵道抵當原簿ノ謄本ヲ添附スヘシ但シ強制管理ノ開始アリタル場合ニ於テハ鐵道抵當原簿ノ謄本ヲ添附スルコトヲ要セス

第四十四條 強制競賣ノ申立ハ競落期日迄ハ競買人ノ同意アル場合ニ限り之ヲ取下クルコトヲ得

第四十五條 競賣手續ノ開始ハ決定ヲ以テ之ヲ爲ス

開始決定ニハ申立人ノ名稱、住所及第四十二條第二項第一號乃至第四號ニ掲ケタル事項ヲ記載シ決定ヲ爲シタル判事之ニ署名捺印スヘシ

第四十六條 裁判所カ競賣手續開始ノ決定ヲ爲シタルトキハ直ニ鐵道抵當原簿ニ競賣申立ノ登録ヲ爲スヘキ旨ヲ主務官廳ニ囑託メヘシ

主務官廳ニ於テ前項ノ囑託ヲ受ケタルトキハ直ニ登録ヲ爲シ其ノ旨ヲ裁判所ニ通知スヘシ

第四十七條 裁判所カ競賣手續開始ノ決定ヲ爲シタルトキハ官報ヲ以テ租稅其ノ他ノ公課ヲ主管

スル官廳及公署ニ對シ一定ノ期間内ニ鐵道財團ノ所有者ニ對スル權利ノ有無及其ノ限度ヲ申出ツヘキ旨ヲ公告スヘシ

第四十八條 裁判所ハ主務官廳ノ意見ヲ聽キ鑑定人ヲ選定シ競賣ニ付スヘキ鐵道財團ヲ評價セシメ其ノ評價額ヲ以テ最低競賣價額ト爲スヘシ

第四十九條 裁判所ハ競賣期日ヲ定メ官報ヲ以テ之ヲ公告スヘシ

前項ノ公告ニハ左ノ事項ヲ記載スヘシ

一 競賣ニ付スヘキ鐵道財團ノ表示

二 競賣期日ノ場所、日時及入札締切ノ時

三 最低競賣價額

四 競落期日ノ場所及日時

五 執行記録ヲ閲覧レ得ヘキ場所

第五十條 鐵道事業ヲ營ム者ニ非シテ競賣ニ加入スルニハ競賣ニ付セラレタル鐵道ノ營業ヲ目的トシ會社ヲ發起セムトスル者七人以上合同スルコトヲ要ス

前項ニ依リ競賣ニ加入スル者ハ競買ノ申込ニ關シテハ連帶シテ其ノ責ニ任ス

第五十一條 前條第一項ニ依リ競賣ニ加入スル者ハ競買ノ申込ト共ニ保證トシテ最低競賣價額百分ノ五ニ相當スル金額ヲ現金又ハ有價證券ヲ以テ供託スヘシ

前項ノ規定ハ競買人ニシテ抵當權者カ之ニ加ハルモノニ付テハ其ノ債權額カ最低競賣價額ノ百分ノ五以上ニ相當スル場合ニ限り之ヲ適用セス

第五十二條 競買の入札の方法ヲ以テ之ヲ行フ

第五十三條 裁判所ハ競買人ニ面シテ於テ入札ヲ開封スヘシ

競落ト爲ルヘキ同價額ノ入札ニ額以上アルトキハ裁判所ハ同價額ノ競買人ヲシテ直ニ再度ノ入札ヲ爲サシムヘシ

再度ノ入札ヲ爲スモ仍同價額ノ入札アルトキハ裁判所ハ直ニ拍賣ヲ以テ最高價競買人ヲ定ムヘシ

第五十四條 競買ニ加入スルコトヲ得ザル者ハ爲シタル入札ハ無効トス

第五十五條 競買期日ニ於テ入札ナキトキ、許スヘキ入札ナキトキ又ハ最低競買價額ニ達スル入札ナキトキハ裁判所ハ職權ヲ以テ更ニ競買期日ヲ定ムヘシ

前項ノ場合ニ於テ裁判所ハ鑑定人ノ意見ヲ聽キ最低競買價額ヲ低減スルコトヲ得

第五十六條 入札ノ之ヲ變更スル者ハ取消スルコトヲ得

入札ノ其ノ入札ヲ爲シタル競買人以外ノ者ニ競落ヲ許ス決定カ確定シタルトキ、競落ヲ許サザル決定カ確定シタルトキ又ハ競落ヲ爲サズシテ競買手續ヲ終了シタルトキハ其ノ效力ヲ失フ

第五十七條 裁判所ハ最高價競買人ノ名稱及其ノ競買價額ヲ表示シ競買ノ終局ヲ告知スヘシ

第五十八條 裁判所ハ競買ニ關スル附書ヲ作成シ左ノ事項ヲ記載スヘシ

- 一 競買ニ付サレシモノノ種類及價額
- 二 競買申立人ノ表示
- 三 入札及開札ノ日時

四 競買價額及競買人ノ名稱住所又ハ入札ナキトキハ許スルモノノ名稱住所又ハ入札ナキトキハ許スルモノノ名稱住所

五 競買ノ終局ヲ告知シタル日時並最價競買人ノ名稱及其ノ競買價額

第五十九條 裁判所ハ競買期日ニ出頭シタル債務者鐵道財團ノ所有者抵當權者及競買人ニ競落ノ許可ニ付陳述ヲ爲サシムヘシ

第六十條 強制競買申立ノ取下若ハ強制執行ノ取消アリタル場合又ハ第四十八條乃至第五十四條若ハ第五十七條ノ規定ニ違反シテ競買ヲ爲シタル場合ニ限り債務者鐵道財團ノ所有者抵當權者又ハ競買人ハ競落ノ許可ニ付異議ヲ申立ヲ爲スコトヲ得

第六十一條 裁判所ハ異議ノ申立ヲ正當トスル場合ニ於テ更ニ競買ヲ許スヘキトキハ職權ヲ以テ競買期日ヲ定ムヘシ

前項ニ依リ競買期日ヲ定ムル場合ノ外競落ノ許否ハ決定ヲ以テ之ヲ言渡スヘシ

第六十二條 競落ノ許可ニ付異議ノ申立ヲ爲シタル者ハ第六十條ニ掲ケタル理由アル場合ニ限り競落ヲ許シ決定ニ對シ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

競落期日ニ出頭シ競落ノ許可ニ付異議ヲ申立ヲ爲サザル者ハ競落ヲ許サザル理由ナキ場合ニ限り競落ヲ許サザル決定ニ對シ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

抗告ハ執行停止ノ效力ヲ有ス

第六十三條 裁判所ハ競落ニ關スル開封書ヲ作成スヘシ

第六十四條 競落ヲ許シ決定カ確定シタルトキハ裁判所ハ其ノ決定ノ原本ヲ主務官廳ニ送付スヘシ

第六十五條 競落代金ハ競落ヲ許シ決定カ確定シタル日又ハ本免許ヲ受タルコトヲ要スル者ニ在

リテハ本免許ヲ受ケタル日ヨリ一週間以内ニ之ヲ裁判所ニ支拂フヘシ但シ債權者カ競落人タル  
 場合ニ於テハ自己カ競落代金中ヨリ受取ルヘキ金額ヲ控除シ其ノ殘額ノミヲ支拂フヲ以テ足ル  
 第六十六條 競落代金ノ支拂アリタルトキハ競賣ニ付セラレタル鐵道財團ニ關スル權利ハ競落人  
 ニ、競落人カ第五十條第一項ニ依リ競賣ニ加入シタル者ナルトキハ其ノ競落人ニ依リテ發起セ  
 ラレタル會社ニ移轉ス

抵當權ハ前項ニ依リ鐵道財團ニ關スル權利カ移轉シタルトキニ消滅ス

第六十七條 本免許狀ノ下付ナキトキ、第七十三條ノ期間内ニ本免許ノ申請ナキトキ又ハ第六十  
 五條ノ期間内ニ競落代金ノ支拂ナキトキハ裁判所ハ職權ヲ以テ競落ヲ許ス決定ヲ取消シ更ニ競  
 賣期日ヲ定ムヘシ

前項ニ依リ競落ヲ許ス決定カ取消サレタルトキハ本免許ハ取消サレタルモノトス  
 競落人ハ新競賣ニ加入スルコトヲ得ス且新競賣ニ於ケル競落代金カ最初ノ競落代金ヨリ少ナキ  
 トキハ其ノ不足額及手續ノ費用ヲ賠償スヘシ

第六十八條 裁判所ハ競落代金ノ中ヨリ順次ニ競賣ノ費用及租稅其ノ他ノ公課ヲ控除シ其ノ殘額  
 ハ抵當權ノ順位ニ從ヒ之ヲ抵當權者ニ配當シ仍殘餘アルトキハ之ヲ鐵道財團ノ所有者ニ交付ス  
 一 前項ノ場合ニ於テハ裁判所ハ其ノ旨ヲ主務官廳ニ通知シ競賣申立ノ登録ノ抹消ヲ囑託スヘシ  
 主務官廳ニ於テ前項ノ囑託ヲ受ケタルトキハ左ノ手續ヲ爲スヘシ

- 一 第四十六條第二項ニ依リテ爲シタル登録及抵當權ノ登録ヲ抹消スルコト
- 二 競落ヲ許ス決定アリタルモノトシテ管轄登記所ニ通知シ競落人又ハ競落人ニ依リテ發起セラレ

スル會社カ取得シタル不動産ニ關スル權利ノ登記並第十一條第二項ニ依リ效力ヲ失ヒタル  
 登記ノ抹消ヲ囑託スルコト

第六十九條 競落ヲ爲サシテ競賣手續ヲ終了シタルトキハ裁判所ハ其ノ旨ヲ主務官廳ニ通知シ  
 競賣申立ノ登録ノ抹消ヲ囑託スヘシ

主務官廳ニ於テ前項ノ囑託ヲ受ケタルトキハ第四十六條第二項ニ依リテ爲シタル登録ヲ抹消ス  
 一 第七十條 裁判所ハ二回以上競賣期日ヲ開始シタルモ入札ナキトキ、許スヘキ入札ナキトキ又

ハ最低競賣價額ニ達スル入札ナキトキハ抵當權者ノ同意アル場合ニ限り競賣ニ付シタル鐵道財  
 團ヲ債權ノモノトシテ競賣ニ付スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ裁判所ハ抵當權者ノ意見ヲ聽キ鐵道財團ニ屬スルモノヲ分割シテ競賣ニ付ス  
 ルコトヲ得

第七十一條 前條ノ競賣ニ關シテハ第四十八條、第四十九條、第五十二條乃至第六十六條、第六十七  
 條第一項、第三項、第六十八條及第六十九條ノ規定ヲ準用ス

競買人ハ競買ノ申込ト共ニ保證トシテ最低競賣價額百分ノ五ニ相當スル金額ヲ現金又ハ有價證  
 券ヲ以テ供託スヘシ

第七十二條 競落人カ第五十條第一項ニ依リ競賣ニ加入シタル者ナルトキハ發起人トナリテ會社  
 ヲ設立スヘシ

第七十三條 競落人ニ依リテ發起セラレタル會社又ハ競落人タル會社ハ競落ヲ許ス決定カ確定シ  
 タル日ヨリ三箇月内ニ本免許ヲ申請スヘシ

第七十四條 鐵道人ニ依リテ發起セラレタル會社カ本免許ヲ申請スルニハ左ニ掲グル書類ヲ添附スルヘシ

一定款

一 發起人ニ於テ株式ノ總數ヲ引受ケタルトキハ検査役カ裁判所ニ爲シタル報告書ノ原本及裁判所カ検査役ノ報告ヲ聽キ爲シタル決定ノ原本

二 株主ヲ募集シタルトキハ株式申込證ノ原本 發起人ニ取締役 監査役又ハ検査役ヨリ創立總會ニ爲シタル報告ノ要領及創立總會ノ議事及決議ノ要領

第七十五條 鐵道人タル會社カ本免許ヲ申請スルニハ一定款ノ變更ト同一方法ノ決議ニ依ルヘシ 本免許ノ申請ハ一定款變更ノ決議認可ノ申請ト共ニ之ヲ爲スヘシ

第七十六條 主務官廳ハ前三條ノ規定ニ依ル申請アリタルトキハ本免許狀ヲ下付スヘシ

第七十七條 本免許ハ會社カ總代理金ヲ支拂ハタルトキニ共ニ效力ヲ生ス

第七十八條 強制管理ニ付テハ第四十三條 第四十五條 乃至第四十七條ノ規定ヲ準用ス

第七十九條 強制管理開始ノ決定確定シタルトキハ裁判所ハ其ノ決定ノ原本ヲ主務官廳ニ送付ス

第八十條 前條決定ノ原本ヲ送付アリタルトキハ主務官廳ハ一人又ハ數人ノ管理人ヲ選任スヘシ但シ強制管理ノ申立人ハ適當ノ人ヲ推薦スルコトヲ得

第八十一條 主務官廳ハ管理人ヲ監督シ、管理方法ニ付指導ヲ爲シ且管理人ニ與フヘキ報酬ノ額

ヲ定ムヘシ

主務官廳ハ前項ニ掲グル事項ニ付債務者、鐵道財團ノ所有者、抵當權者及鑑定人ノ意見ヲ聽クコトヲ得

第八十二條 主務官廳カ管理人ヲ任免シタルトキハ其ノ旨ヲ債務者、鐵道財團ノ所有者、抵當權者及裁判所ニ通知スヘシ

第八十三條 鐵道財團ノ所有者カ管理人選任ノ通知ヲ受ケタルトキハ直ニ鐵道財團ヲ管理人ニ引渡スヘシ

管理人ハ鐵道財團ノ所有者ニ對シ管理ニ必要ナル書類其ノ他ノ物ヲ引渡ラセラルコトヲ得

第八十四條 強制管理ノ申立人ハ管理人ノ請求ニ因リ管理ノ費用ヲ立替支辨スヘシ

第八十五條 管理人ハ鐵道財團ノ管理及收益ニ付必要ナル裁判上又ハ裁判外ノ行爲ヲ爲スヘシ

第八十六條 鐵道財團ノ管理ニ付官廳ニ對スル取締役ノ責任ハ管理人ノ之ヲ負フ

第八十七條 管理人ハ毎營業年度ノ終ニ於テ鐵道財團ノ收入ヨリ順次ニ管理ノ費用、管理人ノ報酬及租稅其ノ他ノ公課ヲ控除シ其ノ剩餘ヲ抵當權者ニ交付スヘシ

第八十八條 管理人ハ每營業年度ノ終ニ於テ計算報告書ヲ主務官廳ニ差出スヘシ

前項ノ期間内ニ異議ヲ申出テサリシ者ハ計算ヲ承認シタルモノト看做ス  
異議ヲ申出テタル者アリタルトキハ主務官廳ハ管理人ノ陳述ヲ聽キタル後之ヲ裁定ス此ノ裁定  
ハ終局トス

第八十九條 管理人ハ前條第二項ノ期間ヲ過キ又ハ前條第四項ノ裁定ヲ經タル後ニ非サレハ抵當  
權者ニ對シ配當額ノ交付ヲ爲スコトヲ得ス

管理人カ配當額ノ交付ヲ爲シタルトキハ抵當權者ノ名稱及配當額ヲ主務官廳及裁判所ニ通知ス  
ハシ

第九十條 強制管理ノ取消ハ裁判所ノ決定ヲ以テ之ヲ爲ス

強制管理ノ申立ヲ爲シタル抵當權者カ辨濟ヲ受ケタルトキハ裁判所ハ強制管理ノ取消ヲ命スハ  
シ

強制管理ノ申立人カ管理費用ノ立替支辨ヲ爲ササルトキハ裁判所ハ管理人ノ申立ニ因リ強制管  
理ノ取消ヲ命スルコトヲ得

第九十一條 前條第二項ノ場合ニ關シテハ第六十八條第二項及第三項ノ規定ヲ準用ス

前項ノ場合ヲ除クノ外強制管理ノ取消ニ關シテハ第六十九條ノ規定ヲ準用ス

第四章 罰則

第九十二條 左ノ場合ニ於テハ取締役又ハ管理人ヲ十圓以上千圓以下ノ過料ニ處ス

一 本法ニ定メタル裁定ヲ遵守セサルトキ

二 第九條ノ規定ニ違反シタルトキ

三 第二十條又ハ第二十一條ノ催告ヲ爲ササルトキ

四 登録ニ關シ不正ノ申請ヲ爲シタルトキ又ハ第三十一條ノ登録ノ申請ヲ爲ササルトキ

五 鐵道財團目錄ニ不正ノ記載ヲ爲シタルトキ、第三十四條ノ届出ヲ爲ササルトキ又ハ不正ノ  
届出ヲ爲シタルトキ

六 管理方法ニ付主務官廳ノ命令ニ違反シタルトキ

七 第八十八條ノ計算報告書ヲ差出ササルトキ又ハ不正ノ報告ヲ爲シタルトキ

八 配當額ノ交付ヲ爲ササルトキ又ハ第八十七條若ハ第八十九條第一項ノ規定ニ違反シテ配當  
額ノ交付ヲ爲シタルトキ

九 第八十九條第二項ノ通知ヲ爲ササルトキ

第九十三條 非訟事件手續法第二百六條乃至第二百八條ノ規定ハ前條ニ定メタル過料ニ之ヲ準用  
ス

附則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル工場抵當法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月十一日

内閣總理大臣 伯爵 桂 太郎  
農商務大臣 男爵 清浦 奎吾  
司法大臣 波多野 敬直

法律第五十四號(官報三月十三日)

工場抵當法

第一條 本法ニ於テ工場ト稱スルハ營業ノ爲物品ノ製造者ハ加工又ハ印刷者ハ攝影ノ目的ニ使用スル場所ヲ謂フ

營業ノ爲電氣又ハ瓦斯ノ供給ノ目的ニ使用スル場所ハ之ヲ工場ト看做ス

第二條 工場ノ所有者カ工場ニ屬スル土地ノ上ニ設定シタル抵當權ハ建物ヲ除クノ外其ノ土地ニ附加シテ之ト一體ヲ成シタル物及其ノ土地ニ備附ケタル機械、器具其ノ他工場ノ用ニ供スル物ニ及フ但シ設定行爲ニ別段ノ定アルトキ及民法第四百二十四條ノ規定ニ依リ債權者カ債務者ノ行爲ヲ取消スコトヲ得ル場合ハ此ノ限ニ在ラス

前項ノ規定ハ工場ノ所有者カ工場ニ屬スル建物ノ上ニ設定シタル抵當權ニ之ヲ準用ス

第三條 工場ノ所有者カ工場ニ屬スル土地又ハ建物ニ付抵當權設定ノ登記ヲ申請スル場合ニ於テハ其ノ土地又ハ建物ニ備附ケタル機械、器具其ノ他工場ノ用ニ供スル物ニシテ前條ノ規定ニ依リ抵當權ノ目的タルモノノ目錄ヲ提出スヘシ

第二十二條第二項、第三十五條及第三十八條乃至第四十二條ノ規定ハ前項ノ目錄ニ之ヲ準用ス

第四條 第二條第一項但書ニ掲ゲタル別段ノ定アルトキハ抵當權設定ノ登記ノ申請書ニ之ヲ記載スヘシ

第五條 抵當權ハ第二條ノ規定ニ依リテ其ノ目的タル物カ第三取得者ニ引渡サレタル後ト雖其ノ物ニ付之ヲ行フコトヲ得

前項ノ規定ハ民法第九十二條乃至第九十四條ノ適用ヲ妨ケズ

第六條 工場ノ所有者カ抵當權者ノ同意ヲ得テ土地又ハ建物ニ附加シテ之ト一體ヲ成シタル物ヲ土地又ハ建物ト分離シタルトキハ抵當權ハ其ノ物ニ付消滅ス

工場ノ所有者カ抵當權者ノ同意ヲ得テ土地又ハ建物ニ備附ケタル機械、器具其ノ他ノ物ノ備附ヲ止メタルトキハ抵當權ハ其ノ物ニ付消滅ス

工場ノ所有者カ抵當權者ノ爲差押、假差押又ハ假處分アル前ニ於テ正當ナル事由ニ因リ前二項ノ同意ヲ求メタルトキハ抵當權者ハ其ノ同意ヲ拒ムコトヲ得ス

第七條 抵當權ノ目的タル土地又ハ建物ノ差押、假差押又ハ假處分ハ第二條ノ規定ニ依リテ抵當權ノ目的タル物ニ及フ

第二條ノ規定ニ依リテ抵當權ノ目的タル物ハ土地又ハ建物ト共ニスルニ非サレハ差押、假差押又ハ假處分ノ目的ト爲スコトヲ得ス

第八條 工場ノ所有者ハ抵當權ノ目的ト爲ス爲一箇又ハ數箇ノ工場ニ付工場財團ヲ設クルコトヲ得數箇ノ工場カ各別ノ所有者ニ屬スルトキ亦同シ

工場財團ニ屬スルモノハ同時ニ他ノ財團ニ屬スルコトヲ得ス

工場財團ハ抵當權ノ消滅ニ因リテ消滅ス

第九條 工場財團ノ設定ハ工場財團登記簿ニ所有權保存ノ登記ヲ爲スニ依リテ之ヲ爲ス

第十條 工場財團ノ所有權保存ノ登記ハ其ノ登記後二箇月内ニ抵當權設定ノ登記ヲ受ケサルトキハ其ノ效力ヲ失フ

第十一條 工場財團ハ左ニ掲グルモノノ全部又ハ一部ヲ以テ之ヲ組成スルコトヲ得

- 一 工場ニ屬スル土地及工作物

二 機械、器具、電柱、電線、配置諸管、軌條其ノ他ノ附屬物

三 地上權

四 貸貸人ノ承諾アルトキハ物ノ賃借權

五 工業所有權

第十二條 工場ニ屬スル土地又ハ建物ニシテ未登記ノモノアルトキハ工場財團ヲ設クル前其ノ所有權保存ノ登記ヲ受クヘシ

第十三條 他人ノ權利ノ目的タルモノ又ハ差押、假差押若ハ假處分ノ目的タルモノハ工場財團ニ屬セシムルコトヲ得ス

工場財團ニ屬スルモノハ之ヲ讓渡シ又ハ所有權以外ノ權利、差押、假差押若ハ假處分ノ目的ト爲スコトヲ得ス但シ抵當權者ノ同意ヲ得テ貸貸ヲ爲スハ此ノ限ニ在ラス

第十四條 工場財團ハ之ヲ一箇ノ不動産ト看做ス

工場財團ハ所有權及抵當權以外ノ權利ノ目的タルコトヲ得ス但シ抵當權者ノ同意ヲ得テ之ヲ貸貸スルハ此ノ限ニ在ラス

第十五條 工場ノ所有者カ抵當權者ノ同意ヲ得テ工場財團ニ屬スルモノヲ財團ヨリ分離シタルトキハ抵當權ハ其ノモノニ付消滅ス

第十六條 第三項ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第十七條 第二條、民法第三百七十一條、第三百八十八條及第三百八十九條ノ規定ハ土地又ハ建物カ抵當權ノ目的タル工場財團ニ屬スル場合ニ之ヲ準用ス

第十八條 第二項ノ規定ハ要役地カ抵當權ノ目的タル工場財團ニ屬スル場合ニ之ヲ準用ス

民法第三百九十八條ノ規定ハ地上權カ抵當權ノ目的タル工場財團ニ屬スル場合ニ之ヲ準用ス

第十七條 工場財團ノ登記ニ付テハ工場所在地ノ區裁判所又ハ其ノ出張所ヲ以テ管轄登記所トス

不動産登記法第八條第二項ノ規定ハ工場カ數箇ノ登記所ノ管轄地ニ跨カリ又ハ工場財團ヲ組成スル數箇ノ工場カ數箇ノ登記所ノ管轄地内ニ在ル場合ニ之ヲ準用ス

第十八條 各登記所ニ工場財團登記簿ヲ備フ

第十九條 工場財團登記簿ハ一箇ノ工場財團ニ付一用紙ヲ備フ

第二十條 工場財團登記簿ハ其ノ一用紙ヲ登記番號欄、表題部及甲乙ノ二區ニ分チ表題部ニ表示欄、表示番號欄ヲ設ケ各區ニ事項欄、順位番號欄ヲ設ク

登記番號欄ニハ各財團ニ付登記簿ニ始メテ登記ヲ爲シタル順序ヲ記載ス

表示欄ニハ工場財團ノ表示ヲ爲シ及其ノ變更ニ關スル事項ヲ記載シ表示番號欄ニハ表示欄ニ登記事項ヲ記載シタル順序ヲ記載ス

甲區事項欄ニハ所有權ニ關スル事項ヲ記載ス

乙區事項欄ニハ抵當權ニ關スル事項ヲ記載ス

順位番號欄ニハ事項欄ニ登記事項ヲ記載シタル順序ヲ記載ス

第二十一條 登記ノ申請書ニハ不動産登記法第三十六條第三號乃至第八號ニ掲ケタル事項ノ外左ノ事項ヲ記載スヘシ

一 工場ノ名稱及位置

二 主タル營業所

三 營業ノ種類



第二十二條 工場財團ニ付所有權保存ノ登記ヲ申請スル場合ニ於テハ不動産登記法第三十五條第

一項ニ掲ケタル書面ノ外工場財團目錄ヲ提出スヘシ

前項ノ目錄ニハ工場財團ヲ組成スルモノノ表示ヲ掲ケ申請人之ニ署名捺印スヘシ

第二十三條 所有權保存ノ登記ノ申請アリタルトキハ其ノ財團ニ屬スヘキモノニシテ登記アルモ

ノニ付テハ登記官吏ハ職權ヲ以テ其ノ登記用紙中相當區事項欄ニ工場財團ニ屬スヘキモノトシ

テ其ノ財團ニ付所有權保存ノ登記ノ申請アリタル旨申請書受付ノ年月日及受付番號ヲ記載ス

ヘシ

前項ニ掲ケタルモノカ他ノ登記所ノ管轄ニ屬スルトキハ前項ノ規定ニ依リ記載スヘキ事項ヲ遲

滯ナク管轄登記所ニ通知スヘシ

前項ノ通知ヲ受ケタル登記所ハ第一項ノ手續ヲ爲シ其ノ登記簿ノ謄本ヲ通知ヲ爲シタル登記所

ニ送付スヘシ但シ其ノ謄本ニハ抹消ニ係ル事項ヲ記載スルコトヲ要セス

前二項ノ規定ハ工業所有權カ工場財團ニ屬スヘキ場合ニ之ヲ準用ス但シ通知ハ之ヲ特許局ニ爲

スヘシ

第二十四條 前條ノ場合ニ於テ登記官吏ハ官報ヲ以テ工場財團ニ屬スヘキ動産ニ付權利ヲ有スル

者又ハ差押假差押若ハ假處分ノ債權者ハ一定ノ期間内ニ其ノ權利ヲ申出ツヘキ旨ヲ公告スヘ

シ但シ其ノ期間ハ一箇月以上三箇月以下トス

前項ノ公告ハ所有權保存ノ登記ノ申請カ期間ノ満了前ニ却下セラレタルトキハ遲滯ナク之ヲ取

消スヘシ

第二十五條 前條第一項ノ期間内ニ權利ノ申出ナキトキハ其ノ權利ハ存在セザルモノト看做シ差

押假差押又ハ假處分ハ其ノ效力ヲ失フ但シ所有權保存ノ登記ノ申請若却下セラレタルトキ又

ハ其ノ登記カ效力ヲ失ヒタルトキハ此ノ限ニ在ラス

第二十六條 第二十四條第一項ノ期間内ニ權利ノ申出アリタルトキハ遲滯ナク其ノ旨ヲ所有權保

存ノ登記ノ申請人ニ通知スヘシ

第二十七條 所有權保存ノ登記ノ申請ハ不動産登記法第四十九條ニ掲ケタル場合ノ外左ノ場合ニ

於テ之ヲ却下スヘシ

一 登記簿若ハ其ノ謄本又ハ登録ニ關スル原簿ノ謄本ニ依リ工場財團ニ屬スヘキモノカ他人ノ

權利ノ目的タルコト又ハ差押假差押若ハ假處分ノ目的タルコト明白ナルトキ

二 工場財團目錄ニ掲ケタルモノノ表示カ登記簿若ハ其ノ謄本又ハ登録ニ關スル原簿ノ謄本ト

抵觸スルトキ

三 工場財團ニ屬スヘキ動産ニ付權利ヲ有スル者又ハ差押假差押若ハ假處分ノ債權者カ其ノ

權利ヲ申出テタル場合ニ於テ遲クトモ第二十四條第一項ノ期間満了後二週間内ニ其ノ申出

ノ取消ヲササルトキ又ハ其ノ申出ノ理由ナキコトノ證明アラザルトキ

第二十八條 登記官吏カ所有權保存ノ登記ノ申請ヲ却下シタルトキハ第二十三條第二項ノ規定ニ

依リテ爲シタル記載ヲ抹消スヘシ

他ノ登記所又ハ特許局ニ所有權保存ノ登記ノ申請アリタル旨ヲ通知シタル場合ニ於テハ其ノ申

請ヲ却下シタル旨ヲ遲滯ナク通知スヘシ

前項ノ通知ヲ受ケタル登記所又ハ特許局ハ第二十三條第三項又ハ第四項ノ規定ニ依リテ爲シタ

ル記載ヲ抹消スヘシ

第二十九條 工場財團ニ屬スヘキモノニシテ登記又ハ登録アルモノハ第二十三條ノ記載アリタル後ハ之ヲ讓渡シ又ハ所有權以外ノ權利ノ目的ト爲スコトヲ得ス

第三十條 第二十三條ノ記載アリタル後競買申立ノ登記アリタル場合ニ於テハ所有權保存ノ登記ノ申請カ却下セラレサル間及其ノ登記カ效力ヲ失ハサル間ハ競落ヲ許ス決定ヲ爲スコトヲ得ス

第三十一條 第二十三條ノ記載アリタル後ニ爲シタル差押、假差押若ハ假處分ノ登記又ハ先取特權ノ保存ノ登記ハ抵當權設定ノ登記アリタルトキハ其ノ效力ヲ失フ

第三十二條 前條ノ規定ニ依リ差押、假差押又ハ假處分ノ登記カ其ノ效力ヲ失ヒタルトキハ裁判所ハ利害關係人ノ申立ニ因リ差押、假差押又ハ假處分ノ命令ヲ取消スヘシ

第三十三條 工場財團ニ屬スヘキ動産ハ第二十四條第一項ノ公告アリタル後ハ之ヲ讓渡シ又ハ所有權以外ノ權利ノ目的ト爲スコトヲ得ス

第三十四條 第一項ノ公告アリタル後差押アリタルトキハ第三十條ノ規定ヲ準用ス

第二十四條第一項ノ公告アリタル後差押、假差押又ハ假處分アリタル場合ニ於テ抵當權設定ノ登記アリタルトキハ差押、假差押又ハ假處分ハ其ノ效力ヲ失フ

第三十四條 登記官吏カ所有權保存ノ登記ヲ爲シタルトキハ其ノ財團ニ屬シタルモノノ登記用紙中相當區事項欄ニ工場財團ニ屬シタル旨ヲ記載スヘシ

第二十三條第二項乃至第四項ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス但シ登記簿又ハ登録ニ關スル原簿ノ謄本ノ送付ヲ要セス

第三十五條 所有權保存ノ登記アリタルトキハ工場財團目録ハ之ヲ登記簿ノ一部ト看做シ其ノ記載ハ之ヲ登記ト看做ス

第三十六條 工場財團ノ抵當權設定ノ登記ノ申請ハ不動産登記法第四十九條ニ掲ケタル場合ノ外第十條ノ期間ヲ經過シタル場合ニ於テ之ヲ却下スヘシ

第三十七條 登記官吏カ抵當權設定ノ登記ヲ爲シタルトキハ第三十一條ノ規定ニ依リ效力ヲ失ヒタル登記ヲ抹消スヘシ

第二十三條第二項及第三項ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス但シ登記簿謄本ノ送付ヲ要セス

第三十八條 工場財團目録ニ掲ケタル事項ニ變更ヲ生シタルトキハ所有者ハ遲滞ナク工場財團目録ノ記載ノ變更ノ登記ヲ申請スヘシ

前項ノ登記ノ申請書ニハ抵當權者ノ同意書又ハ之ニ代ルヘキ裁判ノ謄本ヲ添付スヘシ

第三十九條 工場財團ニ屬スルモノニ變更ヲ生シ又ハ新ニ他ノモノヲ財團ニ屬セシメタルニ因リ變更ノ登記ヲ申請スルトキハ變更シタルモノ又ハ新ニ屬シタルモノノ表示ヲ掲ケタル目録ヲ提出スヘシ

前項ノ規定ニ依リ提出シタル目録ハ工場財團目録ニ編綴シ登記官吏其ノ綴目ニ契印スヘシ

第四十條 工場財團ニ屬スルモノニ變更ヲ生シタルニ因リ變更ノ登記ノ申請アリタルトキハ前ノ目録中共ノモノノ表示ノ側ニ共ノモノニ變更ヲ生シタル旨、申請書受付ノ年月日及受付番號ヲ記載スヘシ

第四十一條 新ニ他ノモノヲ財團ニ屬セシメタルニ因リ變更ノ登記ノ申請アリタルトキハ前ノ目録ノ末尾ニ新ニ他ノモノヲ財團ニ屬セシメタル旨、申請書受付ノ年月日及受付番號ヲ記載スヘシ

第四十二條 工場財團ニ屬シタルモノカ滅失シ又ハ財團ニ屬セサルニ至リタルニ因リ變更ノ登記

ノ申請アリタルトキハ目錄中其ノ登記ノ目的タルモノノ表示ノ側ニ其ノモノカ滅失シ又ハ財團ニ屬セサルニ至リタル旨申請書受付ノ年月日及受付番號ヲ記載シ其ノモノノ表示ヲ抹消スヘシ

第四十三條 第二十三條乃至第二十四條及第三十七條ノ規定ハ新ニ他ノモノヲ財團ニ屬セシメタルニ因リ變更ノ登記ノ申請アリタル場合ニ之ヲ準用ス

第四十四條 工場財團ニ屬セタルモノニシテ登記アルモノカ滅失シ又ハ財團ニ屬セサルニ至リタルニ因リ變更ノ登記ノ申請アリタルトキハ其ノモノノ登記用紙中相當區事項欄ニ其ノ旨ヲ記載シ第二十三條及第三十四條ノ記載ヲ抹消スヘシ

前項ニ掲ケタルモノカ他ノ登記所ノ管轄ニ屬スルトキハ其ノモノカ滅失シ又ハ財團ニ屬セサルニ至リタル旨ヲ連帶ナク管轄登記所ニ通知スヘシ

前項ノ通知ヲ受ケタル登記所ハ第一項ノ手續ヲ爲スヘシ

前二項ノ規定ハ工場財團ニ屬セタル工業所有権カ消滅シ又ハ財團ニ屬セサルニ至リタル場合ニ之ヲ準用ス但シ通知ハ之ヲ特許局ニ爲スヘシ

第四十五條 工場財團ノ差押、假差押又ハ假處分ハ工場所在地ノ區裁判所ノ管轄トス

民事訴訟法第三十六條ノ規定ハ工場カ數箇ノ區裁判所ノ管轄地ニ跨カリ又ハ工場財團ヲ組成スル數箇ノ工場カ數箇ノ區裁判所ノ管轄地内ニ在ル場合ニ之ヲ準用ス

第四十六條 裁判所ハ抵當權者ノ申立ニ因リ工場財團ヲ數箇ノモノトシテ競賣又ハ入札ニ付スルニ旨ヲ命スルコトヲ得

第四十七條 民事訴訟法第七百條又ハ競賣法第三十三條ノ規定ニ依リ登記ノ憑託ヲ爲スヘキ場合ニ於テ工場財團ノ抵當權カ競落ニ因リ消滅シタルトキハ裁判所ハ同時ニ工場財團ニ屬シタル土地、建物、船舶又ハ工業所有権ニ付第二十三條及第三十四條ノ記載ノ抹消及競落人ノ取得シタル權利ノ登記又ハ登録ヲ管轄登記所又ハ特許局ニ囑託スヘシ

第四十八條 工場財團登記簿ハ所有權保存ノ登記カ其ノ效力ヲ失ヒタルトキ又ハ抵當權ノ登記カ全部抹消セラレタルトキハ其ノ用紙ヲ閉鎖スヘシ

第四十九條 工場ノ所有者又ハ法律ニ依リ之ニ代リテ一切ノ行為ヲ爲ス權限ヲ有スル者カ讓渡又ハ質入ノ目的ヲ以テ第二條ノ規定ニ依リ抵當權ノ目的タル物ヲ第三者ニ引渡シ又ハ引渡サシメタルトキハ十五日以上二月以下ノ重禁錮ニ處ス

前項ニ規定シタル行為ト雖刑法ニ正條アルモノハ刑法ニ從フ

第五十條 工場ノ所有者カ抵當權ノ目的ト爲シタル物又ハ抵當權ノ目的ト爲シタル工場財團ニ屬スル物ヲ毀損シ又ハ毀損セシメタルトキハ刑法第四百十七條乃至第四百二十三條ノ例ニ照シ各一等ヲ減ス

附則  
本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル鐵業抵當法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月十一日

內閣總理大臣 伯耆 桂 太郎

農商務大臣 野村浩平  
司法大臣 波多野敬直

法律第五十五號(官報 三月十三日)

礦業抵當法

第一條 採掘權者ハ抵當權ノ目的ト爲ス爲礦業財團ヲ設クルコトヲ得

第二條 礦業財團ハ左ニ掲グルモノニシテ礦業ニ關シ同一採掘權者ニ屬スルモノノ全部又ハ一部ヲ以テ之ヲ組成スルコトヲ得

- 一 礦業權
- 二 土地及工作物
- 三 地上權及土地ノ使用權
- 四 貸貸人ノ承諾アルトキハ物ノ賃借權
- 五 機械器具車輛船舶牛馬其ノ他ノ附屬物

第三條 礦業財團ニ付テハ工場抵當法中工場財團ニ關スル規定ヲ準用ス

第四條 採掘權取消ノ登錄アリタルトキハ鑛山監督署長ハ直ニ之ヲ抵當權者ニ通知スヘシ

前項ノ場合ニ於テハ抵當權者ハ直ニ其ノ權利ヲ實行スルコトヲ得

前項ノ規定ニ依リ抵當權ヲ實行セムトスルトキハ抵當權者ハ第一項ノ通知ヲ受ケタル日ヨリ六箇月内ニ其ノ手續ヲ爲スヘシ

採掘權ハ前項ノ期間内又ハ抵當權實行ノ終了ニ至ル迄抵當權實行ノ目的ノ範圍内ニ於テ仍存續スルモノト看做ス

競落人又ハ競落人ニ依リテ設立セラレタル法人ハ採掘權取消ノ登錄アリタルトキニ於テ採掘權ヲ讓受ケタルモノト看做ス

前二項ノ規定ハ錯誤ニ因リ礦業ノ出願カ許可セラレタル場合又ハ礦業カ公益ヲ害スルモノト認メラレタル場合ニ於ケル採掘權ノ取消ニ關シテハ之ヲ適用セス

第五條 前條ノ規定ハ採掘權者カ廢業シタル場合ニ之ヲ準用ス

第六條 競買ニ付セラレタル礦業ヲ目的トシ帝國法律ニ從ヒ法人ヲ設立セムトスル者カ競買ニ加入スルトキハ競買ノ申込ト同時ニ其ノ旨ヲ執行裁判所ニ申出ツヘシ

前項ノ規定ニ依リ競買ニ加入スル者ハ競買ノ申込ニ關シテハ連帶シテ其ノ責ニ任ス

第七條 礦業財團ノ競落人カ前條第一項ノ規定ニ依リ競買ニ加入シタル者ナルトキハ競落ヲ許ス決定カ確定シタル日ヨリ三箇月内ニ法人ヲ設立シ之ヲ執行裁判所ニ届出ツヘシ

第八條 前條ノ競落人ハ法人設立ノ日ヨリ一週間以内ニ競落代金ヲ執行裁判所ニ支拂フヘシ但シ債權者カ競落人タル場合ニ於テハ自己カ競落代金中ヨリ受取ルヘキ金額ヲ控除シ其ノ殘額ノミヲ支拂フヲ以テ足ル

第九條 前條ノ規定ニ依リ競落代金ノ支拂アリタルトキハ競買ニ付セラレタル礦業財團ノ所有權ハ競落人ニ依リテ設立セラレタル法人ニ移轉ス

第十條 第七條ノ期間内ニ法人設立ノ届出ナキトキ又ハ第八條ノ期間内ニ競落代金ノ支拂ナキトキハ執行裁判所ハ職權ヲ以テ礦業財團ノ再競買ヲ命スヘシ

前項ノ再競買ニ關シテハ民事訴訟法第六百八十八條ノ規定ヲ準用ス

第十一條 工場抵當法中工場財團ニ關スル罰則ハ礦業財團ニ關シ之ヲ準用ス